

湘南 サッカー 半世紀を経て



岩間二郎追悼記念



記念誌

湘南サッカー半世紀を経て

湘南サッカー部OB会

表紙・題字・天野武一・画・石川滋彦

ごあいさつ



湘南サッカーボークOB会会長

天野武一

この度、私どもは、岩渕二郎追悼記念事業の一環として、記念誌「湘南サッカー・半世紀を経て」を編集発行すること及び母校湘南高校のグラウンドに練習用のシュート板を設置することを企画して、美事にこれを達成しました。これはひとえに故人の死を哀惜しその業績をしのぶ安保隆文、相羽克治両君のお働きを中心とするOB諸君らのご尽力の賜であります。同時にまた、母校サッカーボークの鈴木部長先生はじめ学校側のご理解、ご協力と、岩渕未亡人のご諒承を煩わしてはじめて実現したものです。まことに感謝にたえません。

さて、サッカーボークにとって、まずこのような記念誌をつくること自体が、はじめての経験であります。それだけに事に当られた各位には、たいへんお骨折りをかける結果となつたのであります。それにつけても、私は、故人が少年時代からその生涯をかけて、母校のサッカーのために情熱を傾注しつくした気性を知る仲間のひとりとして、なつかしく往時の面影を回想するとともに、なお現在にいたるOB諸君の温い友情を眼前にして、一種の感動を覚えざるをえないであります。とくにこの記念誌の表紙をお書き下さった石川滋彦画伯は、ここにご紹介するまでもなく、早くから画壇に名を馳せた俊秀であられます。湘南中学在学中は故人とともに鎌倉から通学し、サッカーボーク員として球を蹴り合つた仲間であります。今

回、この友の作品に接したことは、故人にとってどんなにうれしいことかを想うとき、私どももまた、石川画伯のご厚意に対し、ありがたく御礼を申し上げなければなりません。

次は、シュート板のことです。私は、このときにあたり、シュート板を母校にプレゼントするというアイデアのすばらしさに感心しました。そして、故人がその足でこれに向って球を蹴りつけることができたらさぞ喜んだであろうと、すぐそれを思いました。虎は死して友をのこし、人は死して名をのこすと申しますが、どうやら岩渕二郎は死してシュート板をのこしたのではないかと、声をかけたくなるのであります。願わくは母校の先輩、後輩の諸君、このシュート板に向って球を蹴りまくって下さい。かつて母校蹴球部が全国制覇をなしこそた当時の初代校長赤木愛太郎先生は、「蹴って蹴り、蹴りに蹴ったり日本一」と詠んで、その優勝に痛快の声をあげられたものでした。

ともあれ、これらの企画の実行に際してお寄せ下さった関係各位にご熱意とお力添えは、ただ感謝のほかありません。そして、本当にご苦労さまでした。ここに、各位のご自愛とご健闘を御願いして、ごあいさつといたします。



湘南サッカー部前部長・監督

宮 原 孝 雄

私が湘南の教師になり、同時にサッカー部の顧問に就任したのは、昭和30年の春であった。その頃は、どうしたわけか半世紀を過ぎた湘南サッカーの歴史の中で、もっとも低迷していた時代と思われる。戦前、戦後の名選手輩出の時と比べ、数10名を越える部員を擁する現在をみ、息息えんえんだったなあと今さらながら思う。特に32年・33年頃は、チームを編成するのがやっとというほどだった。

しかし、誇りと伝統はありがたいもの、そんなときであっても、いつかはなんとかする。今は雌伏の時代と指導者も部員も暗黙のうちに心ではそう思っていた。それは亡き岩渕先生の「湘南は切れても錦だ、どんなときでも全国第1等のチームになることを目標にして努力するんだ」の口ぐせが全員の身についていたからかもしれない。だから、その頃の部員とグラウンドで会っても、皆、晴れがましく、堂々としている。やはり脈々と続く湘南サッカーの一時期、一時代を全力を尽してやり遂げた、そして責任を果たしたという自負が、そうさせていたのかなど、私は思ってみたりする。

次に、私がなんとか責任を果たしたと、ひそかに思っていることは、6年間の在職中の最後の年に3年計画で強化したチームが花を咲かせたことである。このチームは水戸で開催された関東大会に出場し、4チーム出場してきた埼玉勢とすべて対戦し、浦和（二回戦）秩父（準々決勝）、川口（準決勝）の3チームを連破し、決勝で市浦和に惜敗することになるが歴史に残る好チームだと思っている。このことは学校でも評価され、その時の3年生は赤木賞を受賞している。

特に2回戦で、前年度の優勝校で、定期戦3連敗の浦和高を敗った時の感激は、
2-0とリードした後、“落ちつけ、落ちつけ”と言いながら、マッチをくわえ、
タバコで火をつけようとした岩渕先生の姿とともに、20年経った今でも脳裏にはっ
きりやきついている。

その頃、発刊された「湘南スポーツ」に寄稿した大会の反省文から、対浦和戦の
部分だけを抜すいして次に記し、歴史の一端に責任をもった者の思い出としたい。

…………… 総合力のあらん限りをもって力いっぱい戦うことが試合に
のぞむ我々の心境であった、そして5-1の大差をもって完膚なきまでに、これを
やっつけた時の感激は、我々の終生忘れることの出来ないものである。60分のゲー
ムが終って、タイムアップを告げるホイッスルの音、どっとベンチから起る喜び
のどよめき、肩をたたきあって健斗を称え喜び合った11人のプレイヤー達みんな
さまざまと思い浮べることができる、それから応援団の持つ校旗、団旗を囲んで、
炎天の水戸の空高く凱歌をあげて勇躍宿舎に引きあげたのだった。しかし、我々は、
これで事足れりとせず、決して有頂天にならず、明日からの事のみを考え、何事も
なかったようにその夜は静かに休んだ。……………

水戸で過した一週間が、湘南サッカーの歴史の一端に責任を持った者の思い出と
しては最も凝縮されたものになっている。



湘南サッカー部部長・監督

鈴木 中

24名の卒業生を送り出し春を迎えると、また、20数名の新入部員を迎え、総勢50名余りの選手がグランドせましと、毎日走りまわっている。近年、スポーツ少年団の発展とともに、藤沢、鎌倉地区の中学校のサッカーも活発化し、その中から数名の経験者が湘南に入るようになって来た。昭和36年に赴任してから早や20年。関東大会8回、団体2回、全国選手権2回の県代表、関東大会優勝1回の実績も昭和45年頃からまったく影をひそめ、久しく代表の座を得ていない。昭和36年神奈川県予選参加校24校も、現在は150校以上になりそのトップに立つのは非常に苦しい状態となっている。しかし、ここ数年ベスト4~8位のところは常に保っているので、今一歩という所である。亡き岩渕先生のためにも、私自身のためにも、もう一度県代表のチームを作って中央の大会で、“湘南健在なり”の姿を全国にお見せしたいと毎日がんばっている。

O.B.の皆様方には、種々のご援助に対し厚く御礼申し上げます。

特 別 寄 稿



元湘南高校長・サッカー部長

神奈川県サッカー協会顧問

香 川 幹 一

湘南中学17年、それからサッカー歴40年、従って50余年の歴史のうち、僕の印象に焼きつくのは昭和21年国民大育大会が行われた第1回に、サッカーチームが全国優勝したことであった。決勝の相手は名にし負う神戸一中、部長は高山さんであつた。決勝点3-2のうち、70%余は先方の攻撃で、30%が湘南の攻撃、到底かなわぬとあきらめながらも、力の限りをつくした事は事実であった。常に負け戦で、いよいよ最後に、桑田孝の右からのコーナーキックが、神戸ゴールの左上隅をぬけて、これが3-2の栄誉ある優勝戦となったわけだが、この感激は今でも忘れない。特に目立ったのはF君の突進力、宮沢君の着実なプレー、松岡君を中心とする猪突猛進型。山中康央君の正確なバックスの守備、佐々木茂君の着実な補手、原田徳夫君のねばり、早川忠生君の球さばき、松浦正美君のバックスの大蹴り、三橋弘美君のねばり、村主剛君の着実性など、みるべきものは多かった。いまその後を偲んでみても、よくやったものだの一語につきる。

赤木校長は野球だけは在職中は禁じた。ボールを中心に、一人一人が注意しないと広い運動場が使えないからだ。そこへ行くとサッカーは、ボールが当っても痛くもない。それでサッカーを無上の運動とした。そのサッカーが野球より先に全国制覇をなしとげた事は、僕の長い生涯にとって、忘れることが出来ない喜びである。2回生の岩渕君は私が小田原高校在職中、同校を強くしようとして、引張ったが、どうしてもこなかった。湘南以外にサッカーはやらないと堅く決心したのだろう。神戸一中との決勝戦の時は、大塙正雄君が総監督で千田敬三君も部長、竹下直之君も部長であった。優勝旗を手にして、その夜、大阪に桑田孝君の父上が居られたの

で、大変なご馳走にあづかった事もいまも思い出す。

総力をあげた優勝ではあったが、その報告を徹夜で書いた原稿は浜名湖上を通る鉄橋の音で、いまも残っている。その時、千田君が、香川さん未だ起きているのかとじっと、僕の涙と共に綴った文面を、熱い涙で眺めていたことを思い出した。

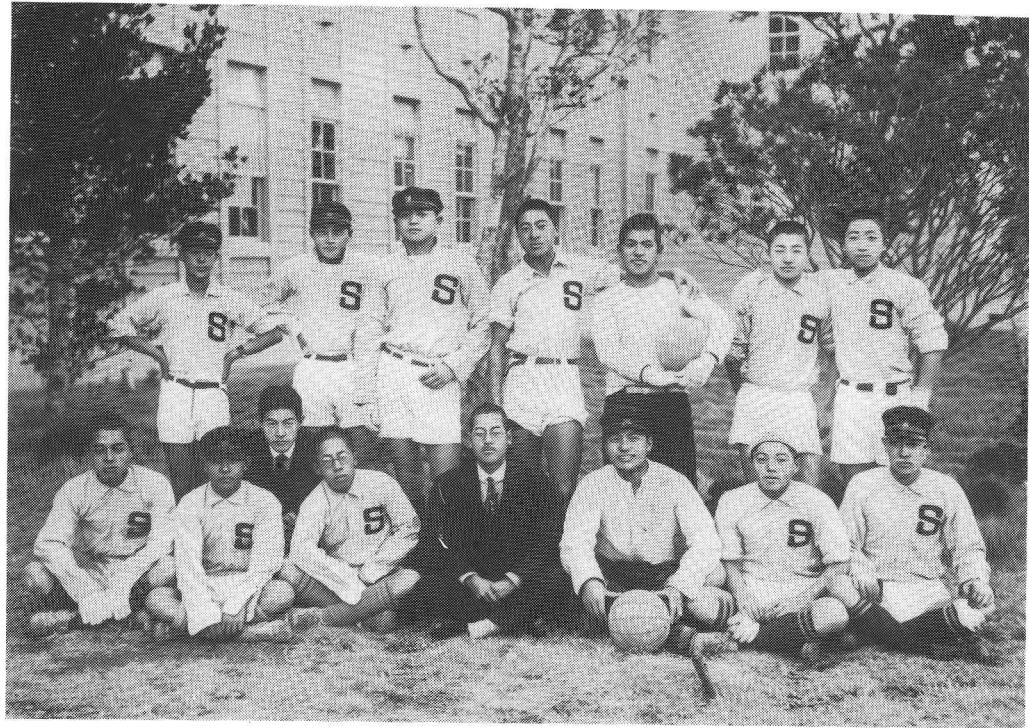
藤田得利君も岩渕君と共に、よく面倒をみてくれた。藤田君はバックスを特に指導した。竹腰さんは松丸さんと共に、練習試合の批評をした。岡野俊一郎さんは、その後湘南で、関東サッカー大会があった時、講師として指導して貰ったのが最初で、僕の3人の息子の最後の弟（今オランダのアムステルダム駐在）のころである。早川純生君は、初のサッカー理事長として活躍し、関根智治君が副理事長でサッカーでは目のない男、片岡次夫君とも友人になり戸田達雄君も熱心なサッカー顧問である。戸田さんとは、小田原高校時代の指導者として、小田原が湘南を負かしたころの指導者で、久保寺君（故人）とともに小田原の名指導者である。

小金義照さんを会長としてもってきたのも、僕の力の一部とみてよい。小田原高校の古い卒業生の一人で、いまも名誉会長になってもらっている。河野一郎さん宅へも寄付金を貰いに行ったり、弟の謙三さんは平塚に住み、度々サッカーの事でお世話になり、二男稔の三井物産就職に当たっては、謙三先生にお世話にもなった。つまり僕の77才までの人生は、湘南のサッカーのおかげが大きく左右している。従って今でもテレビでサッカーの試合となると、何をおいてもテレビに釘付けとなる。それにしても桑田君の最後のコーナーキックの左上隅の1点が今日をして僕の人生をすっかり変えてしまった事を思い出す。

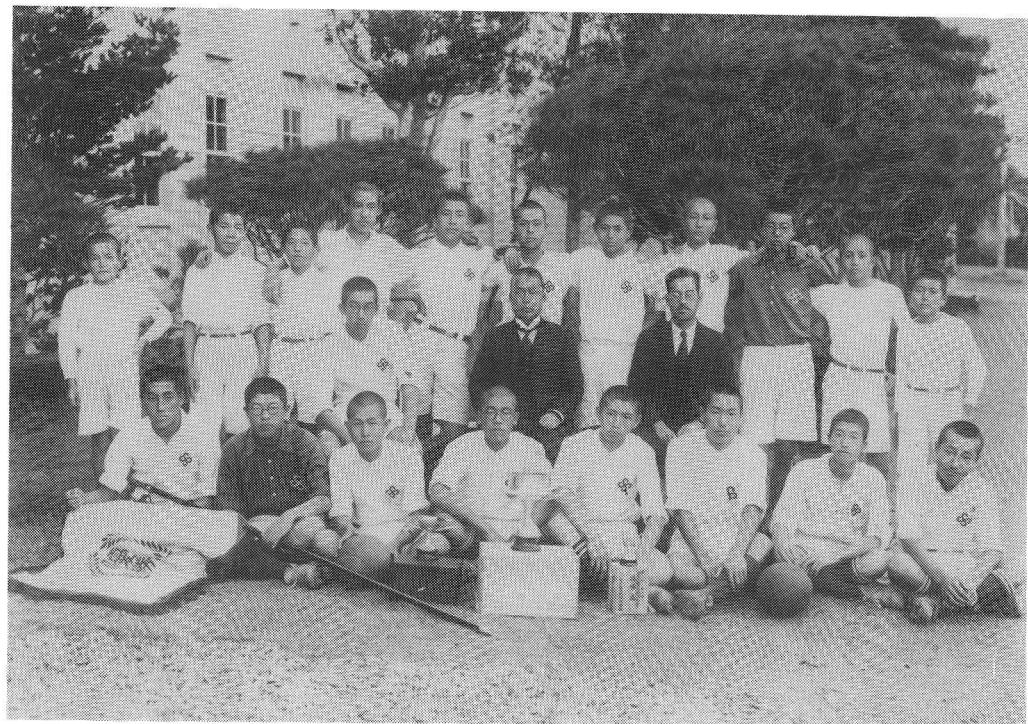
岩渕君なきあの湘南サッカーは、いまでも強いが、全国制覇には程遠い。鈴木中さんが一生懸命であるが、一人として湘南のサッカーを話してくれるものがいない、これは限りなく淋しいことである。

千田敬三君は、戦争中すでに誰も学校に居なくなっていて、破れたガラス窓があると、自分のガラスを持ってきて、コツコツと窓を完全に直し、遠くの山北まで帰って行った。香川さん香川さんと、いつも僕の家に寄って、サッカーの話をして、負けるものかと、勢よく家路を辿ったものだった。湘南高のガラス窓が戦後一枚も破れていないのは千田君の所能奉校の精勤を地で行った模範であると、いまも思い出している。

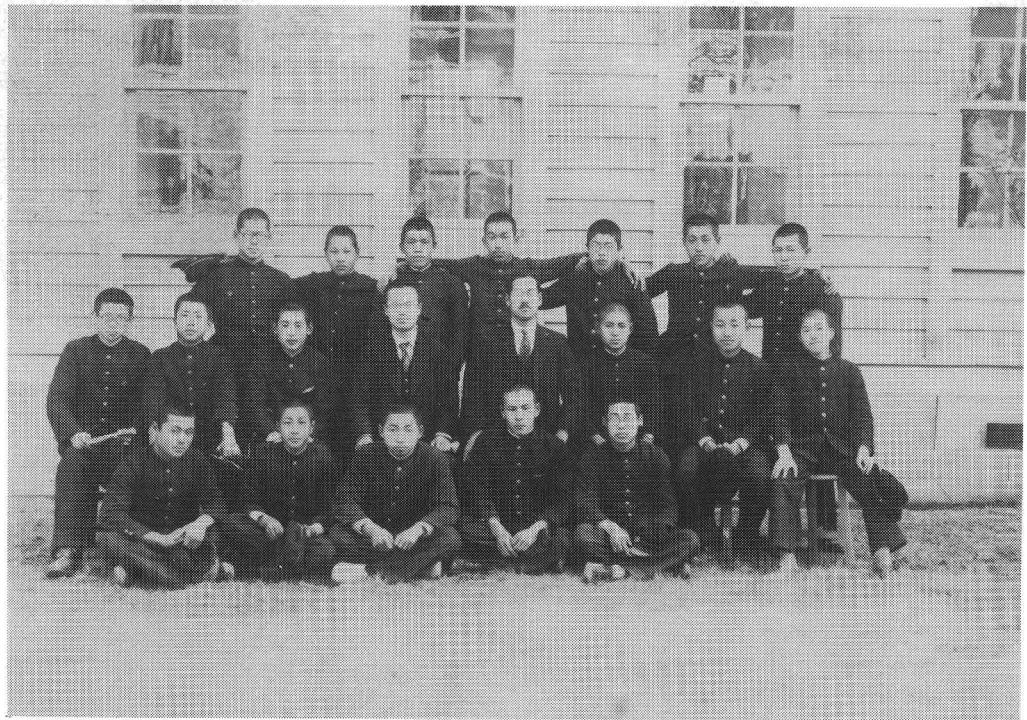
（香川記）



湘南中蹴球部第11回選手
(大正15年)



昭和5年県下初優勝時



第1期黄金時代の面々



昭和12年当時のメンバー



昭和14年全国大会出場



昭和15年卒メンバー



第2期黄金時代（昭和16年）



昭和21年国体全国優勝時のメンバー

目 次

湘南サッカーの沿革

①小史… 1 ②O B会の活動… 4 ③現役の年間スケジュール… 5

半世紀の青春譜

天野武一… 7 / 石田真一… 9 / 中村正義… 11 / 駒崎虎夫… 12 / 常盤嘉一郎… 14
藤田得利… 16 / 府川夫壬家寸… 19 / 渡辺真… 21 / 園田嘉高… 23 / 田口孝詞… 24
田村皓… 25 / 河西克郎… 27 / 海老原謙… 29 / 保利恒一… 30 / 早川純生… 31 /
松浦正美… 33 / 桑田孝… 35 / 香川嵩… 37 / 小林忠生… 40 / 小田島三之助… 42 /
柳川明信… 44 / 栗原克夫… 46 / 小瀬村秀夫… 49 / 嶋田武夫… 51 / 岡田清治… 52
大内健嗣… 53 / 篠田亮… 55 / 番場定孝… 57 / 渋谷繁夫… 59 / 牧村英樹… 61 /
植松二郎… 62 / 加納正道… 64 / 水谷政保… 66 / 元松経男… 68 / 橋本博文… 71
志水利彰… 72 / 武藤俊一… 73 / 54回生一同… 74 / 石外力… 76

湘南サッカーやづれ

“サッカーの湘南”第Ⅰ期黄金時代… 78 / 湘中蹴球全国制覇御礼の挨拶… 84 /
蹴球祭と定期戦… 89 / 新制高校蹴球部新入生勧誘文抜粋… 90 / 我が同志、湯浅… 92 /
湘南ペガサスサッカーチラブ… 93 / S O I に活躍する勇者たち… 96 / ロ
ッキーを知っていますか… 100 / 遠征について… 103 / ある日の日誌より… 104
親子兄弟サッカーマン… 106 / 独断と偏見に満ちた湘中サッカー裏面史… 107

岩渕二郎追悼の部

年譜… 127 /弔辞… 129 / 岩渕二郎を偲ぶ会及び記念事業の報告… 132 / 岩渕
二郎氏の思い出… 135 (安保隆文、中村正義、嶋田正彦、大塙正雄、早川純生
渋谷繁夫、端山虎夫) / 記念事業協賛者一覧… 147

年次別記録…………… 151

湘南サッカーO B会名簿…… 165

編集後記…………… 179

湖南蹴球歌
作詞・作曲 岩渕二郎

白雲と高く天翔ける理想

青春を培う男児ぞ我等

伝統取たりひげけりそめ歌

ゆけゆけ今うそ青春き白衣

相武れ健兒は王位に覇たるも

湖南

君き國を勤く又さう力

烈日に鍛う壯獅子ぞ我等

清明潔たり光りそめ旗

立て立て今うそ無縫の王衣

輝く玉座を断じて獲らむ

湖南

湖南

湘南サッカーの沿革

1. 小史

湘南中学校は大正10年(1921年)の創立であって、当初から校友会には蹴球部を置くことに定められてあった。初代校長赤木愛太郎氏の方針は、野球を禁止し、サッカーを校技とするということであった。校庭にゴールポストが立ったのは大正12年秋。翌13年には、当時東京カレッヂリーグの覇者高等師範の主将、後藤基胤氏が赴任され部長として指導を受けることができ倅せなスタートであった。氏の先見性ある気風はその後長く跡を引いた。

全校チームが結成されたのは大正14年、同年秋の県下中学校大会に公式戦初出場。三中グランド(現緑ヶ丘高)で行われ、一回戦で泥寧の中0-9で二中(現翠嵐)に大敗。大正15年9月、神奈川県中等学校ア式蹴球連盟が組織され、第1回県下中学リーグ戦(鎌倉師範、浅野中学、横浜二中、関東学院、横浜三中、神奈川工業、鎌倉中学(現鎌学)、湘南中学の8校)が行われた。湘南は決勝で二中に0-1と敗れ2位となる。この年より、5ヶ年計画を立て、できるかぎり下級生をレギュラーとし、5年目の昭和5年には強チームの出現となる。県下春のリーグ戦(参加8チーム)で初優勝、続いて秋のリーグ戦も優勝。高等師範主催の全国大会に出場し決勝まで進出、高師附属に1-3で敗れ準優勝。翌6年も同全国大会で決勝に進出志太中学(現藤枝東高校)と対戦。延長、再延長でも決せず、翌日の再試合でまた延長、往年のオリンピック選手松永氏に一点叩きこまれ、ついに敗れる。二日がかりの決勝戦は中学サッカー界ではこれだけである。昭和7年の同全国大会は3位に終わる。これ以後戦前は、湘南が県下で優勝できなかった年は数回しかない。

昭和12年、山静神大会で優勝し、西ノ宮の全国中学校大会に初出場。1回戦で優勝校埼玉師範に1-5と敗れる。

昭和14年、夏の甲子園全国中学校大会に再度山静神代表として出場。準決勝で聖

峰中に抽選負けし三位。秋の第1回明治神宮体育大会（後の国体）及び12月の関東大会でも各々準決勝で、明星商業・豊島師範に惜敗している。

昭和15年の関東大会では、決勝で明倫中学を2-1で破り優勝。全国大会は1回戦で普成中に1-8と大敗。翌16年の関東大会も、決勝で延長再延長、2時間余の熱戦の末1-0と青山師範を下し連続優勝。17年は戦時体制下に入ったが、春季トーナメント大会優勝を飾り、全国大会では3位になっている。

昭和21年、復興第1回神奈川蹴球大会が春季に行われ優勝。秋季には、第1回国民体育大会の中学校代表になり関東地域大会に進出、東京代表高師附属中学校、埼玉代表浦和中学を連破。東日本地域代表決定戦では仙台中を破り決勝進出。決勝戦で西日本代表神戸一中と対戦、接戦の末3-2と下し全国制覇を成し遂げた。

昭和23年、第3回国民体育大会に、関東地区予選会で東京附属中学を5-1と破り、東日本地区大会でも圧倒的勝利で決勝進出。やはり図抜けた実力で西日本代表となった広島高師附属中と対戦、0-1で惜敗した。広島高師は元全日本監督長沼氏、また日本代表になった木村氏等がいたチームである。なお、この決勝戦では広島チームが試合開始時間に遅れ、湘南の不戦勝になるところであったが、湘南チームはこれを良しとせず決戦を行なったというエピソードがある。

昭和24年、学制改革で6・3・3制への変革期に入る。

これ以後数年間、東京の大学サッカー界に湘南時代ともいべき時が続いた。東大、早大、慶大、明治の主将ほか、日本代表級多数が湘南出身で、関東学生選抜の半数以上が卒業生で占められたこともあった。大塙正雄（15年卒）、安保隆文（15年卒）、戸沢澄（16年卒）等は当時日本代表になれる選手であり、湘南の黄金時代を築いたメンバーで、岩渕二郎氏と共に湘南蹴球界の忘れ得ぬ人々である。昭和26年には第6回アジア大会（ニューデリー）に日本代表として田村恵（19年卒）が出場している。昭和28年、学生選抜として山口雄二（20年卒）、小田島三之助（24年卒）、小林忠生（主将・23年卒）が選ばれ、ヨーロッパ遠征、ドルトムント大会に出場。また、小田島、小林は全日本代表としてオリンピック予選にも参加している。

昭和35年7月、第3回関東大会（水戸）に出場。レベルの高い埼玉勢を次々と破り決勝で市立浦和と対戦、1-2と惜しくも敗れたが準優勝を果す。

昭和36年10月、国民体育大会（秋田県）に出場。1回戦で鶴ヶ岡工に1-2と敗

れる。明けて37年1月、第40回全国高校選手権大会（西の宮）に同メンバーが出場。1回戦で同大会優勝校の広島代表修道高校と対戦0-5と敗退。その時の修道チームには、元全日本選手、現日本代表チーム監督森孝慈がいた。同年秋の国体にも出場したが、やはり1回戦で徳島高に1-2と敗れる。この頃県内では最強と言えたが、全国レベルではまだまだであった。

昭和40年7月、第8回関東大会（水戸）に出場。1回戦で抽選勝ちをしてから調子にのり、決勝で帝京高校を1-0と下し見事優勝。翌年1月には全国選手権大会（西京極）に出場したが、1回戦で甲賀高校に0-0で抽選負けを喫する。これ以後全国大会には出場していない。

昭和45年前後からは、県内での各種大会予選参加校が100校を超える、各大会代表の座をつかむのがむずかしく、ベスト4~8位の力を持つが後一歩のところで涙をのんできている。

現役サッカー部員は、立派な伝統を背に、多難な前途を克服しようと日夜頑張っている。二代にわたり、宮原、鈴木両専門家を顧問に戴き、環境については申し分ない。あくまで最高のものをめざす伝統のスピリットは今でも脈々と流れている。ひとたび中央に駒を進める機を得たならば、必ず風雲を呼び起こすと常々語り合っている。OB会も整備され、諸先輩の支援に応えられる日が来るのもそう遠くはないことだろう。

●歴代部長

佐藤尚勝先生

後藤基胤先生

金持嘉一先生

香川幹一先生

浅沼早苗先生

宮原孝雄先生

●歴代監督・コーチ

岩渕二郎氏

藤田得利氏

嶋田正彦氏

大塙正雄氏

早川純生氏

柳川明信氏

●現部長、監督

鈴木 中先生

●現コーチ

武藤 俊一氏

2. O. B 会の活動

創立期は故岩渕氏が中心になり、現役の指導にあたる。卒業生は隨時グランドに来て、マンツーマン指導をする形が、旧制中学時代は続き、現役の試合には出来る限り応援に行くという状況であった。試合に集まつたあと簡単なお茶飲みコンパをやったり、合宿の時集まって、現役とコンパをすることが随时あった。

昭和10年代は神奈川社会人リーグに「湘南O Bチーム」として参加、セントジョゼフ、オールブラックス等の外人チームとの親善試合も行った。戦後20年代、神奈川リーグ復活で、再び、「湘南O Bチーム」として参加。また、年に1回は臨時に集まり、O B対現役戦を行っていた。O Bチームとして関東大会にも出場し、大宮、水戸、日立等での試合もあり、23年には「鎌倉湘南O Bチーム」として、第1回都市対抗で優勝を成就している。この頃、湘南O Bは多土済々で、全日本代表組が多数あり、若手O B（20年卒以後）は試合に出してもらえず、第2O Bチーム（東京キッカーズ）を結成し、試合をしていたこともある。優秀なメンバーが、各々に慶應B R B、早稲田WMWや東大L B等にとられて、湘南O Bチームに集められず、故岩渕氏が何とかベストメンバーを集めてやりたいと期していたが、前記「鎌倉湘南O Bチーム」として結集され、美事、東日本第1位となった次第である。昭和30年代後半からは、若手O Bを中心に「湘南クラブ」として、各種大会、親善試合に出場し、藤沢市民大会では何度か優勝している。現在では昭和27年卒～36年卒を中心に「ペガサス」、昭和42年卒～45年卒を中心に「アンテロープ」、若手O B中心の「湘南クラブ」があり、各々に活躍している。

昭和20年代に、湘南蹴球祭を1月15日に毎年行うことになり、以来、盛衰を経ながらも今日まで存続してきた。昭和40年、安保（15年卒）山口（20年卒）桑田（22年卒）の呼びかけで、旧制中学のO B会を開き、洗心亭に40名程集まり、初めて名簿が作られた。新制高校との橋渡しは、故岩渕氏の定時制高校就任以来そのまま引き継がれ、現役への寄附も故人の呼びかけで、隨時行われていた。この間、湘南イレブン、湘南サッカー便りという会報が発行されたこともある。昭和45年、O B会整備の動きがあり、組織、幹事、会費等につき幹事会が2回開かれたが中断し、昭和52年5月、故岩渕氏退職記念に総会の形式が成立したかに見えたが、これも整備

が進まず、昭和55年3月、岩渕氏急逝により、改めて、偲ぶ会となり、昭和56年1月15日を以って正式OB会の発足ということになった。今後、毎年1月15日に蹴球祭及びOB会総会を開き、年度変りとし、経過、会計、年間活動報告等を行い、会費徵収にあたっては皆様方のご協力を得たいと思っている。

湘南サッカー部OB会 会長 天野武一(1回)／事務局 安保隆文(15回)／会計 相羽克治(41回)、山口晴夫(45回)／監査 近藤平八郎(26回)／幹事 若干名

3. 現役の年間スケジュール

- 3月末 藤技遠征試合(2泊3日)
対筑波大付属高校定期戦
- 4月～ 関東大会県予選(前年度新人戦上位32校による)
本大会は6月上旬(県代表は2校)
- 5月中旬 対浦和高校定期戦
- 5月～ 全国高校総合体育大会県予選(参加校155校)
- 6月 本大会は8月上旬
- 7月末 全国高校選手権大会県一次予選(参加校155校)
- 8月中旬 合宿(於湘南高校)
- 10月末～ 全国高校選手権大会県二次予選(ベスト8による)
- 11月 本大会は1月2日～8日
- 11月～ 県下新人大会地区予選
- 12月 湘南地区から9校が県中央大会へ出場
- 1月15日 蹴球祭
- 1月～ 県下新人中央大会(参加校64校)
- 2月

半世紀の青春譜

ア式蹴球時代	天野 武一	ガンさんから手紙の指導	栗原 克夫
湘南蹴球部の初期	石田 貞一	昭和26年、そして30年後の今日	
サッカー部ができて	中村 正義		小瀬村 秀夫
50年前に思いを馳せて	駒崎 虎夫	茫洋のかなたよりのメモ	嶋田 武夫
湘南4人組の欧州遠征	常盤 嘉一郎	想い出	岡田 清治
昭和初期の湘南サッカー	藤田 得利	青春とサッカー	大内 健嗣
50年前の小礫	府川 夫壬家寸	昭和32年の活動	篠田 亮
湘南中学の4年間	渡辺 真	低迷期	番場 定孝
サッカーと戦場	園田 嘉高	20年前のこと	渋谷 繁夫
サッカーへの反省	田口 孝詞	戦歴	牧村 英樹
若き日の思い出	田村 皓	関東制覇	植松 二郎
蹴球の思い出	河西 克郎	私のサッカー人生	加納 正道
12月8日	海老原 謙	サッカー部番外記	水谷 政保
鎌倉付属と湘南サッカー	保利 恒一	湘南サッカー50年に寄せて	
戦時下とサッカー	早川 純生		元松 経男
優勝前後の思い出等	松浦 正美	13人	橋本 博文
湘南サッカー万才	桑田 孝	悔しさ、苦さ	志水 利彰
終戦から全国制覇まで	香川 嵩	チームメート	武藤 俊一
第3回国体、幻の優勝	小林 忠生	54回生ひと言集	54回生一同
私とサッカー	小田島 三之助	高校サッカー生活の思い出	石外 力
最後のコーチとして	柳川 明信		

ア式蹴球時代

1回生 天野 武一

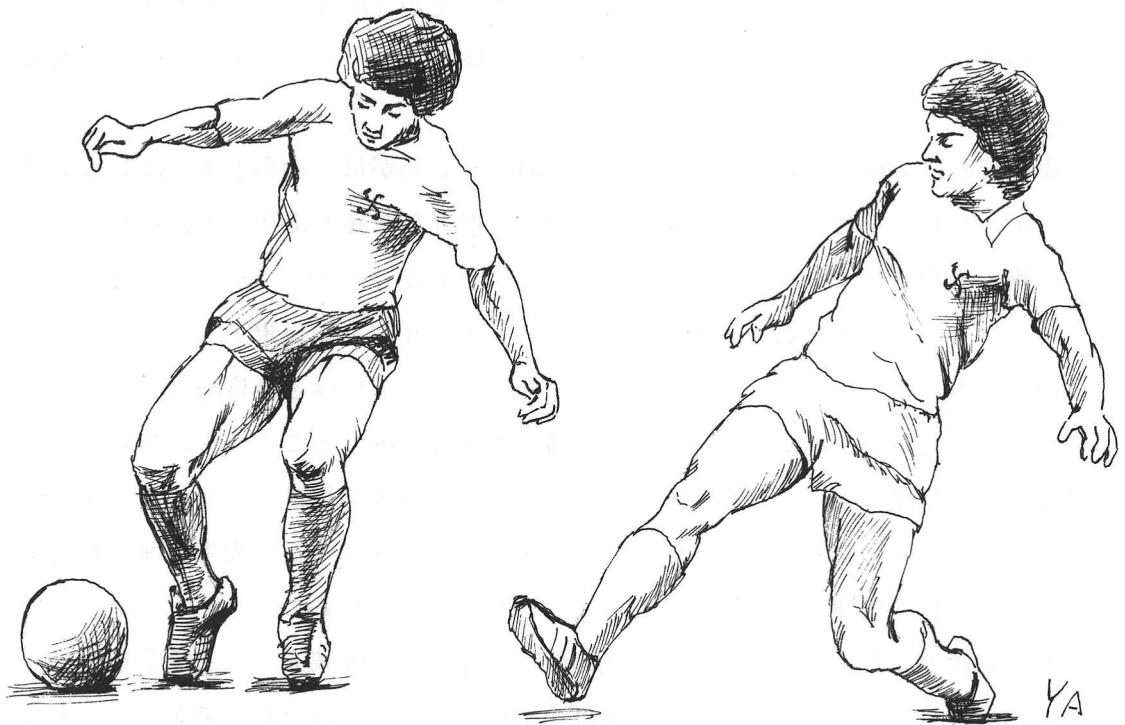
私どもが、大正の末期に旧制湘南中学で球を蹴りはじめた頃、いまのサッカーのことをア式蹴球と呼んでいた。それは、アソシエーション・フットボールの略称で、これに対するものは、ラ式蹴球つまりラグビー・フットボールというわけである。ところで、英国の学生の間でラグビーのことをラガーと呼ぶようになるに伴ないア式蹴球の方もサッカーというようになったのだという。日本蹴球協会創立満50年記念出版の「日本サッカーのあゆみ」によると、「外国人には、サッカーでは通せず、ソッカーであるが、それはさておき、サッカーでないと通用しない国は、オーストラリア、カナダ、U.S.Aの3ヶ国だけで、全世界的にみると、他の国々はみな単にフットボールという」とある。なるほど、私がひそかな趣味とする世界各国のサッカー切手のコレクションをみると、それぞれの国の言葉でフットボールという意味が印刷されているのが多い。

思えば、ア式蹴球と称して通用していた時代に、わが母校湘南中学ではじめてフットボールらしい技術を示して下さったのは、数学の後藤基胤先生であった。先生は、別の名をポケット猿、略してポケさんといわれたくらいに小柄のきびきびしたスポーツマンで、東京高等師範（筑波大学の前身）在学中に極東オリンピックのア式蹴球日本代表選手団の一員であられたと承ったが、それほど本格的なプレーを身につけておられた。岩渕二郎君たちは、教室でも運動場でもこの先生から教えをうけた最初の生徒であったはずである。そして、この後藤先生は、しばらくして学習院の教官にご転任になってしまい、短い間のご縁ではあったが、先生の蔵かれた種の大きな一粒が岩渕二郎君に結実したことは疑いをいれない。

私は岩渕君より一年上級であったためか、後藤先生の授業をうける機会をもたなかつたけれども、グラウンドでの印象は今も眼底にのこるほど新鮮であった。ところで、今より10数年以前のある晴れた日の午後、偶然にも学習院初等科の校舎の門の前を通りすぎようとした私は、「故後藤基胤先生告別式式場」と墨書きされた立看板をみておどろき、失礼をもかえりみず、校内に入ってなつかしい先生の遺影に拝

礼させていただいたことがある。先生は、初等科の校長先生に相当する現職のまま他界されたもののように、傍らに掲げられたご略歴を示す文章には、わが湘南中学の先生であられたことも明記しており、私は、その日、その時刻に、そこを通ろうとした奇縁に惹かれる感慨で胸いっぱいになり、往年の若々しいポケさんのユニフォーム姿をあらためて偲んだことであった。

すでに岩渕君もこの世を去り、ア式蹴球時代のあけばのに直結した湘南サッカー半世紀にわたるひとつの時期は、ついに終った。いま1981年の年頭にあたり、鋭気あふれる新生湘南サッカーの健闘に期待して、新らしい時代の自覚と向上発展を希求してやまないしたいである。



湘南蹴球部の初期

2回生 石田 貞一

私は湘南の2回生です。2回生で蹴球に關係深くボールに親しんだ人は、岩渕君を始め、伊藤、志賀、天野（健二）、木本、志摩、石川、相原、越地君などが今記憶に残る。

1回生では天野さん（長兄）、中山さん位が想い出される。そして、3回生、4回生が数多く出てくるのだが、小川、真田、中村、中村（正）、楠本、高梨、阿部川、新田、天野（豊）、駒崎、笠原、小熊、藤田…………何回生か知らないが印象に残るプレーヤーである。

蹴球は初代赤木校長が、校技として奨励され指導者に後藤先生を迎えた。後藤先生は、極東オリンピックの選手として、高師在学中から活躍された方で、“ポケさん”の愛称は懐しい。本職の数学指導もさることながら、ボール扱いの妙技は、しばしば教室の生徒の眼を奪ったものであった。後藤先生が見えて、急速に練習もサッカーらしくなり、他校相手に練習試合なども行われるようになった。特に仲よく胸を貸してくれたのは鎌倉師範であった。これは鎌師の高橋先生（パッサン）と後藤先生の親交のあった故だろう。その他相手校としては、関東学院中、横浜三中、県立二中などで、勝ったり、負けたりだった。なお、県大会、関東大会、全国大会いろいろあったが、忘れられないのは胸を借りた鎌師に、はじめて勝ったときだろう。県立二中は横浜の北部丘の上にあり、赤土のグラウンドは雨で泥の海だった。その中で、シュートパスの得意な湘南には有利だった。2：1…………。以降鎌師恐るるに足らずと自信を持つようになった。雨は湘南に幸ということになったが、今日はどうだろうか。

全国大会が高師の運動場で催され、附属中に、2点先取され、タイムアップ間際に敵の蹴り返したボールが、岩渕氏の胸か腹に当ってゴールイン、貴重な1点を得た。

さて、想い出は尽きないが、湘南の小高い丘から、南運動場を隔て、麦畑が広がり、遠く東海道線から更に、江の島までも一望できた。西に眼をうつせば、烏森、

箱根連山、富士、そして北に大山、丹沢……四季の移り変わりにつれて風情は尽きない。ひばりの啼く麦畑に囲まれ、練習に心地よく疲れた身体を草いきれの大地に横たえ、茜さす夕陽に映えた鳥森を眺め、青春を語ったものだ。

5時の下り S Lが力強く煙を吐いて遙か麦畑の向を通ると、5時20分の上りに間に合うようにカバンを抱えて学校から駅まで駆けあし、汽車通学の部員の常だった。時には、六本松の所に新設されたパン屋で、10銭で2個のクリームパンで帰宅までのつなぎに、時々は学校近くの引地で大福のあみだと……懐しい。

大正の末期は浪漫に満ちたよき時代だった。



サッカー部ができて

3回生 中村 正義

大正12年4月、東京高等師範学校をご卒業になって、ただちに新設校の湘南中学に就任された、後藤基胤先生がサッカーの手ほどきをして下さいました。教室でもグラウンドでも、いつもニコニコしながら、私達に接してくださいました。私は、先生のファンになってしまって、同好の友人と球を蹴る仲間づくりをはじめました。蹴球靴はまだ誰も、もっておりません。思い思いの靴で蹴りました。

後藤先生は、日本選抜軍の一員として、上海に遠征した方でした。たけが低く、こまねずみのように、グラウンドを馳駆なさる姿は、壮観で、今だに目にやきついております。先生は「ぼくは、小さいので、ポケットというニックネームだよ」と言っておられ、僕達は遠慮なく「ポケットー」とおよびしたことでした。

当時は、横浜二中が強く、横浜三中ができるから、また三中が手ごわい相手でした。県下のリーグ戦に勝つと、東京高等師範学校主催の全国大会に行きました。2回参加した覚えがあります。1回戦に勝って、2回戦までの間に、昼食の時間があり、会場の食堂で盛りそばをおいしく食べたことを思いだします。戦績は、手許に記録をもちあわせませんし、記憶もさだかではありません。しかし吹雪の中で戦った日のことは、強烈な印象として残っております。

50 年前に思いを馳せて

6回生 駒崎 虎夫

何か書こうと思いながら締切が数日後になってしまった。今月に入って、日本サッカー界の元老、竹腰重丸氏と慶應時代の球友、西沢（旧塙部）徳三君が相次いで亡くなつて、岩渕さんの訃に重なり愈々寂しさを感じている。

さて、湘南時代からの自分のサッカー生活を振り返って見ると、まあ陽の当る場所を歩けて幸の方だったと思う。

湘中入学時はサッカーがどんな競技であるかも知らず、まして興味のかけらも持っていたいなかったが、鎌倉から通学したので、当時、鎌倉在住の最上級生、岩渕さんと、同級の木村君（故人）が師範付属出でサッカーを知り、お二人の説得で、麻生松岡（共に故人）君と一緒に蹴球部に入った、もっとも、1・2年生の頃は、正科であった剣道・柔道もやらねばならず、そちらでも一応の成績をあげていたものだった。そして3年生の頃からサッカーに没頭はじめた。これは1年生の1年間、鎌倉と学校の往復のほとんどを、岩渕さんと彼の蹴球談議が同行していたことが最大の素因であったと言え、それほど彼のサッカーに対する情熱から出る言葉に説得力が或いは魅力があり、それに惹かれたのが、我々だったと言えよう。

当時の蹴球部員は優秀な人材が揃つてはいたが、ほとんどが他部とのかけもちで、対外試合でのチームは全校生徒中から選ばれた11人に依つて出来上がつたと言ってもよいと思う。従つて真に蹴球部の代表としての誇りを持つまでにならなかつたのではなかろうか、学校に野球部があつたらとか、他の競技に身を入れた方がよいのではないかと思つたりした者も中にはあったと思う。しかし、昭和4年大口主将の率いたチームで味わつた敗戦が、我々に湘南蹴球魂を生み出させたと思う。当時の4年生選手全員が部に残つて（当時は4年終了で進学出来た）何とかして、来年勝とうと約束し合つた。その結果、昭和5年の連戦連勝となり、湘南の蹴球、蹴球の湘南、が中央に認められたことは、当時の5年生8名が終生誇りとする所であつて、正に、湘南蹴球の幕開きであったと思う。

此の間、我々の心に、蹴球と愛校心を植え付けたのは、赤木校長、金持部長をは

じめとする全先生方の熱意と岩渕さんの蹴球そのものであり、加えて諸先輩（特に天野4兄弟、中山、真田氏等）方の色々な形での励ましの上に、後藤基胤（湘南一学習院）先生、時田（東京高師）氏、日本サッカーの歴史に残る名手、若林、野沢（東大）両氏等から受けることの出来た技術指導が大きな力となったものと心に銘じている。

自分は昭和6年慶應に進学し、慶應ソッカーチームの東京大学リーグ、全日本学生初優勝を経、慶應ソッカー黄金時代の初期の一員となり得たことは、誠に誇らしいことであると共に、湘南の蹴球のお蔭と思い感謝に堪えない。が湘南サッカーチームに対しては何らのお手伝いもせず申訳なく思っている。

尚、田村、松岡巖、小林忠、（旧姓早川）、福井。諸君が慶應サッカーチームで夫々活躍され、湘南の名に輝きを加えたものとして喜ばしい限りである。

この紙面をかりて、故人となられた、先生方、先輩、同輩のご冥福を祈らせていただきたい。



湘南4人組の欧洲遠征

6回生 常盤 嘉一郎

なんとなく日本人ばなれしたタイプの真黒な顔で、ちょっと近寄りにくい。私が岩渕二郎さんにはじめて御目にかかったときの印象であった。

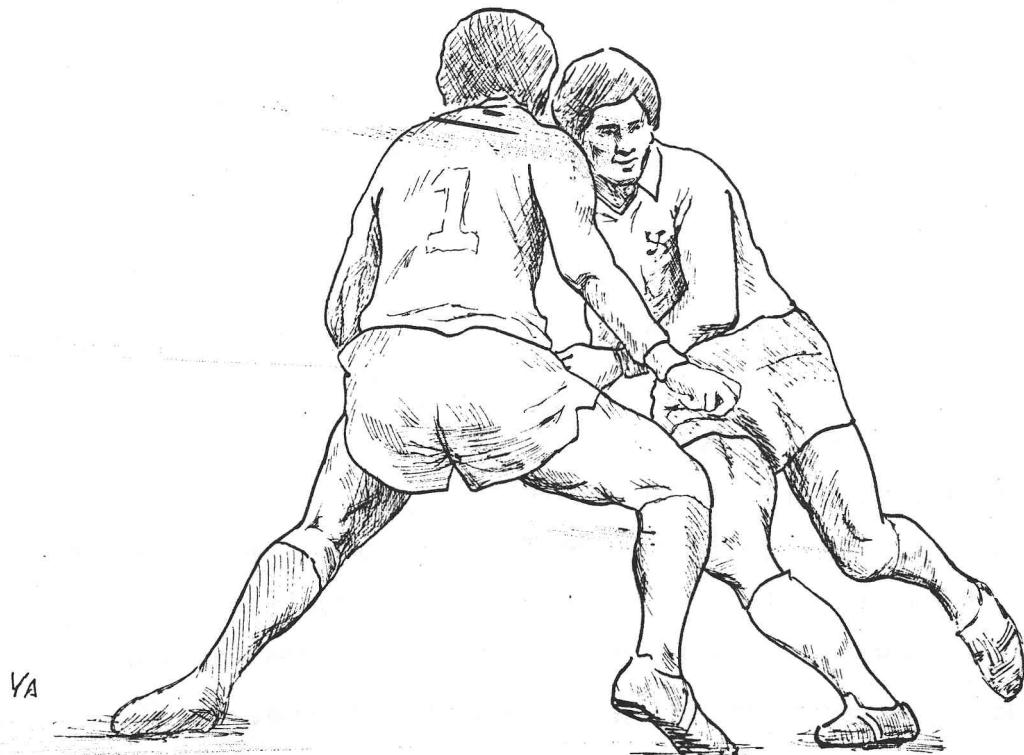
湘南在学中は、1年の末頃から蹴球部に入れてもらったが、なにしろ上級生と新入生徒とでは、まともに話すことなど、もってのほかであったし、当分は球拾いばかりで直接に口をきくこともなかった。そのうちに岩渕さんは卒業されるし、私は万年捕欠のまま正式の試合にはほんの1・2度出してもらったきり。4年終了で高校へ入ってしまった。したがって、岩渕さんとは全く縁が切れたまま、40年以上も経ったことになる。ところが数年前、なんでも寒い頃だったと思うが、突然岩渕さんから手紙が届いた。湘南のサッカー部が最近あまり思わしくないので、強化育成のため先輩の一人としてたまには、グランドへやって来い、ついては別紙の通り何月何日に試合をやる。こんな内容であったと記憶している。とにかく当日行ってみると、天野大先輩をはじめ、岩渕さんほか数名の方々が観戦中であった。その折に、戦前のインターハイの話が出て、たまたま、私がその名簿をもっており、しかもメンバーには湘南出身者が多数いるということから、それをぜひ入手したいとの御意向だった。それが私と岩渕さんとの再度の縁で、以来何度か湘南高校での御目にかかる機会をもった。

さる、55年10月下旬、ノコさんこと竹腰重丸氏の御葬儀に列して、計らずしも、天野大先輩に御目にかかったが、そのとき私は天野さんと岩渕さんとが、ダブって見えたような気がした。天野さんには申証ないが、つまり私の湘南中学蹴球部の思い出は、岩渕さんなしには考えられないからなのである。

前期の旧インターハイの連中が、最高年令70才、最低でも50才という顔触れ、26名で、ヨーロッパ3ヶ国（オーストリア、スイス、西ドイツ）の同年令チーム、しかも相手側はすべて、往年の職業チーム出身者と対戦することになり、これも岩渕さんの知友であり、球友でもあるまた藤沢四十雀チームの瀬藤進一氏を主将として55年の7月、はるばる遠征に出かけたが、なんとそのうち、4名までが湘南出身

者だった。G K服部斐夫、D F田村恵、M F藤田貞美、M F常盤（私は全員の年長順位4番、67才であった）とすべて岩渕さんの門下生である。かっての宿敵、東京高師付属中学からも数名来ていたが、なんにしても岩渕一門がこんなに揃ったのに驚いた。やっぱり湘南のサッカーから岩渕さんをとったら、何も残らないといつてもよいのではなかろうか。

先般55年5月に行われた、慰靈祭の折、どなたかの話にもあったが、岩渕さんは「日本の」とか、「神奈川のことか」というのではなくて、ただひたすら「湘南の岩渕」であったのだ。そしてそのことが我々湘南出身者にとっては、まことに神格的な存在である岩渕さんなのである。古めかしい言葉だが、私はあえてこれを岩渕さんの御遺徳と言いたい。今般学友後輩のうち安保氏、内田氏など主だった方々が岩渕さんの記念事業として、母校にシート板を設置されたが、私のいう御遺徳を偲ぶ最適のことだと信じ、湘南高校の存続するかぎり、いつまでも岩渕さんの見守って下さるサッカー部であってほしいと念じている。



昭和初期の湘南サッカー

6回生 藤田 得利

I 岩渕さんのこと

私は大正15年（昭和元年）に旧制湘南中学に入学しました。卒業は昭和6年になります。入学早々の授業の休み時間に5年生の岩渕さんが教室にやって来て、「小学校で足の速かったもの、運動選手だったものは蹴球部にはいれ」と入部の勧誘をしました。この堂々たる体軀の上級生は新入生たちに強い印象を与えた様で、われわれの学年からは比較的大勢のものが入部したのでした。岩渕さんの湘南蹴球部強化5年計画はこの新入生勧誘の時から始まったのです。

当時、県内では県立横浜2中（翠嵐高校の前身）が名門校として常勝を誇っていました。大正15年、岩渕(5)C F主将の時、これに勝てません。昭和2年、中村(5)F主将の時も駄目。笠原(2)C F、藤田(2)G K、小さい2年生を使わねばならなかつたので勝てません。この頃から打倒2中、県下優勝が湘南サッカーの悲願となりました。昭和3年、高梨(5)C H主将の時も勝てません。この年から東大の若林、野沢の両コーチが来る様になりました。昭和4年、大口(5)R H主将、木村(4)C W、笠原(4)L I、駒崎(4)R W、麻生(4)L H、藤田(4)C H、入澤(4)R H、松岡(4)G Kなど大正15年入学組がもう4年生で身体も大きくなってチームも実力的には県下トップクラスにはいりました。2中との決勝戦は11月下旬、冷寒暴風雨の日でした。前半不運にも、風下サイド、雨と風とぬかるみの中で相手、風上の優位からドサクサマギレに1点を押し込まれた後、選手の健康を慮って試合は中止、異例にも、日を改めて後半だけ再試合。結局1-0の負けと、涙をのんだのでした。昭和5年、藤田(5)C H主将、木村(5)L H、笠原(5)L I、小熊(3)C F、樋口(3)R I、駒崎(5)R W、麻生(5)L H、入澤(5)R H、山中(4)L F、間島(5)R F、松岡(5)G Kのメンバーです。気力、技力ともに充実しました。先ず、春、県下大会で初優勝、余勢をかけて夏、東京高師主催の全国大会で準優勝、秋、横浜高商主催近県大会に優勝、続いて県下リーグ戦に優勝、冬、全国大会関東予選決勝戦に青山師範に2-2引分（抽選負）という成果でした。横浜2中とはこの年、5回対戦、3-1、5-0、3-0、2-1、

3-1と何れも完勝、積年の悲願を一挙に達成したのでした。

岩渕さんが掲言した5ヶ年計画通り、丁度5年目に目標を達成したのでした。この事は、その後岩渕さんが、サッカーの鬼と言われる程に湘南サッカーに打ち込む様になったきっかけの一つであったかも知れません。

Ⅱ 湘南サッカーの初期の興隆に寄与された方たち

赤木校長

サッカーを校技とすると決断した校長先生です。

後藤先生

湘南に初めてサッカーを持ち込んだ先生。

金持先生

初優勝した時の蹴球部長で教頭先生。高等師範時代は箱根駅伝の選手。厳しい教頭先生でしたが、個々の生徒や部員に対しては思情厚く、その包容力で湘南蹴球部を初優勝へ導いた感じです。私に水戸高等学校進学を勧めてくれました。

香川先生

昭和10年代の蹴球部長。日本や世界中のどんな所でも、そら暗記の地図をその場で、すらすら黒板に書き上げる特技をお持ちでした。熱血漢。熱情をもって部を引張って行かれました。丁度この頃、私はコーチを引受けしておりました。甲信静大会優勝の瞬間、熱情家の先生は泣いて喜ばれたことを思い起します。お子さんが皆秀才で、サッカーの名選手が出ました。

若林、野沢両コーチ

昭和3年、天野先輩が静高から東大に進まれた年。東大名フォワード若林。名ハーフ野沢の両氏をコーチとして連れて来られました。当時、東大は6連覇の黄金時代でしたから、今でいうと、釜本、杉山の二人を連れて來た様なものでしょう。岩渕さんが湘南サッカーの精神的な支柱であったとすれば、お二人は技術的支柱であったと言へましょう。2対1のトライアングルパスの基本と練習方法は若林氏の、又3対2の防禦連携プレイの理論と実践は野沢氏のコーチされた技術遺産の一部です。個人プレイの集合体でしかなかった湘南サッカーはこの時から組織的なチームプレーのサッカーに脱皮したのでした。

私は中学卒業後の浪人中の昭和6年と大学在学中の昭和11～13年の合わせて4年間湘南サッカーのコーチを引受けました。独創は加えながら単なる我流は避けて、極力若林・野沢理論の伝承に努めました。昭和6年、山中R.F.主将の時、前年選手が8人も卒業で抜けた直後のチームにもかかわらず夏の全国大会には決勝にまで進出志太中学と延長、再試合、再延長と激戦を繰り広げるところまで行けたのも、又数年後、小熊C.H.主将時代、甲信静優勝、甲子園に初出場出来たのも、この若林、野沢理論によるチームの組み立てが代々伝わり、それが成果を挙げた一要因となつた様に思えます。甲信静大会の静岡中学との決勝戦で、2年生か3年生でまだ幼さの残った少年、安保、大塙の両君がウィングとインナーのコンビで、トライアングルパスを駆使して、大柄な静中選手を次々と抜き去り何回か敵陣内に攻め込んだ光景が今も時々思い出されるのです。

昭和五年六月十七日

號六十三百三十九第一第

圖書目錄表

(日蝕火)

新進湘南勝つ

縣下蹴球大會決勝戰



渡辺 松岡 穂原 山中
植口 駒崎 藤向 間島 金持先生
木村 永樂 石牛 小熊 岩淵 長華

50 年 前 の 小 碣

7回生 府川 夫壬家寸

50年前の事を想い出すのは大変難しい。何故ならば脳細胞は同一事柄を7年間以内に1回以上想出さないとその記憶細胞を消滅させてしまうらしいからである。半世紀の向うのサッカーに関する記憶は極めてうすい。それに私は「下手の横好き」であるだけで性来の移り気から本気で打込まず遊んではばかりいたので、正選手にもなれず人生の一駒としてのサッカー試合のメインイベントに恵まれなかつたことがある。唯、試合中は身体ごとぶっ突けて行く斗志満々タイプであった事は間違いない。後年進学してからもサッカーチームのメンバーとして、現在の浦和高校と散々練習試合をしたが勝った事がなかつた。

湘南中学へ行くのは私に取って楽しみであった。今は勉強に忙しいようであるが、私などは学校で運動をし、飛び廻り、いたずらをすることが主で、先生によく叱られたが全く楽しいことであった。反面学業は相当下つたが、後年社会へ出て頑張りの利く精神力の持主になり得たのは、サッカーと云う身体をぶっつけていく運動が身についたからであろう。湘南が優勝したのは私たちが卒業してから相当後の事である。私達の在学中に、対神中戦などで、笠原、藤田、駒崎の諸先輩や、外岡、松木、樋口の諸氏（他の方のお名前は忘れてしまったようです。）の活躍にも一様の声援を送つた。

若林竹雄さんが湘南に来たのを覚えている。鼻すじの通つた背の高い人のような気がするが何しろ52年前の事ですから悪しからず、岩渕先輩は身体のがっしりした人のように思います。直接御指導を受けなかつたのですが、正選手の諸君を教えていたる姿を見ました。大変球さばきの巧い人だと畏敬の念を持っていました。

半世紀前の記憶に残るものは、あのスタンドと芝生、プールと脇の松の木立、更に正門の左右の楠の大木、当時は松林の隅の方に植えられていた細い木であったと思うが或は思いちがいかもしれない。今も絶対変わらないものが3つある。1つは天城と箱根の鞍部に沈む秋の赤い太陽、烏森の姿、そしてもう1つは、私の右目の中に残っている運動場の小礫である。この小礫は、サッカー試合中に斜横から飛ん

で来たボールが振向いた私の顔をかすめ、その上に目を痛めたときのもので、今でもピンセットで挟めばパチンと音がする。大切なサッカーの記念として残しておく積りである。（医者はムリに取らない方が良いと言ってくれた。）



湘南中学の4年間

8回生 渡辺 真

母校のサッカー部は東京高師のサッカー選手であった後藤先生が湘南に赴任された時に初まつたと聞いている。

私が入学した昭和3年時のキャプテンは、高梨（4回）先輩、次いで大口（5回）、藤田（6回）、山中（7回）各先輩主将のもとでサッカー生活を送り、4年修了で、山中先輩と共に、北大予科に入学し湘南を去った。

私と同期（8回）では、永楽君が主将となり、島田君（9回）、古賀君（10回）と続いていったと思う。

部長は在学中を通じて金持先生であった。当時、後藤先生は、転出されていたが、試合を折りにふれ観戦され、その都度、試合のあとで呼ばれて、叱言を頂戴した記憶がある。

在籍中一貫してコーチを受けたのは、岩渕先輩（2回生）であった。岩渕さんの岩を頑固の頑に通わせて、“ガンブチ”さんの敬称を捧げていたが、恐しくも亦なつかしい先輩であった。

数年前、神奈川県の四十雀チームの監督をして、来道された折に、札幌でお会いした時には、昔の面影はすでになく、好々爺的感じを受けたが、これが最後の出会いとなってしまった。昭和4年の元旦、学校の式が終って帰ろうとしたら、ユニホーム姿で、一人スタンドに向って球を蹴る岩渕さんの姿を、グランドに見掛け、少年乍らこの先輩のサッカーに寄せる執念のすさまじさにびっくりしたもの、元旦早々から、ドナラレ度くないという意志が働いて逃げ帰った記憶がある。

このガンブチさんの気迫と昭和5年から迎えた当時の、極東オリンピック日本代表選手、若林、野沢、両氏（東京帝大チームのメンバー）による技術指導が、効果を現わし昭和5年初めて、神奈川県下を制覇し、全国中等学校サッカー選手権大会でも準優勝の戦跡を残し湘南をして、初めての黄金時代を迎えていた。その時のチームは、木村（6回）、小熊（8回）、笠原（6回）、樋口（8回）、駒崎（6回）がフォワード、キャプテンの藤田（6回）がセンターハーフ、フルバックは、麻生

(6回)、山中(7回)であり、ゴールキーパーは松岡(6回)であった。

昭和6年は、全国大会決勝戦で引き分け、翌日の再試合2回目の延長戦後半で1点とられて敗けてしまった。これが私の湘南に於けるサッカー歴であり、湘南中学サッカーの歴史でもある。

湘南を去って、50年近い歳月が経ってしまった。山中先輩は、北海道サッカー協会長、札幌サッカー協会長として永い間、北海道サッカー界に貢献されていたが、今春引退され、近く富山県在住の長男のもとに移られることとなっている。

私は、戦後山中先輩のすすめで帯広サッカー協会を創設し、会長となり今でも、サッカーとの縁を切れないでいる。

帯広市開基80年記念事業の一環として、ヤンマー対三菱の試合を帯広市で開催、15万都市の帯広で1400名の観衆を集めたことは、地方協会長としては、出来過ぎた思出であり、1400名を相手に晴々と開会の挨拶をしたことは晩年の私にとって良き思い出となっている。私は少年期からサッカーに親しみ、サッカーを通じて人間の触れ合いを持ち人世を豊かにくらせた事を感謝している。

最後に母校チームの向上を心から祈念しておく。

サッカーと戦場

12回生 園田 嘉高

時は昭和18年8月、私は漢口飛行場にて在支米空軍相手に独立飛行第18中隊整備班にて戦っていました。当時、漢口は空軍の戦いでは最前戦であり合計62回の空襲に遭遇しましたが、敵機来襲の情報を受けて敵機を待つ間は味方の戦斗機も迎撃のために飛び去り、飛行場は沈黙と静寂に置かれ、唯夏の太陽のみがむせかえる飛行場の草原に照りつけるのみで、敵機来襲を目前にして異様な静けさにつつまれるのが常がありました。この様な死を目前にして塹壕に待機しながら脳裡に浮び上がるものは湘中へ行く道中の菜の花畠のかげろうにゆれる黄色の波と、清くすんだ小川のせせらぎでした。又この戦場で味方の戦斗機を送り出し飛行場を守る気分は、サッカーのゴールキーパーが敵の来襲を待ちかまえる気分によく似たところがありました。さて私は、そのゴールキーパーを最初から拼命し、最後までキーパーで終りましたが、我々の年代は戦争で同じチームの者及び同クラスのものが多数戦死されており、私も青春時代を戦地で過し敗戦後故国へ復員し、荒廃したふるさとであくせくしている中に30余年がすぎ、今日に至りましたが、60才の最近になって最も懐しく感じられるのは戦地で生死を共にした戦友たちと湘中サッカーチームの戦友たちであります。どうしてこの様な懐しさが生れるのかを分析して見ると、戦地における状況はあらゆる利害関係もなく、人間的上下もなく、ライバル意識もなく、ただひたすら生死を共に敵に対していた人間関係であったためと思われます。毎年戦友会が催されますが、いつでも戦友というものは特別他にない懐しさがあるものです。それと同じくサッカーチームの戦友諸君も懐しく、この懐しさも一つの目的にすべての雑念を払って全力をつくして戦った戦場の状況と似たものがあるためと思われます。

現在の平和時の一般社会に於いてもこの様な人間関係が生れる様な社会があればとつくづく考えさせられる昨今です。

サッカーへの反省

14回生 田口 孝詞

私は第14回卒ですが、その後学徒動員の第1回線上卒業生として兵役に服し、戦後はサラリーマンとして今日迄元気で過して居ります。学生、軍人、そして社会人を通じ共通して云える事は、日本人は戦略に疎いのではないか……と思われます。

学生時代はさておいて、第2次大戦では明かに戦斗は上手だが……と云う事ですし、現代企業の中に於ても、経営戦略等の優劣がその命運を左右する事の様です。

私は12チャンネルでよくプロサッカーを見ますが、何時も感心させられるのは、個人技の見事さもさる事ながら、1度ボールを取ったら攻撃のお膳立が出来るまでのボールのキープ力に見られる如き集団技には特に感心させられ、学生時代のサッカーの主将として何と無策であったかに強く反省させられるものです。もとより学生のスポーツはみずからそのレベルは知れたものですし、その目的も亦「健全な精神は健全な身体に宿る」の一手段に過ぎない事は今でも同感です。然し出場する限りは若人の情熱を集中し勝つ事が必要と思いますし又勝つ為には団体競技である以上、団体としての技を各個人技との連繋に於て形成する必要があると思います。

即ち個人々を生かしそれを集約したコンビネーションの中から絶対的な得点を得るパターンを作り練習するとか、そのパターンを現れとする為のサインだとか、考えると色々あると思われますし、又敵の情報を試合前五分でも、又前半終了後でも敵の情報を集収し解析し、作戦を立てる位の事が出来なかったのかと残念に思い且反省しています。

学生そして社会人へと通ずる人生に於ても亦個人の生活設計にも大なり小なり戦略志向は不可欠と思われ有機的な複雑な社会機構の中で生きぬく為には、学生時代からこの様な考え方がスポーツを通じ養成される事は大いに意義があり、団体スポーツとしてサッカーの存在価値も亦高く評価されるのではないかと思われます。

後輩諸君、是非機械的な練習は止めて、皆で「之でよいのか？」と疑問を持ち、何を為すべきかの目的を定め、各人の目標も定め、欠落技術を補う様に練習方法を定め、実行する様にして欲しいと思ってます。

若き日の思い出

15回生 田村 皓

昭和15年卒業の私達にとって最も印象的な思い出は、昭和14年夏開催された全国中学蹴球大会の第2回戦で東京代表の優勝候補の青山師範を4-2で破った試合と、準決勝戦での京都代表聖峯中学と激しいシーソーザームを展開し2-2のまま再延長戦を繰り返したが勝負がつかず、結局抽選で勝負を決めことになった。私がスタンドを埋めた多くの観衆の見守る中で負選を引く破目となり涙を飲んで球場を後にしたのである。

次にその宿敵聖峯中学を同年秋開催された明治神宮大会の準々決勝戦で4-2で破り復讐した試合であった。

まず対青山師範戦であるがそれまで、年令的にも肉体的にも勝る青山師範、豊島師範、埼玉師範には、毎年関東大会で苦汁を飲まされていた。新聞その他一般の予想では青師有利と思われていたから湘南チームが勝ったことは番狂わせであったかも知れないが、私達にとっては非常に嬉しい出来事であった。この試合での殊勲者は1点目を入れた左足シュート専門の樋口君とフルバックの長島君であった。

青山師範はFW橋立君、CF太田君と云う当時大学級名選手を拗した強力フォワードを持った強敵であったが前半長島君がヘッディングの競り合いで、橋立君の額に激突し負傷させた。彼は出血のため顔半分を包帯で巻いたので片目が見えず、その結果、敵の攻撃力が急速に衰え我々のペースにおちいり、遂に我々が勝利を握ったのであった。

次に準決勝戦での聖峯中学との試合であるが、小野曽君がヘッディングシュートのボールを左ゴールポストを15cm位外したため、延長戦にもつれこみ、結局抽選負けとなった訳だが、今だに当時の連中はこの光景を覚えている。

宿敵聖峯中学を同年秋開催された明治神宮大会でセンターフォワードの安保君が頭の後に目が付いているのではないかと思われる後向きのロングシュートで先取点を入れてから我々チームの意気が上がり遂に甲子園の恨みを4-2で果すことが出来た。安保君のフェイントモーションを使ったドリブルは名人芸だと全国的にも、

有名であった。この試合前に岩渕先輩の奥さんから沢山の鰻の蒲焼の差入れがあり出場選手一同賞味させていただいたがこの鰻のエネルギーが勝利に結びついたかも知れない。

当時フォワードはWシステム、バックはスリーバックまたはツーバックシステムが流行していた。

我々湘南中学のフォワードは他校に比べ背が高くなかったので空中でのボールの競り合いは得意でなかったから逆モーションを使ったトライアングルパス、またはチェンジポジションプレーで敵のバックを翻弄させ敵の疲労に乘じ安保君、小野勝君がシュートし得点を重ねるパターンであった。

大塙君の低目の強烈なシュートはその当時から有名で彼がその後長い間全日本の代表選手で活躍出来たのも快足とそのシュートの賜物であろう。

小野君兄弟の華麗なフットワークは中学3年生とは思われぬ見事なものであった。バックスについては、4年生の小熊君と3年生の保利君の執拗なタックルとロングシュート力は相手を随分苦しめたものであった。

前述の明治神宮大会の四国代表の対高松中戦では前半、我々のフォワードが3点入れたので敵は全員防衛に廻りバックからのパスが通らぬので我々バックの私と小熊君、保利君がそれぞれ1点づつロングシュートを入れ結局6-0で勝つことが出来た。

フルバックの長島君のことは前述の通りであるが戦後、満死された市川君は非常に真面目な性格の選手であった。

大型のゴールキーパーの奥本君は非常に勘の良い選手であったが、味方が強かったので余り苦しまずには済んだのではなかろうか。

最後にマネージャーの内田君はあの当時から良く選手達の面倒を見てくれたので我々の仲間一同感謝している。彼が現在でも鎌倉の子供達のサッカーの指導をしているが、サッカーの技術は当時から毎年進歩しているように見える。

終りに以上の様な良き思い出を与えて下さった赤木校長、香川、浅沼両先生、および直接コーチしてくれた岩渕、藤田、島田先輩、その他湘南のサッカーの基礎を造って下さった多くの先輩、後輩の方々に感謝しつつ、筆を置く次第です。

蹴 球 の 思 い 出

17回生 河西 克郎

私には子供が無いので今の中、高校生の生態は殆んど解らない。私は中学、高校（共に旧制）を通じて6年間蹴球をして来たのであるが、その間ゆっくり休暇を楽しんだ気憶がない。春夏冬の休暇は殆んど練習に費いやした。放課後から日没まで練習、日曜日は殆んど試合である。春から夏の期間の帰宅は午後8時過ぎ、5・6杯の飯を食ってテーンと寝るだけ、従って予習、復習をする習慣は全くなく学業は常に出了とこ勝負。サラリーマン生活でも同様死ぬまで続きそう。お蔭で博才是万成強化されたようだ。

時あたかも、日支事変が次第に拡大し第2次世界大戦に序々に近づきつつあり、軍部の独裁体制と共に統制が強化され、一般の社会生活においても、物、心共に窮屈になりつつあった。

当時我々学生生活に最も恐れられていたのが指導教官である。日常の生活行動を監視監督するものである。何しろサッカーの練習を終えて、空腹を抱えての帰路にも自由に飲食店に入る事はおろか、駅弁を買う事すら監視の目を盗んでいたものだ。多分4年生の頃だったと思う。横浜2中で試合を行った後、伊勢佐木町に繰り出し、当時としてはしゃれた店であった不二屋で、昼食をして、映画を観た。「紅の翼」なるアメリカ物、観て気分よく帰って、翌日、全員職員室に一日中立たされる仕儀に相なった。やはりある指導教官に見つかったのである。ここでその当時の悪友共を紹介しよう。まずセンターハーフの保利恒一、小学校時代からサッカーをしており入学当時から有名で1年生からレギュラーであった。我々のエースではあったが、何分色男で女学生とデートして危く、首になりかけた事があった。

次は一卵生双生児、異色の小野曽、勝兄弟である。容貌全く同じ二人が左のインナーとウイングである。敵は万成、まどわされたようだ。技もなかなかなもので、二人のコンビネーションワークは、見ごとだった。共に真面目な青年だった。

海老原謙、猪突猛進型の性格がそのままプレーに出る。右のウイングで、私の左からのセンターリングを突進、ヘディングでゴールをきめた率は高かった。

土屋義彦、我々の仲間では、最も小粒であったが、なかなか器用で、小枝に長じていた。右のインナーでこまめに活躍していたが何分瘤の強い、わがまま坊やで扱いが難かしかった。

左のハーフバックは私である。生来運動神経がにぶくて、下手なプレーヤーであったが体力と忍耐で何とかそれなりにこなしたと思っている。

菅原留意、右のハーフバックである、体が柔軟で執念深く執拗にタックルを敢行していた光景が印象的だ。若干変わりもので、当時はサッカーを止める止めないで時々もん着を起していたが、社会人になってからも熱心にサッカーを続けているようで世の中は不思議なものだ。

右のフルバックは太田、体力と馬力は随一、ヌーボーとしたさっぱりした男だった。我々が5年生の時には、これにセンターフォワードの早川右のハーフバックが海老原（弟）、キーパーは川口と云う顔ぶれだった。コーチだった人々もサッカーのために生れて来たような熱心な先輩が次々と現われ、大いに鍛えられた。先頃亡くなられた岩渕氏、通称ライオンこと藤田氏、島田氏、大学の現役選手だった有馬氏等が思い出される。チームワークも良かった。気の合った連中だけのクラブの様な雰囲気だった。神奈川県では4・5年生の頃は負ける事を知らなかつた。当時の蹴球部長香川氏を始め関係者は、勝つのが当たり前で負けると悪い事をしたような気がしていた。私は3・4年生の時、続けて甲子園の全国大会に出場したが、朝鮮勢にコッピドクやられ、その普成中学とか哉済中学が毎年優勝していた。4年生の時だったと思うが、キックオフするや得意のパスワークで、数十秒で1点をとつた。これはいけるぞと喜んだのも束の間、たちまち敵の猛攻にかなわず8-1で敗れてしまった。無論、敵は朝鮮勢で普成中学だったと思う。現在日本と韓国の試合でも残念ながら彼等の方が一枚上手だ。

全国大会出場には、山梨、神奈川、静岡県のいわゆる山神静の代表になる必要があった。山梨県は、韮崎中学、甲府商業、静岡県では刈谷中学、志太中学が、地方予選の常連だった。当時我々のサッカー生活は、春秋の県内リーグ戦、夏は地方予選に続く全国大会、一年の締めくくりとして年末に行われる全関東中学選手権大会という事であったが、全国制覇はもちろんあるが、先づ関東の選手権を手中に收める事が湘南蹴球部の悲願であった。当時は中学校の部に師範学校が参加しており、

平均年令が高く、体力が優り技術的に強力で、青山、豊島等の師範学校が殆んど、優勝をさらっていた。

我々5年の最後の試合として、昭和16年12月30日に優勝戦を相手は多分、青山師範だったと思うが、行った、延長2回、冬の日は早く、スタンドの影が殆んどグラウンドを包み、寒さで上半身は無感覚になったが、足は自動機械のように動き廻ったが、2時間に及ぶ戦いも、我が方のヘディングシュートで結着がついた。悲願がかなったのである。

私のサッカー生活で最も印象に残る出来であったと今でも、その時の光景が目に浮ぶ。

12月8日

17回生 海老原 謙

グラウンドで練習の最中に、日米開戦の報をきいたのだから、我々が湘南サッカーチームでフィーバーしていたのは40年も昔の話なのである。ながい部の歴史の中で帝王「ガンブチ」にたてついた反体制派は少ないとと思うが、当時、私と菅原(留意)は、もう理由もおぼえていないが、とにかく彼に反発して、一時退部した。菅原は意地を通したが、私は試合に出たくて、間もなく復帰し、甲府市での「山神静」予選大会で優勝した。戦後の講評でガンブチさんが「今大会のお前の働きは圧巻であった」と満面で、ほめてくれたことが、今でも忘れられない。つづいて全関東大会で、宿敵、豊島師範、青山師範を連破し、前年につづき連続優勝したのであるが、延長2回決勝点は私のヘディングであった。

本年56才、ふりかえるとながい人生があり、昭和16年は瞼も熱くなる私の青春そのものである。

鎌倉付属と湘南サッカー

17回生 保利 恒一

私とサッカーとの出会いは、小学校3年生から始まる。当時の神奈川師範附属小学校（現、横浜国大附属鎌倉小）に在学中、教師の見習として教壇に立っていた所謂教生の先生に手ほどきを受け、授業の始まる一時間位前に登校して、小野兄弟達とボールを蹴ったものである。湘南に入學して、ある先輩の強い進めにより、バスケット部に席を置いた。処が1年の夏休みの前であったか、当時のサッカー部長香川先生から「附属小学校から來た者は、全員サッカー部に入れ」との強引な指示を受け、止むなく、サッカー部に入部したわけである。

1年の時の強烈な印象として未だに忘れられない事は、12月の神宮で行われた全関東の試合である。私は一年からレギュラーにされ、サイドハーフをやらされた。試合そのものの内容は余り覚えていないが、朝日新聞の主催であった為、当時の朝日スポーツに“湘南の保利は、若干1年と云えども……云々”との個人評を書かれた事である。また当時は3年生迄のチームを作つて、神奈川県のトーナメントも行われており、此の試合に於ても我々は、県下敵無しであったと記憶している。好適手であった小田原中学の露木君とは、先日も旧交を温めた許りである。

同期の仲間のポジション等は、カッパ（河西）が紹介したので省略するが、我々の仲間は、当時をふり返る時、湘南サッカー部全盛時代の礎を築いたのは、我々だと自負していると思う。何れにしても、サッカー部を通じての友人は未だに言いたい事を言える仲間であり、年令を忘れさせてくれる仲間でもある。

戦時下とサッカー

18回生 早川 純生

昭和16年12月の大東亜戦争の開戦を前に1年間は、国全体があわただしかったのか、全国大会はなかった。しかし明けて17年は落ち着きをとりもどした1年と云えるかもしれない。

前年度のチームが5年生主体であり、優れた選手が多くただけに、新しいチームをどのようにまとめたら良い成績を残せるかが大きな課題であった。

5月の毎日新聞のトーナメント大会には、5年3人、4年4人、3年2人、2年1人という若いチームながら決勝に進むことができた。久しぶりに決勝にでてくる鎌倉師範が、何としても勝たんものと湘南の練習を見に来たり、こちらも見に行つたことを憶い出す。決勝のグランドは、接収されたY C A C のロングラウンドであった。当時、ロングラウンドで試合できる機会は絶無に近く、夏の甲子園の全国大会（陸上競技場の内側）、冬の明治神宮競技場の関東大会だけであった。そんなこともあって、皆のフットワークはよく、R W小西（3年）のセンターリングをL I田村（4年）がゴールポストの下に決め、その後もよく頑張り、前後半ともに2対1、計4対2で優勝できた。

続いて7月下旬には、全国大会の山神静予選が湘南で開かれ、甲府商業を2対0、志太中学（現在の藤枝東高校）2対1で敗り、苦戦ながらも全国大会に出場できた。前年の強力チーム時、理由は忘れたが全国大会がなくなり残念な思いをしたのが思い出される。志太中学には、後に日本代表となった松永君（早大一日立）がC Fにおり、1年生位だったが、よく声をだしよく動きまわっていた。7月の暑い日に3チームが1日で代表をきめるため、各チームともダブルヘッダーであったが、湘南は第1、第3試合という良い条件もあり、相手の疲れもあったのだろうか、L W服部のセンターリングをG Kがハンドルしている（上にボールをはじいた）ところをG KごとC F早川が押し込んで代表となることができた。

8月の全国大会は、戦時下のこともあり、文部省の主催であった。12チームの参加で修道中学に敗れて、第3位となった。当時の交通機関は、東京～神戸間に、特

急つばめが走っていたが、大船発6時、大阪着17時の普通列車で参加したように思う。大船出発のとき、富岡先輩から鎌倉ハムの差し入れがあったように思う。

秋のリーグ戦には勝ったものの、明治神宮国民大会（現在の国体の前身）には関東予選で敗れ、続く関東大会には、2年続けて持ち帰った優勝旗を何としても守ろうと練習に励んでいたところ、大会の一週間位前に中止の報告をうけ、安どの胸をなでおろした。この大会の前、12月1日には、G K川口（5年）が海軍兵学校に入校したため、その穴を如何にうめるか頭痛の種であったが、上の通り優勝旗は残ったものの、火事で灰になってしまったらしい。

当時の部長は、香川先生、また浅沼先生（現在学習院）もよくグラウンドに現われて激をとばされた。高師じこみのサッカーを我々に教えて下さった阿部先生は、硫黄島で戦死されたと聞く、練習後にもいろいろと教えていただいただけに懐しく思い出される。誌上を借りて、先生の御冥福を祈りたい。

約35年の昔のことではあり、当時の記録を残していないため、一部に思いがいがあるかもしれないでお許しいただきたい。それでも、ある瞬間がパット、目の前に出てくることがある。そして、あんなこと也有ったなあと、湘南サッカーチームの楽しい思い出がよみがえってくる。

多くの先輩に励まされ、教えられ、今までサッカーの良さを楽しむことができたことを感謝します。

優勝前後の思い出等

22回生 松浦 正美

戦争中、勤労、学徒として約2年間、各クラスが分散して、各地の軍需工場で生産に従事していた我々は、ボールも靴もない物資不足の中で、休憩時間になると、ゴムマリでもボロ布でも、玉の様なものを搜して来ては、即席のゴールを想定して、サッカーをしていたものです。かくて終戦を迎えた訳ですが、1級上の21回生が、戦時短縮で20回生と共に巣立っていましたので、我々4年生が最上級生、当時の在校生は1200名位であったと記憶しています。第2学期開始早々、生徒全員が、いづれかの運動部に所属するよう要請があって、各運動部が戦後復活の第1歩を印した次第です。サッカー部（当時は蹴球部と称していた）は第1歩を踏みだした段階で約100名近い参加者が集まった位、人気の的でした。もとより用具不足は避けられず歪なボールや破れたボールも修理して使用しました。部員のいでたちも、今にして思えば、珍妙そのものの有合せスタイル、ボール不足の関係から、当時の1、2年生は練習時間の大半を、我々上級生のためボール捨に費していただきまして、今でも氣の毒に思ってます。当時は極度な食糧難時代でもあります、弁当はいつも豆や芋まんじゅう“引地の大福”は先輩達の語り草でしかありませんでした。物質的環境が、最悪状態に置かれていた点は以上の通りでしたが、有難いことに、先生、コーチの先輩方には誠に恵まれまして（当時は“恐”“強”“怖”“畏”～先輩?）香川先生、大野監督、を中心に、服部、小熊、安保、戸沢、早川、田村兄弟、海老原兄弟、小野兄弟、山口先輩各位等々、紙面に書き切れない程、幾多大勢の先輩、諸公が、連日の如く来校され基本のイロハから、力学的理論、作戦基礎、体験論等を盛り込んだ誠に、熱心なコーチを受けたものです。紙面上で恐縮ですが、改めて先輩、諸兄に厚く御礼申し上げます。遂次用具関係も整備され、写真で御覧の通りヤボッタイ（当時は最高ファッション）ながらも、香川嵩キャプテンを中心に、チームらしいチームに成長して、常勝湘南が形成されていくのですが、優勝の瞬間の涙は又と味うことの出来ない種類の涙として、鮮烈な印象となって脳裏に焼き付いております。喜怒哀楽を超越した涙とでも申しましょうか、放心の涙とでも申しま

しょうか、今でも説明出来ない格別の涙でありまして暫しの後、漸く嬉しさと感激が実感として込み上げて来たのを忘れ得ません。いずれにしましても、戦後の政情混乱、物資不足の渦中、悲願の優勝は、前述の如く諸先生、諸先輩方全員の努力が凝聚、昇華した成果であると信じて止みません。

優勝後は県内各中学校サッカー部からの招待試合に忙しく晴々しい思い出が重なりました反面、大学進学が一苦勞、諸先生のお情けで良い点数を頂戴した割には、中味が薄く、山口雄司先輩（現明治大学サッカー部総監督）との出会いとなって、辛うじて、明治に入学することと相成ったのですが、これが機縁で以来30有余年、未だに強い絆の切れない御縁となって居ります。山口先輩の最近の述懐に湘南サッカー部に在籍していて、しみじみ良かったと思う。小西、小林（敬称略）の素晴らしい同期生に恵まれ、香川先生、浅沼先生その他の諸先生及び、岩渕、安保、大野田村、早川等幾多の諸先輩に、可愛がられ特に、湘南地方で商売をしていると、目に見えない恩恵を最近では、ひしひしと感ずるとか…… 今後O B会の結束、確立と共に非力ながら一員として、参加させて頂くと共に、湘南サッカー部の栄光への階段が再び拓けていきますよう心から祈ります。



湘南サッカー万才

22回生 桑田 孝

中学、大学、会社でと25年間も、現役でサッカーをしていたので、憶い出深いことは沢山ありますが、何と言っても、忘れられず、一番喜しかったことは、神戸一中に勝って全国優勝したときのことです。

戦後初めての全国大会（S21年の第1回国体）で、中学の一般レベルは未だ低く、関東では敵らしい敵のいなかった我々にとり決勝戦で当った神戸一中は初めての強敵でした。神戸一中と言っても大したことはないだろうと思っていましたが、流石伝統の学校で、チーム力は我々より上だったろうと思います。

遠征前の最後の日の練習で、ポイント、ケッターのC F小林君（当時早川）が足首を骨折、急きょ Backの補欠だった村主君（3年）を C Fにすると言った状況で勝てたのは、どうしても勝つんだという執念が、0-2、1-2、2-2からタイムアップ直前に1点入れさせたものでしょう。

戦後のボールもない、靴もない、ユニホームもないという状況からスタートしたので、ボールもつきはぎ、靴もユニホームも先輩から貰い集めるといった状態でしたが、練習量とチームワークは抜群／先輩も、現役と同じ位の人数が何時もグラウンドに集る熱の入れようで、監督の大塙さんやコーチの早川さんには特に世話になりました。

湘南のサッカーチームを作り育てた岩渕さん、赤木校長、香川先生、浅沼先生、大勢の先輩を含めたオール湘南の執念が夢にまで見た神戸一中を破って優勝させたものと思います。

中学、大学時代で思い出す事と言ったら、サッカーのことだけ、友達も、付き合う先輩も、後輩も、サッカー仲間だけ。今でも春秋の旧制高校OBサッカー大会には必ず参加する位のサッカー気狂いになった原因は、湘南に入り、サッカーチームに入ったからです。お蔭で、良い先生、先輩、仲間に恵まれたと心から感謝しています。

今、下の息子が、湘南に入っていますが、子供の時サッカーしか、知らなかったのに、（名古屋に勤務した時、野球を知らなくて、近所の子供に馬鹿にされたそう

です。) 中学から、バスケット部に入って、バスケットに明け暮れています。

親子二代、湘南のサッカー部員になれなかったことが、残念です。

湘南サッカー万才!

何時の日か、また、後輩諸君が全国優勝してくれるのを祈ります。//



終戦から全国制覇まで

22回生 香川 嵩

昭和19年6月からは工場への学徒動員となり翌20年8月の終戦まで蹴球部の活動は途絶えたが、終戦と共に当時の最高学年、我々（4年生）が中心となって活発にボールを蹴り始めた。それから翌21年11月3日の全国制覇までがいわば、戦後の湘南蹴球部の再建期ともいえる時期で、その時のことを見出すままに書く。

私自身は海軍兵学校から20年10月1日に、湘南中学へ復学したが、その時すでに桑田主将を中心に蹴球部の活動が始まっていた。工場動員やら、爆撃やら戦争中の抑圧された生活から、解放され母校の広い校庭に戻って伸び伸びとボールを蹴ることのできる解放感にみんな満ち溢れていたように思う。チームを編成するに当たって籠球部にいた（当時）早川忠生君をくどいて成功したのもこの頃である。4年生から桑田、海老原、宮沢、松岡、山中、松浦、矢住、ゴールキーパー佐々木（茂）それに私、3年生から早川、佐々木（道也）、三橋、原田、下、の諸君により戦後最初のチームができ、毎日のように練習を重ねた。2年生には小田島、村主、香川（稔）1年生には石原慎太郎君もいた。ボールや靴を自分でつくろいながらの練習だった。さてチームはできたが終戦直後で他校がまだ立ち直っておらず、何とかして他校との試合をしたいというのが一同の念願であったところ、湘南OBの服部氏が主将をしていた旧制第一高等学校のサッカー部との練習試合ができることとなり、20年の11月3日に湘南のグランドで手合させた。これが最初の対外試合であり、戦前の伝統を復活、発揮すべく大きな気負いでのぞんだものの3対1で敗けて大いに気を落した。私自身はその翌12年からその一高のチームへ入ることになり、当時の相手方の連中と今も親しくしているが、ボロボロのシャツと地下足袋をはいてグラウンドにあらわれた一高側にとっては、サッカー靴と揃いのユニフォームに身をかためた湘南勢は驚異であり、戦後初期の印象的な試合だったという。

昭和21年春からわずかな参加校ではあったが県下の中学校のリーグ戦が復活、小田原中学、鎌倉中学等と対戦し、連戦連勝の強さを誇った。新年度、主将海老原朗君は途中で水戸高校への進学がきまり、あとは私が主将をつとめた。先生では、香

川幹一（地理）、千田敬三（英語）の両先生が、熱心に蹴球部を育てた。浅沼先生はすでに終戦の年学習院へ転じておられた。また、夏の練習には、東大OB三上一郎氏、秋に入ってからはゴールキーパーのコーチとして、金沢氏を東京から迎えて練習にはげんだ。そしてこの間、戦地から復員、復学して来た、様々の先輩たちも母校のグラウンドへあらわれるようになり、練習時のグラウンドにもぎやかになった。当時福島県にいた岩渕さんも時折現れ、或は手紙で激励された。

この年の秋、第1回の国体が兵庫県で開かれることとなり、中学校のサッカーは東西日本から1校づつが出て、国体の場で決勝戦を行うこととなった。われわれはこれを絶好のチャンスと闘志を固めた。先輩間の打ち合わせで監督には大塙正雄先輩が選ばれ、大塙さんは毎日のように鎌倉から放課後のグラウンドへ現われ、我々を熱心に指導された。

正確な記録が手元に残っていないが、県下予選を大量得点で勝ち抜いて、高師付属、浦和、堺崎、真岡などに勝ち、東大御殿下グラウンドでの東日本決勝では、仙台一中と対戦、延長の末1対0で東日本代表となった。関東予選以降は、堺崎（6対1と記録）をのぞいて、何れもかなりの接戦であり、特に体力のまさる真岡中学との雨中の試合は2対1の辛勝だったと思うが、相手の力強さにおどろいた。

10月末、香川、千田の両先生と大塙監督に連れられて、この年出来た応援歌「緑濃き……」に送られて、満員の夜行列車で大阪に向い、大阪肥後橋の出雲や旅館に合宿、試合前日の練習を決勝戦の相手神戸一中のチームが見に来いよいよ、明日だと緊張した。

国体での神戸一中の決勝戦は、11月3日1時半から西宮球場の南側のサッカー場で行われた。試合開始後、敵はやはりなかなか強いなと感じたのを覚えている。果して前半は1対0でリードされ、後半風上に陣して逆転、3点を奪い3対2で勝ったわけだが、追い越しの3点目は、タイムアップ1分前に、RW桑田の右タッチライン沿いからのロングシュートがゴール左隅に決まった劇的なものであった。ラッキーな勝利ともいえるが、一方右と左の両ウイングの対照的な形のすさまじい突進力と中央フォワードの得点力と堅実なバック陣の総合的な実力による全国制覇だったと思っている。終戦直後の混乱期、まだサッカーをやる余力が國中に満ちていない時期の勝利ではあったが、県下予選から、優勝まで総得点40数点、失点5点位

のスコアだった、そしてこれを契機に昭和20年代湘南のサッカーは、何回目かの黄金時代を迎えた訳であり、以後大学リーグでの湘南O Bの活躍もめざましいものとなつたのである。

なお、決勝戦のメンバーは次の通りだった。

キー・パー佐々木、フルバック（右から以下同じ）山中、松浦、ハーフ原田、松岡、三橋、フォワード桑田、下、村主、香川、宮沢、補欠小田島、香川。なお東日本決戦までC Fとして活躍した、後半のオリンピック選手早川忠生君は、西宮へ出発前の最後の練習で負傷し、決勝戦当日はスパイク迄はいて見たもののプレーは無理で出場できず、急拠3年生村主君をC Fに起用したという一幕があった。優勝のしるしは、一枚の紙の賞状であった。それをもって帰って体育館で全校生徒に報告会を開いた。全国優勝を遂げてから、その年度の終り迄に、又いくつかの県下での試合があった、厚木中学に同校グラウンドで13点、横浜一中に、浅野中学のグラウンドで9点などとったようだ。

随分昔の話を書いたが、ここに名前の出て来た人々にとってはやはり忘れ難い痛烈な体験であったはずであり、湘南サッカーハーフの歴史の大きな1ページであったことは間ちがいない。

第3回国体、幻の優勝

23回生 小林 忠生

決勝戦の対手は、前年度全国大会の覇者であり、超高校級との評判が高かった、広島大付属高校で、特にR W木村（関学一全日本）、R I長沼（関学一中大、メキシコオリンピック全日本監督）、C F樽谷（関学一東洋工業）のFW右サイドの突破力は勇名を駆せていた。一方我がチームも予選、本大会を勝ち進んで、必勝の意気高く好調裡に、この試合に、臨んだのであった。試合前のウォーミングアップも充分にやり、いざ決戦の時となつたが、肝心の対手チームの姿が見えないので気がついた。大会本部も慌てて、広大付高チームの宿泊先に連絡したところ、試合時間を間違えてまだ宿舎にいるという始末であった。遂に定刻を過ぎ大会本部から「規定によれば、対手が定刻迄に来ないので当然不戦勝になるが、それとも待って正式な試合を行うか。」との照会があり、岩渕監督と相談のうえ、勝算のあった我々としては、当然のことながら、試合をすることを選んだ。今なら全く考えられないことだが、当時の食料事情などもあって、この対手を待つ間に、弁当を食べて、英気を養おうと箸をとったが、その途中で対手が、現れたので、そそくさとキックオフに臨んだものであった。

ひるがえって想いおこすと、昭和21年の第1回国体で見事優勝をなしとげたが、翌22年は国体に高校の部門がなく、代ってこれが最後となった第26回全国中等学校大会が開催されたが、県予選決勝において、10数年振りに、小田原中に1対0で敗れて終った。矢張り前年の全国制覇に慢心し、緊張感が欠けていたことが最大の敗因と大いに反省させられた。当時は、学校制度改革の時期で、23年に新制高校が発足したが、我々部員の5年生の大部分が旧制高校、大学予科への進学を断念し、前年の屈辱を期して高校3年に進んだ。前年の敗戦が、良薬となって、よく練習もし、気持の面でも、まとまっていた良いチームだったと思う。（なお当時岩渕先輩は、東北方面で電気関係の工場を経営されていたため常に練習、試合に来られるということではなく、折にふれ試合に来られて注意を頂いたり、手紙によって何かと御指導を仰いでいたが、云って見れば通信教育を受けていたようなものだった。勿論国体

には、監督として指揮されたことは云うまでもない。)

さて、この決勝戦の試合の方は前の試合で、L H小川が足の骨を折って終ったため、駿足R W木村のマークを誰にするか、苦慮した結果バックスの経験はないが、足の早い佐々木(L W)をL Hに起用し、木村のマークに専念させることにした。当時我がチームはツーバックシステムをとっており、通常の試合では、S Hは中盤でウイングとインナーをかけ持ちでマークするのだが、この試合に限っては終始マントリーマンでぴったりとマークさせた。これが一応成功して、突破力のある木村の足を封じたために、戦況は我がチーム優勢に進めることが出来、なかんずく、R W香川が好調で、再三好センターリングをゴール前に送ったが、逆サイドの詰めが、もう少しのところで合わず、多くのチャンスを逃して終った。そういううちに対手にとっては殆んどこの試合で唯一と思われたチャンスをものにされて終った。すなわちハーフラインを少しこえた辺りでの下Kが直接ゴールに達し、G K川島がジャンピングキャッチして降りたところを対手、F Wに押し込まれ、ボールを抱えたままゴールラインを割り無念の失点となって終った。現在のようにG Kが、極めて保護されているルールのもとでは当然ファウルの笛が鳴ったであろうが、当時としては極めてあたり前のチャージであった。

優勢に試合を進めながら、あたらチャンスを逸し、一方数少ない対手のチャンスをものにされ泣けない敗戦であった。今になって反省してみると、パスを廻すことに精力をさきすぎ、試合の流れをかえるためには個人のドリブルで強引に敵陣を割りゴールを狙う図太さがあつてよかつたと後悔される。さればとて、規定通りに不戦勝即国体優勝の道を選ばず勝負を挑んであたらたら優勝を失うことになったが、勝利を信じて、我々の若い青春を賭けて敗れたことに悔いはない。敗れたとはいえ、矢張り試合をしてよかつたと、今でも確信している。

私とサッカー

24回生 小田島 三之助

「サッカーの条文は全部で17条、これですべてを表現し規制されている。ところが、実は18条がある。それは良識でありジェントルマンシップである」、この言葉に感動し湘南中学にサッカーを見に行き夢中になり始めたのが小学六年生の時、これから私のサッカー人生が始まった。

まさにサッカーは私にとって人生である。「サッカーは脚本のないドラマである」映画も芝居も小説もTVドラマも素晴らしい演技力とその表現は人を笑わせ泣かせ喜こばせ感動させてくれる。しかしそれはあくまでも脚本によって作られた約束事だ。ところが、スポーツは違う。充分に体を鍛える、常に体調を整え、試合に充分な基本技、個人技を積み、戦術が実行出来るレベルまで行くのが大変だ、強く上手でなくてはレギュラーになれない、なれて試合に出られても、偽りは許されない、自分の調子を偽ったり積み上げが不足のままだったら試合は敗ける。どう展開するか、どうやったらどう終るかの台本はない、その上嘘がつけないのである。この嘘のつけないことがたまらなく好きだ、仮りに試合でバックアップする時しなかったり、フォローする時、サボッたり、所詮手抜きである、サッカーで一番いけないことは自分のゴールに球を入れてしまうこと、次に手を抜いて動かなくなることだ。サッカーは予測が最も大切だ、仕掛けの為のリズムを生み出すことが手を抜いては出来なくなる。遊びの試合がつまらないのは、トレーニング不足と、自分のポジションの役割を果さない手抜きがあるからだ。サッカーは男のスポーツの極め付けだ、私は少年の頃から50才の今までこの嘘のつけない、努力をしないと直ぐに落ち込んでしまうサッカーがたまらなく好きだ。私は西部劇とか時代劇が割合好きだ、それらの主役達は、絶対に生きのびられない剣や弾丸の嵐も、場面が一変すると又現れて出て来る。この公然とつける嘘がうらやましい程だと思っていた。

サッカーから学んだことは多い。「かって出来たから、いつでも出来るさ」というまちがった甘い考えを過信といい、「これだけ積み上げて毎日を努力しているのだから、きっとやれる」と云う信念を自信だと私はサッカーから学んだ。

現在会社の仕事の中で、色々なことに直面するが、自分で考えているより遙かに自分がねばり強く、何事にも何度も乗り超えているのを不思議に思う時がある。ひょっとしたら、サッカーの練習や、合宿の方が辛かったのではないかと思う。特に湘南のサッカー部は昔から学業にも優れた文武両道の諸先輩が多く、数々の事を教えて頂いた。私を育ててくれた最も大切な基本は湘南中学時代にあったと思っている。



最後のコーチとして

27回生 柳川 明信

終戦の翌21年、旧制中学最後の入学で湘南の楠を仰ぎ以来30有余年、人生のいろいろな節目で、湘南の白いゴールと岩渕さんが心の寄りどころであったし、これからもOB仲間との交流を加え、ますます深いものになって行くものと感じられます。

入学した年が全国制覇、ガンブチは先輩達と共に遠き神の存在。27年卒業する迄の6年間、前半は名門校の栄光と、後半はその残光をかろうじて維持していたと記憶しています。

現役時代には全日本クラスの先輩が多く来校、実技指導と旧制高校の美風を私達に吹きこみ、その頂点の岩渕さんからは身をもって示す、心技両面の教えを受け、名門校の誇りと伝統をつちかって来たわけです。

27年に同期5人と共に卒業。有力OB達は社会人となり、又岩渕さんも遠く東地に在り、日常現役へのコーチ役として「お前残って現役をみよ」とのひとことが、私の大学生活を湘南一辺倒にさせてしまいました。運動部、文化部いずれにも属さず、午前講義、午后湘南のグラウンドの日々。宮原先生が教育大を出られ就任されるまでの間、数少ない部員達と、うますたゆまず、湘南蹴球部を維持して來ました。

この間が我が部史のなかでも最も恵まれず寂しい時期ではなかったでしょうか。OBの支援少なく、技量優れた指導者おらず、岩渕さん遠く、わずか大声でどなる私と、部員達の固い結束が支えて來たのではないかと思います。30回岡田、松本他、31回大内、田中他、32回落合、清水他、とは永い年月を経ても一種旧制高校的心情のつながりを感じるのは私の感傷だけないようです。時にはるばる來校される岩渕さんに、どれ程、励まされたかしれません。

岩渕さんが戻られ、宮原先生が赴任され、ようやく、伝統と実のある部へと、昔をとり戻してゆき、これが36回を中心とした関東大会での活躍へと発展していったと思います。

私とこの時期の部員達は、部としての苦しい寂しい間をガンブチを心の支えとし、伝統の灯を守りつづけ、次代へとひきついだのだと考えます。

社会に出てから大学生活を、ほとんど、エンジョイすることなく過したことが、非常に悔まれた時もありました。しかし反面この間の経験と人とのつながりが、私にとって他に代えがたい財産にもなったわけです。いまでは転勤の多いサラリーマン生活のなかでひとつの故郷となっています。

53年12月、岡田、松本、大内、牧村君等と一杯のみながらO Bチーム発足へと発展、年老いた岩渕さんは非常に喜こぼれ、近年低調になったO Bの活動のてこ入れにと、旧制用に、準備されていたユニホームを譲られ、「湘南ペガサス」の出発となりました。

以来2年、大内、松本、両君の努力で、クラブとしての基盤が出来上りました。誰もがそれぞれ、想い出のつながりにある岩渕さんとの糸で結ばれているのです。そして今は亡きガンブチさんに最後の贈り物として、O Bチームが結成出来、喜んで頂いたことが一番の供養になったと思っています。

今後もO B活動の中心として、若手の参加も求め、クラブチームとして発展させ、現役の支援の中核になりえたらと考えます。やはり現役あってのO Bですし、懐かしい青春は現役の活動にダブッテみえるものです。そして我々が敬愛するガンブチの願いです。湘南サッカーよ永遠たれ！

ガンさんから手紙の指導

27回生 栗原 克夫

「あれからもう30年もたってしまったんだなあ」と心の中で呟きながら、一人で居間に座し遠く懐かしい青春に想いをはせて気持をしづめ瞑目しておりますと、不思議にも時の流れをいつの間にか超えておりました。

太陽の輝く青い空の下、真黒に日焼けした埃りと汗にまみれにまみれた、イレブンの顔、顔、紺碧の空の色をそのままに映したユニホームが動き廻る、ただひたすらにボールに喰いついてゆく姿、一点差、敗けている、時間がない、焦りが胸をしめつける、早くやれ、頑張れ、目の前に大きなボール、よしシュートだ。アア、足が動かない……汗びっしょり……。ハット我にかかる。そうだ、ここ30年来仕事で疲れた時に見る夢だ。

昭和26年春、教育大附属高校との定期戦に敗けた時の夢だ、その時迄ずっと勝ちつづけてきた定期戦に私が主将になったとたんに敗けてしまった。この時の悔しさと申し訳なさとが今でも重くのしかかっているのでしょうか。

私が大先輩岩渕さんから手紙で指導を受けつけたのはこの試合の後からでした。当時、岩渕さんは東北地方の片田舎にお住いでいたので速達でやりとりさせて頂きました。最初にいただいた手紙は今でもよく覚えております。岩渕さんによれば、昨年度のチームは全国制覇が可能な実力のある大型チームであったが、今年は技術面でも、体力面でも劣る小型チームだから大きな事は望んではいない。と、そこで練習は基礎技術の修得に努めること、例へば、自分がコントロール出来る範囲内に全身どこを使ってもかまわぬから、ストップ出来るようにする事、サイドキックによるシュートパスに時間をかける事。バックスのキックは短めでよいから、目的地点に正確におとす事、シュートはゴールの枠内に低めのボールを集めよ。等々。その他詳細な指示があり繰り返し練習するように、そのうち機会をつくって見に行くとの事でした。又心配することはない湘南は夏休みの合宿練習後は見違える程強くなるのだからと励ましの言葉が添えてありました。このご指示に従って、新入生を混じえて練習にはげんでおりました。この間学校の近くにお住いの、小田島さんは

じめ、諸先輩にいろいろとご指導頂きました。

ある日のことでございます。いつものように放課後グラウンドに行きますと、巾の広い濃紺の縦縞模様のシャツを着た、やや小太り気味の人がゴールの側に立っているではありませんか、何の前触れもなく突然やって来られたのです。ビックリ仰天。コリヤ大変だ。「いつものように練習しなさい」といったきり、だまってにこにこして見ているだけ。昨年までの怖い印象はどこえいったのか。いったいどうしたことか、そのうちにどなられるのではないか。私は試験官の前に立たされた気の小さい受験生のような気持でした。

その後、しばらくして、長い長い手紙が来ました。練習方法の一部改善と練習内容に関するもので、練習は実戦に即したものになっていました。又各一人一人についての注意事項も書かれておりました。

ついに国体予選を兼ねた県大会がはじまりました。第一試合はY校戦、湘南グランドで雨の中の泥んこゲームです。押しに押し、攻めまくっているのですが、なかなか点が取れません。私は敵陣ゴール前の混戦で無理な姿勢でシュートしたため仰向けに倒れ逆手をついたところを敵のバックスの1人が私の左肩の上に落ちて来ました。その瞬間左手首を骨折てしまいました。すぐさま退場させられ病院につれていかれました。当時のルールでは欠員を補充出来ません。私は治療のことよりも試合の方が心配でなりませんでした。石膏でかためたギブスをするやいなやすぐにとって帰りましたが試合は終っていました。『勝ったよ』と聞いてほっとしました。さて、これからどうしたらよいか、私は全治40日の負傷です。県大会出場はとても無理です。誰を補充すべきか、ポジションを替える必要ありやなしや、3年生諸君の意見はどうか。等々すぐにやらなければなりません。その晩、痛みに耐えながら窮状を岩渕さんに書き送りました。返事はすぐにとどきましたが、いたって簡単なものでした。Y校に勝った事が何よりとのことで岩渕さんによれば、Y校は強敵の一つだったとのことでした。私がぬけたくらい何でもない。今のチームが全力を発起すれば充分やって行けるとの事でした。私には精神的な面でのアドバイスがありました。その後も試合の模様や次の対戦相手等詳細に書き送りました。その都度適切なご指示をいただきました。私は指示をくりかえし練習に取り入れるように努めました。私は精神的に落ちつきをとりもどし、我がチームを漸次冷静に見るこ

とが出来るようになりました。3年生を中心にして部員全員が岩渕さんの教えをま
り努力して頑張ってくれました。全員が己を高めると共に、互に励しあい助けあ
い補いあって、練習に又試合にのぞんでくれました。そのかいがあつてお陰様にて
何とか、神奈川県で優勝することが出来ました。これは今は亡き大先輩岩渕さん
のご指導の賜物とそれに続く諸先輩が築かれた良き伝統のおかげであったと感謝して
おります。

あの怖いけれども本当は心のやさしい、懐かしさがこみあげてくる「ガンブチ」
さん、私達を深く愛し、慈しみ育てて下さいまして本当にありがとうございました。



昭和26年、そして30年後の今日

27回生 小瀬村 秀夫

部史については、多数の資料も出ている事と存じ、手元にある古い日記をめくるうち、たまたま、私がマネジャーも兼ねていた事からか、夏休み前の6月、7月の歴日にして50日間の出欠表が出て来た。試験と雨季又当時は5日制であり、練習日は24日間、試合1を含めて、半分しかボールを蹴らなかった事に意外さを感じさせた。

出欠については下記

部員18名(1年6名、2年4名、3年8名)

出席率 1年 57%

2年 79% 平均 78%

3年 84%

その間練習日使用ボール数、平均35個、少い時は2個、多い時で5個、戦後5年を経て、如何に脂をぬり、手入をしても、皮がのびて大きくなったり、変形したものが多かった。そしてその間、延20人の大学在学中の先輩のコーチを得ていた。

その年の国体は広島、我々もそれを目指して夏の合宿等では、夢中でやったものであった。ちなみに結果は参加15校、Y校、厚木、神工、決勝で小田高を破り県代表になったが、南関東予選で、北園高に不愉快な敗け方をした。その年、第3回の全関東高校選手権が、湘南と片瀬中で開かれた、又大毎予選等もあったが、進学を前にしての試合は国体予選程でなかった。丁度我々の年代を境にして、併設中学を経て高校生活は3年間という、過度期であった。諸先輩の残した数々の栄光を追いながらも、果し得なかった悔は残る。自分からサッカーをとったら何が残るか?と思った青春の一時期を過したものとして、それゆえのノスタルヂアからか、あまり強くなかった頃の友垣が復活した。「ペガサス」である。事務局に人を得て、試合の楽しみか、その後の夜を目的とするものか、何しろ面白いクラブが出来た。もう3年になるであろうか。亡き岩渕先生の肝入りもあって、その精神を最も受ついでいるという。自負も混じえて、何しろ50に近い初老から、30代後半の働き栄りを含めて数10名になるのではなかろうか。ペガサスの出来た動機も酒の上での事だそう

だが、今年の蹴球祭の折も例の如く一寸一杯となったところで、サッカーの運動量についてゆけない輩から、ゴルフの話が出た。当を得た事務局からすぐに行動に移すのが頼もししい限り、早速、2月には、梅の香のただよう、Y君のメンバーコースのレインボウC・Cにて、第1回のコンペ、3組12名、チームプレイとは異なる止ったボールへの挑戦に迄発展した。勿論チョコの応酬はあるし、その夜もゴルフとサッカーの話で杯は大いに斜いた。これとても、今後共続くであろう。回を重ねる度にエスカレートするに違いない。サッカーの話がとんだゴールオーバーのシュートになったが、平素の仕事外の交際とはかくなるものかと「集えや我友」 最近はゲストも多く迎えているようだ。



茫洋のかなたよりのメモ

28回生 嶋田 武夫

「第3回全関東高等学校蹴球選手権大会プログラム」 期日26年11月23日～25日

…… “あった！” 1日がかりでさがした甲斐があった。

全関東の強豪16校の中に、わが湘南高校の名がみえる。メンバー、監督岩渕二郎、G K 大枝孝夫、R B 柳川明信……なつかしさがあふれる。第一戦、千葉一高に決勝したが、第2戦真岡高に惜敗のくやしさが昨日のように思い出される。

重なり合って黄色いシミだらけの合宿通知や、私が初めての対外試合の対セントジョセフ戦で顔面を蹴られて、怪我をしたときの小田島、近藤先輩からの激励と見舞状は出て来たが、肝心の戦績記録は、遂に出て来なかった。申しわけない。

度重なる転勤で資料紛失したものと思われる。顔面の傷跡とこの激励状が、その後の大学、東大LB、東京キッカース、郵船等30年にわたるサッカーと人生にどれほど大きな励みとなったことか。

合宿通知。昭和26年8月16日～22日。食費￥500.-。米3升5合、箸及び毛布持参。当時の苦しい生活がしきりに思い出される。『ボールを持っている者は持参のこと。』 そうだ。夏休みには、ボールを家に持ち帰り、破れをつくろい、近所の海岸でドリブルの練習をしたものだ。物質的には、最低だったが、精神は豊 であった。現在の恵まれたサッカー界にあっても、わが母校が再び栄光の座につく日の遠からんことを祈っている。

想　い　出

30回生　岡田　清治

我々の時代は、岩渕大監督が湘南高校に勤務され始めた頃で、コーチには27回卒の柳川明信先輩、部員数約20名であった。

29年5月16日、国体予選神奈川県決勝で茅ヶ崎高校グラウンドに於いて宿敵小田原高校と対戦した時、双方譲らず引き分けとなった。そして15分ハーフの延長戦に入り0-2で敗れてしまったが、その時やおら岩渕さんは主審に「大会規則に延長戦というのではない」とクレームされ、ややもめた後、日を改めて再戦ということに落着いた。その3日後敵地小田原にのり込み再戦を行ったが、先取点をとりながら1-2で敗れてしまった。折角の岩渕さんのクレームに報いることが出来ず誠に残念であった。この敗戦を契機に、岩渕さん発案の本邦初お目見得？のボルトシステムが当チームで実験された、これには当時の相手チームはどこも目を白黒、フォワードが6人、バックが6人居る様な錯覚を起しマークしきれず、こちらは何時でも1人か2人がフリーとなっていた。そのため連戦連勝、この勢いで東日本大会に神奈川代表として出場が決った。この大会は、7月末から8月初旬にかけて神宮競技場（現在の国立競技場）に於いて行われ、1回戦対本庄高校6対2、2回戦館林高校2対1と我がボルトシステムでなぎ倒した。3回戦はもう一つの宿敵であった教育大附属高校との対戦となった。2回戦までは好天に恵まれていたのに、この日はドシャ降りの大雨で、グランドも絵画館前のサブグラウンドであった。グランド一面水たまりでボールを蹴っても全々飛ばず、ゴチャゴチャやっているうちに自殺点（筆者スイーパーが、今までに一度ダケノ記録）、を含め0対4で敗れてしまった。さすがの岩渕さんもガッカリ、我々もヘトヘトであった。後で岩渕さんは「あの雨でボルトシステムが、全く機能しなかった。もっと良い状態のグラウンドでやっていたら勝っていたはずだった」と言って慰めてくださったのが唯一の救いでありました。

青春とサッカー

31回生 大内 健嗣

入学時、10数人いた同期生も、3年進級時には、松居、酒井、田中、長谷川、浜野、大内の6人しか在籍せず前後の、30回生、32回生にくらべ約半分の人数でした。しかし、コーチには、岩渕先生をはじめ、着任まもない宮原先生、第27回生の柳川さんと、それぞれに個性の強い方々に恵まれ、よくどなられながら練習をしました。コーチの方々は練習中は、非常にきびしく鬼にみえたことも、しばしばでした。しかし練習や試合後は、大変たのもしく、やさしく思えた事も多かったと記憶しています。ある時など、藤嶺学園との試合前に「今日は10点以上入れて来い。得点出来たら1,000円やろう」といわれ、我々は夢中になって、確か10点とったと思います。試合後、その1,000円を持って「松本屋」へ直行し、アイスキャンデーを、200本チームメート10数人で食べたことなどは、非常に楽しかった記憶の一つです。我々が3年生の時、国体が神奈川県で行われることとなり、地元開催ということで、サッカー代表として1校出場出来ることとなり、我々は勿論、コーチの方々も練習に身が入りました。この時はいくらどなられても、素直に聞け、一生懸命でボールを追いかけました。決勝戦まで進み、相手は翠嵐高校でこれに勝てば、神奈川県代表として国体に出場出来るというところまでこぎつけました。場所は県立サッカー場（現在の体育センター）、快晴、応援団も多く我々も、コーチたちも、気合が入っていました。前年は0-0、後半も30分すぎていまだに、両校無得点、ここで信じられないことが………

当時、県立サッカー場はグラウンドが2面あり、我々の試合中にとなりのあいているグラウンド内で遊んでいた近所の子供が笛を吹いたのです。22人は棒立ち、誰がファールをしたのか、どちらのフリーキックか、と主審に目をやりました。しかし主審は、知らん顔しています。あわててボールに目をやった時には、すでに遅く、ボールは、自陣ゴールへころころと入ったところです。とたんに、ゴールを認める主審の笛。1点とられたのです。あとは翠嵐高校の不必要と思える位のライン際での大きなクリヤー。時間かせぎのうちにゲーム・オーバー。我々11人は、お互いの

顔も見ず、話もせずに応援歌を聞き、コーチの顔も正視出来ずに着換えたことが思い出されます。何故あの時プレーを中断したのかといわれても、攻められている時の主審の笛は、ある意味での味方と思えたのでは……と、くやまれる試合でした。

その年の暮、全国大会県予選で翠嵐高校には勝ちましたが、後のまつりです。

思えば、1年の4月から3年の12月まで、わずか、33ヶ月でしたが、思い出多い青春時代を、湘南高校蹴球部に籍を置いたことは、その後の人生においても、多いにプラスになりました。この原稿を書いているうちにも、石段の上でどなっている岩渕さんの姿がうかびます。



昭和32年の活動

32回生 篠田 亮

33回生の私達が3年生としてプレーした昭和32年度は、湘南サッカーの長い歴史でも稀に見る低調な時期であったと思います。1年上級のチームは3年生9~10人を占め、中学での経験者も多い強力メンバーでありました。県大会はもとより、関東大会でもなかなかの成績をあげておりました。

これにひきかえ、私達のチームは、3年生までの途中で部を離れるものが多く、4月時点での3年生部員は5人（大滝基起、小堺泰正、後藤強、篠田亮、竹内洋）を数えるものの内2人は前年の12月以降に入部した者であり、中学での経験者は皆無という弱体でありました。

4月に行われた教育大附属高との定期戦には、新2年生を加えてもメンバーが不足し部員でない者を加えやっとという態で完敗してしまいました。その後、国体予選、浦和高定期戦（第1回）、西宮大会予選といずれも敗戦におわりました。なかでも、県立川崎高に敗れたときなどは、岩渕先生から「湘南の歴史始まって以来だな」などと毒舌を浴び、情ない思いをしたことを憶えております。

僅かに慰めとなるのは、当時県下最強であった鎌倉学園とは不思議に合性がよく、練習試合を含めれば4度程対戦し、1勝1負2分ぐらいであったことあります。敗戦も1点の最小差であったと思います。当時の鎌学は、片伯部選手（延岡工の中大・日立）と共に第1回エース代表のGKとなった松岡某君、のちに法政大のHBを務めた伊藤某君などを中心として比較的よくまとったチームであったことを附け加えて、私達の間接的な言訳にさせて頂きたいと思います。

それはさておき、このようなパッとしない成績におわった私達のサッカーでしたが、宮原先生の指導よろしきを得て、明朗な大滝主将を中心に、またガンブチさんが「30年に1人」と評したとの噂もある逸材小堺の馬力に圧倒されながら、気の好い後輩ともども青春のよい思い出となる日々をおくったことはたしかです。

ただ全く悔いがないわけではなく、後年の反省として感じていることを、低迷期にあるときの後輩の参考になればよかれと思い附記しておきます。

それは、私達がやっていた練習についてであります。あの頃、私達は毎日（月～土、原則として休みなし）暗くなる迄練習を行っていたわけで、今の湘南では考えられないような練習量がありました。しかし成果があがらなかつたのは実績の示すとおりです。思い起せば誠に芸のないワンパターンの練習を繰り返しておったのです。ボールコントロールの基礎技術、体力鍛成、ゲーム感覚など一応なりとも体系化してスケジュールをつくるとか、特定の技能に合わせた種目を考えるとか、戦術について討議したりものの本にあたるとか、総じて Thinking Soccer をやっていなかつたことが悔まれてなりません。

高校スポーツは、一面青春の情熱の昇華でありますからある程度の成果が必須でないにしても望ましいことに間違いありません。ただ将来非常に高い水準に達するプレーヤーを育てるのであれば、短期的な成果は度外視するでしょう。水準の高い最近の情勢では、中学以前の経験のないものがその高みに達することはまず考えられませんし、失礼ながら、湘南高の場合は、そういうことは稀と言っても過言ではないでしょう。そうすれば、湘南高の場合、考えるサッカーを地道に積み上げ、或る程度納得できる成果をあげて青春の充実感を持つようにすることが大事であり可能なことだと思います。もちろん、最小限という意味ですが……。

低迷期にある時の後輩諸君、私達の苦い反省をよすがとして、是非考えるサッカーに青春の情熱をぶつけて下さい。年を経てから思い起すとき、他にないほど豊かで清々しい思い出を持ったことに気がつくでしょう。

最後に、1年下の畠山、早野、香場、丸屋、三戸部の諸氏に昔の御協力に対して感謝すると共に、いつか又、一緒にボールを蹴ることを申し入れて駄文をおわります。

低 迷 期

34回生 番場 定孝

丸屋充（現在カネボウ勤務）、早野勝徳（小松製作所）、畠山昭彦（第一生命）、番場定孝（神奈川県議）、牧村優（帝人）、そして三戸部千早、山口らが34回生である。選手層も薄く、いわゆる名手はなく小さなチームであったが丸屋主将を囲んで、皆気持のよい和気あいあいのチームであった。戦績も私達1年時、国体の県予選で準優勝した以外、何ら目ざましい戦果はなく、昭和20年代のあの輝しい時代をすぎて、湘南サッカーの最も低迷していた時代の3～4年でその中間に、私達34回生が位置していたと思われる。岩渕先生には長い冬の時代であったが、先生には身も心も一番頑強な時であられ、サッカーへの意欲、なかんずく全国制覇への期待はすさまじく、これを実現するの確信に満ちていたと記憶している。岩渕先生のこうした姿勢は、現役、先輩はもちろん、学校当局にもひしひしと伝わり、宮原先生も若く、若手先輩の柳川さんも特にはりきっておられ、グラウンドには常に気魄があった。この頃は現役の指導に訪ねる先輩も多く湘南サッカーのよき伝統をそのまま、後輩に伝えて行った。岩渕先生も実地によく指導され、あの巨体がグラウンドを縦横に走り下声を飛ばしたものだ。柳川先輩らの「しごき」も猛烈であった。今はないと思うがその一つに「地獄」というのがあった。センターライン手前に一人立され、ゴールから何人もの先輩が矢継早にボールを送って来る。これを即、蹴り返すのだが、「ダッシュ!!、ダッシュ!!」と罵倒される。そのうちマラソンになり、最後は、地面に這いつくばるのがほとんどであった。この頃は技術面もさることながら、まずは根性、まずは体力というのがサッカーの基本と、とらえられていた。練習は毎日放課後、行なわれ夕闇まで続く。土曜は午後いっぱい、日曜は試合が多くなった。春には教育大附属高校と定期戦、夏休み前半が合宿と国体予選、秋は32年から浦和高校と定期戦、12月に全国大会予選、2月より新人戦とおおかたの年間スケジュールはそのようなものであった。そしてそれぞれの大会の決勝戦は湘南のグラウンドか県立体育センターのグラウンドで行なわれていた。体育センターのグラウンドは現在のグラウンドでなく丁度今のセンターと体育館が建っている所が公認サ

ッカー場であり当時小田急善行駅はなく、八洲台の長い坂を皆歩いて通っていた。夏休み合宿の時に、体育センターで合宿しているチームとよく練習試合があった。その時は湘南から隊列を組んで、マラソンで八洲台の坂を登っていたのを記憶している。そういう時でも柳川先輩は一緒に走っていた。こうした先輩による根性と力のサッカー、宮原先生の速さとダイナミックな技のサッカー、そしてパスと変幻自在な変則ホームページを得意とする岩渕理論（今までこそめずらしくないが、当時は非常にユニークであった。）がこの頃の湘南サッカーのスタイルであった。

昭和33年2月28日未明、湘南は本館が全焼するという不審火にみまわれた。サッカー部々室も丸焼けになり、朝方かけつけたメンバーは何一つ残っていないその光景に呆然とした。土台のあたりに黒こげになった、スパイクがころがっており、それも子供の靴と間違う程に縮まって、そっくり返り、これが、自分のものかと、目を疑った。この時はボールはもとより、練習着、ユニホーム、ネットなど、サッカー部のすべてを失ってしまった。たしか翌日と思うが、鎌倉学園サッカー部から数個のボールが見舞として届けられた。その日からまた消火の水たまりがまだ残る校庭で練習が始まった。こげ臭さがグラウンド一面漂っていたのをわすれない。部屋を失った我々は、現在の西側の石段の下（今の部室の一番石段の近く）に戸板やトタンを集めて堀立て小屋を作りかなりの間これを部室としていた。これも岩渕先生の発案だった。火災を機会に、古い湘南の校舎もほとんど改築されてしまった。往時の校舎、部屋、合宿所、そして堀立て小屋と、なつかしい限りだ。

34回生は岩渕先生にグラウンド以外でも大変お世話になった。当時先生は英語の先生をしており、我々の成績を心配してか練習が終ると、合宿所の下の部屋に集められた。そこで、今度は英語の特訓を受けたのである。グラウンドでは「鬼の岩さん」と呼ばれ、メンバーの一挙一動に雷鳴をとどろかせた岩さん。練習に疲れてコクリも出るその特訓は注意の一つもせずおだやかな授業を続けられるのであった。湘南サッカーと青年のよき日を思うにつけ岩さんは必ず現われて来る。心からご冥福を祈りたい。…………… 34回生一同。

20年前のこと

36回生 渋谷 繁夫

我々36回生は昭和36年の卒業であるから、56年3月で卒業後ちょうど20年になる。月日のたつのは早い、がサッカー部時代の想い出は残り、さらにその影響は今もなお続いている。30代、40代を中心としたOBチーム“ペガサス”で今もボールを蹴ることができるのは、何とも楽しい。「やっていてよかった！」とつくづく思う。

我々36回生が入学する直前の3月、つまり昭和33年3月に湘南高校に火事があった。古い校舎が焼け、部室もなくなった。だから我々がサッカー部に入った一年のときは、着替をする場所がなく、教室やグラウンドの横の段々で衝立を立て、着替をやった。我々一年生がグラウンドに行くと、いつもすでにボールを蹴っていた3年生の早野先輩から、「おそいぞ！」とよく怒鳴られたものである。当時の3年生の先輩は、丸屋(兄)さん、早野さん、番場さん、畠山さん達、二年生の先輩は横山さん、細田さん、近藤さん、中村さん、渡辺さん達であった。

一年生にとって、先輩は「大きく、偉大に」見える。特に3年生はそうである。キャプテンの貫録をもつ丸屋さん、ファイトの塊のような早野さん、雄牛のようなバイタリティーをもつ番場さん、俊敏で音もなく走ってくる畠山さん等、当時の先輩の特徴を今もありありと想い出すことができる。

ところで我々36回生のメンバーは、丸屋(弟)(キャプテン、センターフォワード)菊岡(ゴールキーパー)、井上(フルバック)、塩崎(フルバック)、原田(センターハーフ)、関(ライトインナー)、久森(ライトインナー)、私(ライトウィング)の8人であり、途中止めたものに、田中(旧神林)、小川、林、兼子等がいる。当時は2年生、3年生が少なく、我々の年代が多かったので、我々は一年生の時から公式試合に出ることができた。ある時にはメンバーが足らず、9人ないし10人で試合をしなければならない時代があった。いまのようにサッカーが盛んでなかつた時代も、ある面でよかったですのかもしれない。当時我々を指導して下さった岩渕先生、宮原先生も人数の多い我々の年代に期待をかけていたようである。

その当時はよく卒業した先輩の方々が指導にいらして下さった。落合先輩、岡田

先輩、大内先輩、堺先輩、松本先輩、中川先輩等々。そして「地獄」、「うさぎ飛び」、「かえる飛び」、「インターバル」等、苦しく、なつかしい「しごき」にあった。また合宿のときには、諸先輩から、いろいろ「授業では聞けない話」を夜中まで聞かされ、我々は好奇心が旺盛だから眠ることもできず、翌日の練習のつらいことといったらなかった。そして「男だけが歌う歌」を教わり、それと我々は「声高らかに、明朗に」、あの木造の合宿所で歌ったのである。あの合宿所は、今どうなっているのだろうか？ 先輩から後輩へと語り、また歌われた「あの伝統」はいまも続いているのだろうか？

ともかく、我々が3年生のとき、関東大会準優勝をして、岩渕、宮原両先生に、またいろいろな面で指導して下さった諸先輩に、多少とも恩返しができたことを嬉しく思っている。また、その後の数年間の湘南サッカー部の第何期目かの黄金期の礎を作ったものと、我々はささやかな自負しているのである。

伝統というものは、あるようないようで、目に見えないけれども、「確かに」あるということをどうか後輩達も忘れないように。一つの流れはどこまでも続いて、決して終ることがないのである。

戦歴

37回生 牧村 英樹

当時のメンバーは次の通り。

主 将 牧村英樹(フォワード)
小林弘治(〃)
萩野 晃(〃)
小林 隆(ハーフ)
宇山忠男(キーパー)
大谷昌夫(バックス)
本田晃治(〃)
安河内晃(〃)

◎我々が2年生の終り頃に鈴木中先生が監督として就任される。

S. 35年7月 第3回関東高等学校蹴球選手権大会に出場。丸屋喬主将を中心とした3年生に我々2年生も3人出場。《準優勝》

S. 36年10月 我々3年生3名を中心に2年生・1年生を含めて第16回国体秋季大会(秋田県)に出場。《1回戦で破れる》

S. 37年1月 第40回全国高校サッカー選手権大会(西ノ宮)に出場したが、1回戦で優勝校の修道高校に破れる。

神奈川県では最強といえたが、全国レベルからみればまだまだの感があった、我々の時代である。

関 東 制 霸

41回生 植松 二郎

入学当時は約40人、最終的に14人の部員として卒業。この数は、私たちの前後4・5年の中では頭抜けたものだった。鈴木中先生はバリバリの現役、故岩渕先生もまだ週に2度はグラウンドに出ておられた。そんな環境のもとで、3年生の夏、私たちは第8回関東高校サッカー選手権大会で優勝。歴史に残る快挙とまではいえないが、少なくとも私たちにとって一生のうち、そういうつもない晴れやかなイベントだった。

開催地は水戸。7月中旬で、すでに梅雨はあけたはずなのに、雨の多い大会となる。第1回戦は東京大泉学園高。前夜からの激しい雨で、グランドはぬかるみを通りこし、水溜り。ボールを蹴っているというより田植えをしているような1時間余。1対1のまま最延長を過ぎても決着をみず、抽選（当時はPK合戦がなかった）。待つこと数分、キャプテン井手（現二木）の引いたくじは「2回戦進出」。幾人かの選手が、わっと故岩渕先生に駆け寄り、おい、よせ、くるな、と拒まれる。全員、眼だけ開いた、ずぶずぶの泥まみれだった。ツキも実力のうち、と夜のミーティングで鈴木中先生に鼓舞され、その勢いで2回戦千葉高に圧勝。準決勝宇都宮学園高も延長戦のすえ破り、あれよあれよという間に気づいたら決勝戦に進んでいた。決勝戦は、東京の帝京高。CFに身長190cmという、バカでかい選手がいた。当然ながら彼が空中戦にめっぽう強く、攻撃のポイントをつくり、それまでの試合を勝ち抜いてきた。前夜のミーティングで、彼対策の変則ホーメーションが練られる。鈴木中先生が将棋盤上に駒を並べて指示された。当日は久し振りの快晴。真夏日である。グラウンドもベストコンディション。立ち上がり早々、FKから1点失取。私たちは鈴木中先生の指示を忠実に守り、それは見事適中した。結局その1点が決勝点となり、タイムアップ。優勝、湘南高校となった。

約一週間の大会だったが、ゲームの外に数々の思い出がある。「故岩渕先生のパチンコ」は、その大きなもののひとつだ。ご承知のとおり、先生のパチンコの腕は、プロ顔負けといって過言でないものだった。大会中の日課として、試合が終わると

夕食までの間、宿の近所で軽く打ってこられる。抽選勝ちした第1回戦の夜、「おい、やっぱツイているらしいぞ、見ろこれ」と、ドサッと景品のチョコレートを土産を持って帰られた。疲れているから甘いものはうれしい。ほんとにツイているらしいという気にもなった。第2回戦、第3回戦も同じようにして大量のチョコレートである。まさにプロだ、藤沢に帰ったら早速パチンコの技術をご指導願おうと私たちは感激した。準決戦の前夜は、チョコレートにせんべいが加わった。決勝前夜は、見ろ、打ち止め3台だとチョコレートの山だった。明日もツイてる。いける。私たちはその山眺めて、気分が高まった。とても食べきれる量ではなかった。大会から帰って、いろいろなシーンを皆で話しているうちに、待てよ、あのチョコレートおかしいなということに気づき始めた。準決勝前夜あたりから紙袋が変だった。○○菓子店というような字が見えやしなかったか……。

故岩渕先生にこの真相を聞く機会をついにもてなかつた。細かい心くばりだったのか、真実よく出た台だったのか。だが、そんなこともうどうでもいい。岩渕先生あのときのあのチョコレート本当にありがとうございました。

鈴木中先生、故岩渕先生という2人の偉大な指導者に、私たちは身体でモノを教えていただいた。16才～18才という微妙な時期をそうして過ごせたことを心から幸運に感じている。結婚式の披露宴で、鈴木中先生の美声「漢の高祖も秀吉も天下取らなきゃ唯の人、まして凡夫の俺じゃものボール蹴らなきゃ唯の人……」あの唄で祝福の辞をいただいた者も多い。ボール蹴らなきゃ、というところがいろいろ変わったとしても、うちこむ、道をきわめる、対象と真剣に立ち向かう、ということの美学を教わったと思っている。

私のサッカー人生

43回生 加納 正道

私も既に31才。サッカーを始めて18年になります。松浪中学入学と同時に出来たばかりのサッカー部に入り、自分達で丸太と竹竿を使ってゴールポストを作り私のサッカー人生は始まりました。亡くなられた岩渕先生とは近所でしたので、この頃より先生の指導を受け、中学3年の時には県大会で優勝しました。

昭和40年湘南に入学しましたが、当時の湘南は強くその年の関東大会に優勝しました。そして3年生の引退した後、私はレギュラーになれました。その年の高校選手権の県予選で2回戦は小田原高校と対戦し3対2で最後の10分間で逆転勝ち。決勝点は宮坂さんのヘディングシュートだったと思います。3回戦の相模工大付戦は延長で2対1、辛うじて逃げ切りましたが最後ゴール前でくぎ付けにされ、おろおろしました。4回戦は武相に3対0で楽勝。準決勝は慶應高で2対1。このうち1点はPKで相手バックがハンドの判定を不服として試合後泣きながら審判に抗議したような記憶があります。決勝は茅高と対戦し、関口さんのヘディングシュートで先制したもののPKを和田さんが失敗、逆に茅高のPKで1点返されて同点とされました。最後に私がバックパスをカットして決勝点を挙げようやく全国体会のキップを手に入れました。

当時高校選手権は関西で開催され、湘南は1回戦のグラウンドが西京極陸上競技場だった為、正月2日京都へ出発しました。その時初めて新幹線に乗ったのですが、楽しみにしていた車中は、鈴木先生と向い合わせに座り、ずっと試合に関しての注意などを聞かされたので、勉強になりましたが、とても肩苦しかった思い出もあります。

高校選手権1回戦の相手は甲賀高校で、押され気味ではあったものの決定的なチャンスは湘南が多く、特に和田さんのフリーキックを私がヘディングしそこなったのも惜しいチャンスでした。しかし当時の私は未熟そのもので、当の本人はボールが頭のどの辺を通っていたのかすらわからなかった程で、翌日の神奈川新聞に「加納ヘディングシュート試みるも惜しくもはずれる」と載っている写真を見て、ボ-

ルが頭の後を通っているのが分かり、非常にはずかしい思いをしました。結局 0 対 0 で抽選負けをしましたが、私はまた来年そしてその翌年もまた来られると思っていたので、別に悔しいという気持はなく、ただもっと長く京都に居たかったのに…と残念に思うだけでした。しかしその後再び全国大会に出場する事は出来ず、2 年 3 年の時は関東大会止りでした。

東北大学に入ってからは、3 年の秋キャプテンとして東北地区で優勝し大学選手権に出場しました。1 回戦三ツ沢サッカー場で法大と対戦しましたが、私は C F でマークされた法大のストッパーは、後の全日本代表の清雲でした。5 点取られたものの、私が 1 点取った時など、東北イレブン、ベンチはまるで勝ったかのような喜び様でした。

大学を卒業してからは、公立気仙沼総合病院に勤務した3年間は気仙沼クラブ、仙台の大学病院に戻ってきてからは東北大 O B クラブで細々とプレーを続けています。そして毎年盛大になった高校選手権をテレビで見る毎に「世が世ならオレもテレビに写ったんだなあー」と昔を懐かしく思います。

サッカー部 番外記

45回生 水谷 政保

湘南を卒業して早いもので11年になる。しかし、いまだにサッカー部の仲間9人で酒を飲みに行くことが多い。飲みだすと、あの頃のいろいろな場面がくっきりと浮かびあがって流れていく。そして、くだらない昔話がとめどなく続き、つい飲みすぎて、次の日は必ずといっていいほど二日酔となる。

それは、いわば「サッカー」が我々9人の湘南時代の共通のシンボルであったからであろう。

当時の我々サッカー少年にとって、釜本のシュートや杉山のセンター・リングはあこがれの的であり、圧感は何といってもメキシコの銅メダルであった。我々も彼らをめざし、「明日の全日本」をめざし、奮闘努力、汗と涙にまみれながら、血のにじむような練習にはげんだものであった。

しかし、残念ながら不運にも成績面では、学業と同じく、華しい成果を球史に残すことはできなかった。唯一の成果といえば、当時、神奈川№1で、今でこそ有名な奥寺がいた相工大附高といつもいい勝負をしていたこと位であろう。

従って酒を飲んでの想い出話もサッカーそのものの名場面集よりも、サッカーを中心として仲間9人が高校時代にくりひろげた、いたずら、ドジ話の数々がメインとなる。

たとえば

(1) キセル事件

我々はよく善行で試合でしたが、いつも小田急はタダノリであった。電車賃はコーラ代となつた。

(2) カップライ事件

湘南電車の行先札とかトヨタのディーラーにあった旗などいろいろなものを盗んできた、しかもそれを部室に飾ったりした。

(3) パチンコ屋事件

授業中パチンコに行き、補導されそうになったバカが、「山田一雄」という

いかにもうそっぽい偽名を使って難(?)をのがれた。

(4)自転車事件

友人の自転車でパチンコに行き、負けて頭にきたため、そのまま自転車をおいてきてなくしたバカがいる。本人は今でも否認している。

(5)横断歩道ダタリ事件

(6)パチンコ屋学生服出入事件

(7)ワイシャツ、ラジオ事件

(8)トイレ破壊事件

(9)ウソダヨ事件

(10)押し屋さん事件

など、いくらでもくだらない話があるが、他人が聞いてもバカバカしいだけと思われる所以この位にしておく。

まあ9人ともともかく何とか前科もなく社会人として生きのびている。卒業してからもいまだに集まるとバカなことをしている仲間達である。今考えると、ほんとに能力はありながら名運にも成績面では良績を残せなかつたが、11年たつても共通の話題、過去の色あせた想い出をきれぎれにくりひろげ、バカバカしく飲み歩き、また新しくバカバカしいことをくりかえす仲間が9人いるということがかけがえのない我々の成果だったのかもしれない。これは負け惜しみではけっしてない。

湘南サッカー 50 年に寄せて

49回生 元松 経男

私がサッカーを始めたのは、湘南へ入学してからであった。そんなわけで、はじめはボールの蹴り方もわからなければ、ルールも詳しくは知らなかった。それでも私の高校生活 3 年間はサッカーであげてくれた。

サッカー部へ入って夏までの数ヶ月間は、大野さんと野村さんの 2 人の 3 年生の下で、基礎練習ばかりが続いた。はじめは新入生も 20 人以上はいたようだが、ラグビーボールと野球のボールを気にしながら、グラウンドのはじの方でパスの練習をしたり、お伊勢山を何度も登り下りしているうちに、15 人程に減っていた。たしか、梁と渡辺だけは、早くから二、三年生と一緒に練習をやっていたようだ。うらやましく早く自分もあのような練習をしてみたいといつも思っていた。

やがて三年生が引退して、二年生と一緒に練習をするようになって、これはたいへんなクラブになってしまったと思いつつも、だんだんと勉学を忘れサッカーにのめりこんでいった。

私達の上の代は、2 年の頃からレギュラーだった人が多く、将来を有望視されていて強い学校とよく練習試合をした。千葉や藤枝へも遠征した。それなのに、私をはじめとして私達の代がよく足を引っ張って、なかなか優勝までたどりつかなかつた。本当にもうしわけないといつも思っていた。それでも、上の代の人達は私達を良くめんどうみてくれた。今思い出してみても、私達は良い環境にめぐまれていた。

しかし、強かった先輩が引退して、気がついてみると、かってない程の弱小チームが残されていた。

新人戦でベスト 8 に残ったため、どの大会もシードされたが、いつもかんじんなどろで負けてしまい、新聞に載る記事は、“湘南敗れる”ばかりであった。それでも、私達の代は、1 年の夏休みを過ぎてからやめる者はほとんどなく最後まで残ったのは 14 人であった。勝負には弱くとも、得点力はなくても、湘南のサッカーは十分に理解して、自分達なりに精一杯ボールを蹴ってきた。そんな中で、私達が他の代に決して負けないものをひとつだけ誇ることができる。それはチームワークで

ある。レギュラーとして試合に出ることができたのは7・8人であったと思うが、それでも、14人が14人、常にサッカーに熱中していたような気がする。

先輩、後輩にめぐまれた私達は、湘南サッカーの谷間の時代といわれながらも、楽しく、そしてつらい練習が待ちどおしくて、授業の終わるのをいまかいまかと待っていた3年間であった。

湘南を卒業して7年目の現在も、チームワークが売りものの私達の代は、年に何度もかは皆で集まる機会をもっていることを記して、筆を置きます。

49回 元松 経男

4時間目が終わって部室に行き、着がえをして、シューズのひもをむすんでグラウンドに出る。私にとって一日のはじまりである。湘南の先生は、あまり勉強については口うるさくなかったので、まさにサッカーをやるために学校へかよっていた3年間であった。

3年生が引退して私たちの時代になった時、岩渕先生をして「湘南高校サッカーディレクター部創立以来最弱のチーム」といわれた。とびぬけた力を持った選手もいなく、私を筆頭に、小粒な選手が多く、全国大会をねらえるチームとも思ってはいなかったが、ガムさんに、ああもはっきり言わると少なからずショックであった。

梁君をキャプテンとして、弱小チームがスタートしたわけであるが、それ故に、中さん、岩さん、梁君の苦労もたいへんであったろう。梁君とは、今でもたびたび会う機会があるが、当時の苦労話をよく聞かされる。

しかし、練習ははじめによくやったと思う。今でも一番印象に残っている試合は、新人戦の地区予選の決勝である。私たちのブロックは湘南学園と鎌高と湘南の3チームであった。決勝は鎌高とであったが、当時の鎌高はけっこうレベルが高かった。その試合にかけるイレブンの意気込はすごかった。この試合に負けたら先生に見放されるとと思ったし、鎌高には絶対負けたくなかった。結果は2対1での辛勝であったが、試合が終わって藤沢でみんなで食べたラーメンの味は一生忘れないだろう。県大会ではベスト8まで進んだが、関東六浦に苦杯をのんだ。

発足当時の新チームはたしかに最弱のチームであったが、私が思うには、よく伸びたチームではなかったか。これといったチームの特徴もなかったが、それなりに、こじんまりとよくまとまったチームであったと思う。

久野 浩之

湘南サッカー部50周年に寄せる文章を……、といろいろ思いを廻らせていると、やはり思い出されるのは、泥まみれのボール、諸先輩、後輩、そして仲間たちの顔々々……。苦しかった夏の合宿、そして最後の試合。

あれから7年余の月日が流れた今、湘南サッカー部の伝統に応えることなく終わった無念さと、それでも脇目もふらずボールを追った3年間への満足感が合い混って、当時の事がなつかしく思い出されます。

さて、湘南サッカー部50周年をむかえるにあたって、まがりなりにも誇りを忘れる事なくこれからも一企業人として活躍することを誓うと共に、鈴木中監督以下、現役選手諸君の今後の健闘を心から祈ります。

梁 永 叔



13人

51回生 橋本 博文

新人戦準優勝。これが私達の唯一の輝ける戦績です。

新人戦が好成績だったので、春には藤枝遠征をさせていただきました。それでは13人のメンバーを紹介させていただきます。

G K	残念ながらおりません	
D F	大木 孝	副主将、バランスのとれたD F
	水野 純	必殺タックルのストッパー
	大隅 一男	空中戦は絶対
	川野 充	読みのよいスイーパー
	向井 猛	パワフルなD F
	加々見 智	安定感あふれるリベロ
H B	高橋 正純	主将、活動量豊富でチームのかなめ
	平出 稔	ガッツあふれる点取り屋
	五代 厚司	副主将、センス抜群のH B
F W	石郷岡善則	感覚派の点取り屋
	端山 真一	スピード感あふれるF W
	伊藤 冬樹	左足オンリーの技巧派
	橋本 博文	小柄なオールラウンドプレーヤー

悔 し さ 、 苦 さ

52回生 志水 利彰

我々、52回生の主な戦績は次の通りです。

新人戦 県大会 1回戦敗退

教育大附属定期戦 2-0 勝

関東大会予選兼総体予選

2回戦 対栄光 0-0 抽選負

浦和高定期戦 0-1 負

上の様に、結果だけを見ると、あまり強かったとは言えませんが、チーム全員、それぞれ頑張り、なかなか良いチームだったと、思います。特に最後の公式戦となった、対栄光戦は、ベストの試合で、亡くなった岩渕先生からも、「ミスらしいミスのなかったゲームだった。」と珍らしく、お誉めの言葉を頂き、我々としても、勝てなかつたのが非常に悔やまれた試合でした。あの時、審判の手から放れたコインが、もう1回、回っていたらと、何度も悔しがったことでしょうか。その悔しさを、晴らさんと、このチームから、志水、関、八木の3名が、正月の全国大会に向けてのチームに残り、夏の1次予選を勝ち残り、ベスト8による秋の2次予選に進出しました。2次予選1回戦は旭高とあたり、延長戦の末、2-4で負けました。この試合は、後半の途中まで2-0でリードしていたのを、追いつかれ、延長に入って逆転された、非常に惜しい試合でした。

この様に、我々の年代は、苦い経験ばかり味わいました。その悔しさを共に分ち合った仲間の名前を記して52回生の頁を終りにします。

安達 弘	H B	清原 正久	F W	志水 利彰	H B
中井 健	F B	松平 賢治	F W	皆木 明彦	F W
八木 啓太	H B	菅野正二郎	F B	斎藤 衛	F B
関 啓輔	F B	永富 良一	G K	松永 司	G K
盛岡 敏夫	F B	山田 義知	F W		

チ　ー　ム　メ　ー　ト

53回生 武藤 俊一

我々53回生は全員で14名、ケガ人が多かったがみんなで協力してチーム作りをしてきた。

ケガが多かった灘口君、山森君、渡海君、黒沢君は1年生の指導を積極的にしてくれた。FWの渡辺君、新倉君はスピードのあるプレーをした。HBの益田君は基本に忠実で、田中君は副主将としてチームを盛り上げてくれた。FBの小林君はドリブルでの攻撃参加、柴田君は幅広いディフェンス、岩田君は鋭い出足、加藤君はパワーあふれるプレーで活躍した。また、マネージャーの日々原さんは、影ながら選手を助けてくれた。

現在ではサッカーを続けているものもいれば、やめてしまったものもいる。しかしみんなで集まるときに出る話はサッカーの話で高校時代の苦しい練習、藤枝遠征、公式戦などはよい思い出である。

そして湘南高校サッカーチームが全国大会、インターハイで活躍するのをみんなで楽しみにしている。

54回生ひと言集

54回生 一 同

僕達にとっては、湘南といえばサッカー部でした。そしてサッカー部を語る時、“岩さん”無しには何も語れません。岩渕先生は僕達にとって非常に近く、又逆に遠くも感じられる不思議な存在だったと思います。“岩さん”について、こんなコメントがあります。

「試合になると必ず見に来てくれた岩さん。そんな暖かさの反面、厳しい心を持った岩さん。一生湘南サッカーを愛し続けた岩さん。そんな岩さんに乾杯!!」

石井弘之

「湘南ときけばサッカー部と思うが、もはやそのグラウンドに「岩渕先生」の姿を決して見いだせないことを淋しく思う。」

森田 稔

岩さんは僕達に、そして僕達のサッカーにとって、懐かしい思い出であり、大きな支えでした。

さて、岩さんを含めた湘南サッカーは、僕達にとってどんなものだったのでしょうか。みんなの意見を聞いてみましょう。

「南風……。汗。息苦しさ。照明。インターバル。試合。歓喜。落胆。チームメイト。口喧嘩。友情。3年間は走り抜けていった。」

主将 篠塚 毅

「湘南でのサッカーを通して、仲間と喧嘩したり共に喜こんだりした高校3年間は、今振り返ってみると、懐かしく、大変幸せだったと思う。」

副将 中村 昭

「“過去は美化される。”というのは本当だった。敗戦のくやしさも、練習の苦しさも、今となっては、ただ懐かしく思われる。」

藤塚久雄

「高校に入って中学の時とはまた一枚違ったサッカーができてよかった。思い出の多い、よき3年間だった。」

中村 浩

「僕が高校のサッカー部で学んだことは、『一番大切なことは情熱だ』ということだった。」 鈴木信行

「湘南サッカー生活で得たさまざまな事は私の誇りである。2年生の時の日大戦などいろいろな思い出が今でも鮮明に目に浮かぶ。」

松崎正一郎

「湘南サッカー部の仲間のことは、一生忘れられないだろう。一緒に苦しみ、一緒に喜び、そして一緒に燃えた、そんな素晴らしい仲間だから。」

久部泰史

「夏の炎天下での練習が、今でもつらくなかった時の心の支えです。湘南のサッカーに巡り合ったことは、僕自身の人生にとって大きな収穫でした。」

有馬純男

「いつ終わるか分からないダッシュ。長い長いグラウンド10周。苦しくてつらい練習時間。でもほんの一瞬。まるで閃光のように飛び去った。」

木村茂樹

「練習は厳しかったが、友達にも恵まれ、毎日が充実していたと思う。これから苦しいことがあっても、あの頃を思い出せば何とか切り抜けられそうな気がする。」

大伴彰裕

やはり僕達にとって、湘南のサッカーは非常に有意義であり、かけがえのないものであるようです。高校を卒業してはや2年近くの日々がすぎ、みな行っている大学も違います。これからの将来、進む道も違ってくるでしょう。しかし湘南サッカーによって培かわれたチームワークはいつまでたってもなくならないでしょう。そして皆が集まれば、また素晴らしいチームができるることを確信しています。最後に自分のコメントを書いて、筆をおきたいと思います。

「試合では、僕の役目はベンチで声援を送ることだった。でも僕には湘南のチームメイトとしての誇りがあった。僕はこの3年間に、サッカーは、少くとも湘南のサッカーは、11人ではできないことを学んだ。」 堀 真

尚、森正俊君はカナダ留学の為、栗田洋君は住所不明の為連絡がとれず、コメントを頂けなかったことをおわびいたします。

高校サッカー生活の想い出

55回生 石外 力

私たちが湘南高校に入学したのが、昭和52年今思い出すと高校生活は、サッカーに明け暮れした3年間だったよう思います。

私たちは名門湘南サッカー部にありながら、主立った戦績もあげられず終いでしました。しかしながら部員数だけは、湘南の入学定員の増加とともに50名に迫ろうとしていたのです。正選手の練習が優先され、全員練習の機会が少なくなる傾向にありました。そのため、全部員をA、B、C3チームに分けるなどの練習方法を採ったのです。また、春の藤枝高校遠征には全員が参加できないほどでした。しかしそれだけに短い時間、狭い場所を利用して、中味の濃い集中した練習ができたように思います。つまり逆に言うと、私達はその集中力と精神力を看板にした試合を繰り広げていたのです。

さて話は変わりますが、私たちにも幸運の女神は微みかけることがあったのです。1つは神奈川テレビという地方局に自分たちの試合が放映されたこと、もう1つはサッカーマガジンという雑誌にチームとして紹介されたことです。前者は1代上の先輩方の技術と経験に因るところが大きく、後者は湘南サッカー部を名門と呼ばれるまでにされた諸先輩方の功績に因るところが大きいと思うのですが、私たちにとって何ものにも劣らぬ青春の輝かしい記念碑となったのです。なにせ私たちの代のある者などは、近ごろ世間にも普及しつつあるビデオテープなるもので、一生、自分の手に残したほどですから……。

サッカーを通して友情を深め合った私たちの高校生活は実り多いものであり、そこで経験はこれから長い人生に十分役立つのではないでしょうか。

私たちはつい去年卒業したばかりでOBとしての自覚はありませんが、一番若くして記念誌に顔を出すことができ、嬉しく思います。今後はOBとしての立場を自覚し、湘南サッカー部のために尽くしたいと思っています。

湘南サッカー部万歳！

55回 OB一同

湘南サッカーツレづれ

“サッカーの湘南”第Ⅰ期黄金時代 16回生 奥本 武臣

湘中蹴球全国制覇の御礼の挨拶（昭和21年発行「湘中だより」から）

蹴球祭と定期戦

新制高校蹴球部新入生勧誘文抜粋（昭27年）

我が同志、湯浅 45回生 山口 晴夫

湘南ペガサス・サッカークラブ 31回生 大内 健嗣

S O I に活躍する勇者たち 15回生 内田 康侍

ロッキーを知っていますか 41回生 植松 二郎

遠征について 46回生 隅山 幸彦

ある日のサッカーデ日誌より（昭和39年10月）

親子兄弟サッカーマン

独断と偏見に満ちた湘中サッカー裏面史

（昭和12年～16年、思い出するまゝ）17回生 菅原 留意

“サッカーの湘南”第Ⅰ期黄金時代

16回生 奥本 武臣

50数年の歴史と伝統に支えられる湘南蹴球部には、過去に幾度かの輝かしい黄金時代がちりばめられている。

それらのうちで、“サッカー湘南”としてはじめて全国レベルで評価を受けるようになった頃の戦歴について、手許に残っていた当時の新聞などの古い記録のなかから、そのハイライトをひろいあげて紹介してみたい。

幾多のすぐれた先生方、先輩諸氏が築きあげられた蹴球部の伝統を受け継いで、私達が在部していたのは、丁度第2次大戦勃発前の昭和15年頃迄のことであったが、かえりみて戦前の第1期黄金時代と呼んでもよい時代にめぐりあわせたのは、大変に幸運であったと思う。

当時戦雲漸く濃く漂う時代ではあったが、一面日本のスポーツ界のれいめい期でもあり、オリンピックでも水泳やマラソンなどに日の丸が揚りはじめた頃に該当する。

湘南では赤木校長をはじめサッカー部長香川先生、諸先生の熱心な御指導の下に、蹴球が校技として全校に浸透普及しており、部員としても他校にみられない恵まれた環境の下で活躍することが出来た。いまふり返っても県下では圧倒的な強さをほこり、県下敵なしとして試合にならぬ程であり、たとえば昭和14年度田村主将時代は、年間総得点111に対し失点わずか8という記録がその一端を如実に物語っているといえよう。これには先生、先輩方の熱心の御指導のおかげで、強固なチームワークをほこり、独創的個性的なシステム・プレーに裏付けされた上、時代を先取りする戦法、戦術を吸収して身につけていたといえる。これらの成果は在学中の、年間の各試合、大会で存分に発揮するのみならず、後世それも戦後に亘るが、サッカー界の復興再建に貢献した大学選手を数多く輩出した事実を考え、同時代のチームメートとして大いに誇りに思っている。

◦はじめて全国大会に出場

昭和12年8月27日～30日、甲子園南運動場で開催された。第19回全国中等学校蹴

球選手権大会（大阪毎日新聞社主催）に湘南蹴球部は、はじめて地方予選を勝扱いて出場権を得た。結果は第1回戦埼玉師範に惜しくも7対1と敗退した。埼玉師範はその年の全国優勝チームとなる。

◦甲子園大会に2度目の出場

昭和14年韋崎で行われた山神静地区予選では連日の激戦を勝抜いて、決勝で韋崎を降し、再び甲子園大会への出場権をつかむことが出来た。その模様を東京日々新聞に載った関東蹴球協会主事小長谷良策氏の戦評によると

“湘南堂々の陣”	勝俣	G K	奥本
湘南は、キックオフ直後から殺氣をはらみ、韋崎	中島		市川
は伝統の豪気と体力にものいわせて押切ろうとす	野田	F B	長島
れば、湘南は小粒ながら得点の技術で抵抗した。	一	上村	小熊
開始後4分湘南出足よく先づ一点先取。	韋	川平	H B 田村 湘
韋崎は風上の有利に得意の長蹴戦法で、湘南のバ	崎	内藤	保利 南
ックを崩さんとするも、湘南は球を足元によく引	中	鈴木	桶口 中
付けパスワークよく対抗。	一	清水	小野
後半両軍意氣衰えざる攻防を繰返したが、9分再	内田		安保
び湘南に好機がめぐりゴール前の混戦からC Fす	会雌		大埜
かさずシュートし加点。韋崎遠征の不利に動きが	中込		小野
ややにぶった湘南は、球を右に左に廻して韋崎を	1	C K	4
眩惑して巧防。かくて日頃の鍛錬のあとを十分に	6	F K	5
発揮した湘南は、ただ力のみによる粗暴な韋崎の	23	G K	2
裏をかいて見事優勝をとげた。	0	P K	0

かくて甲子園での第21回大会は昭和14年8月24日～28日、全国16地区的代表によって覇さ争うことになった。部長浅沼先生、高梨先生、島田ヘッドコーチに率いられて遠征。

1回戦 湘南中 5 - 0 高松中

2回戦 湘南中 4 - 2 青山師範

3回戦 聖峰中 2 - 2 湘南中 (延長0-0の後抽せん)

この年広島一中が優勝したが、湘南ははじめて準決勝迄進出し全国第3位となつた年である。

戦評として東京日々新聞所載の上野徳太郎氏によると

李(肖)	G K	奥本
金(主景)		市川
F B		
金(糸)		長島
一	金(孟)	小熊
聖	李(石)	田村
峰	H B	湘
利	李(甘)	保利
湘		南
をいなし	金(鎮)	桶口
いなし	李(景)	中
		小野
	張	安保
	朴	大塙
	竹内	小野
16	G K	19
0	C K	3
6	F K	4
1	P K	0

◦ 第十回明治神宮国民体育大会

聖峰に雪辱

昭和14年10月30日～11月3日、当時、紀元2600年奉祝行事として第10回明治神宮国民体育大会が明治神宮外苑競技場で行われた。参加各校は芝、増上寺山内に合宿して試合に臨んだが、その年の夏の大会で苦杯を喫した宿敵、聖峰中に大勝したのは愉快であった。

1回戦 湘南中 6 - 0 高松商

2回戦 湘南中 5 - 2 聖峰中

3回戦 明星高 3 - 2 湘南中

(1 - 1 、 延長 2 - 1)

◦ 第7回関東中学蹴球選手権大会

夏の甲子園大会、秋の明治神宮大会とも全国4強の内に入る戦績を残したことから、冬の関東大会では、大会の前から湘南中に期待がかけられていた、当時の朝日新聞にみられる大会予想の記事によれば、

“黄金時代の湘南中”

第3回大会以来、今年で連続出場5回目の湘南中は毎回善闘を記録しながらも一度も栄冠をかちうるきに恵れなかった。しかし今年は、全国大会でいづれも準決勝に進出した実績にものいわせて関東制覇をめざしていると予想される。今年戦うこと数十、わずかに1敗を喫したのみであるから本大会には、蹴球校“湘南”の名にかけて制覇を豪語するのも敢て首肯出来る。とにかく今年の湘南は黄金時代といってよく今年度の同校球史を飾らんとしている。

大きな期待がかけられた大会であったが、その経過は、

1回戦 湘南中 - 水戸商業

2回戦 湘南中 1 - 0 浦和中

決勝戦 豊島師 1 - 0 湘南中

かくて、この年関東の覇権を握ることが出来ずに終ったのは残念であった。

◦ 甲子園大会に3度目の出場

第22回全国中等学校蹴球選手権大会に出場を決める山神静地方予選は昭和15年7月甲府商業校庭で開催された。

1回戦 湘南中 5 - 0 甲府中

2回戦 湘南中 3 - 0 志太中

3回戦 湘南中 4 - 1 甲府商

決勝戦 湘南中 2 - 0 垂崎中

この結果、昭和15年8月甲子園大会に湘南中として3度目の出場権を得ることになった。ところがその諸戦において、朝鮮代表普成中と相対し8-1と大敗を喫した。結局この普成が最後迄圧倒的強さを示して優勝している。

◦ 第11回明治神宮国民体育大会

夏の甲子園大会では、予想外の敗退であったが、秋の本大会では、日頃の猛練習

の成果を是非とも示したいところであった。香川先生をはじめ浅沼部長、岩渕コーチら諸先輩の熱心な指導を受け、浅草、本願寺山内で参加各校と共に合宿した。

(昭和15年10月28日～11月3日)

1回戦 湘南中 1 - 0 仙台二中

2回戦 明星商 3 - 1 湘南中

・第8回関東中等学校蹴球選手権大会

出場6度目はじめて優勝

昭和15年12月25～26日 第8回選手権大会が神宮外苑で開催された。大会前の予想を朝日新聞から拾うと、

“ 優勝候補の湘南中 ”

神奈川代表の湘南は県下大会で他校を軽く一蹴。全勝の記録を残し連続出場6度目。昨年度は決勝戦に豊島師と対戦し互角に戦いながら不運の一点に泣いている。今年はそのメンバーから6名の卒業生を送りだしているが、全校あげて校技として蹴球熱の旺盛な同校は鋭意陣容の再建に努めた結果、昨年のように図抜けた選手は少いものの、全体によくまとまったチームの編成に成功している。本年度の戦績をみると、19試合の中、普成中と明星商に惜敗した以外は殆んど10点という大差で勝っているから、昨年にくらべ決定力不足の心配はなく優勝候補の筆頭にあげられる。

前年度と同じような期待をかけられ、しかも夏および秋の全国大会での不振を挽回するべく大会に臨んだ。

1回戦 湘南中 10 - 0 水戸商

2回戦 湘南中 6 - 2 浦和中

決勝戦 湘南中 2 - 1 明倫中

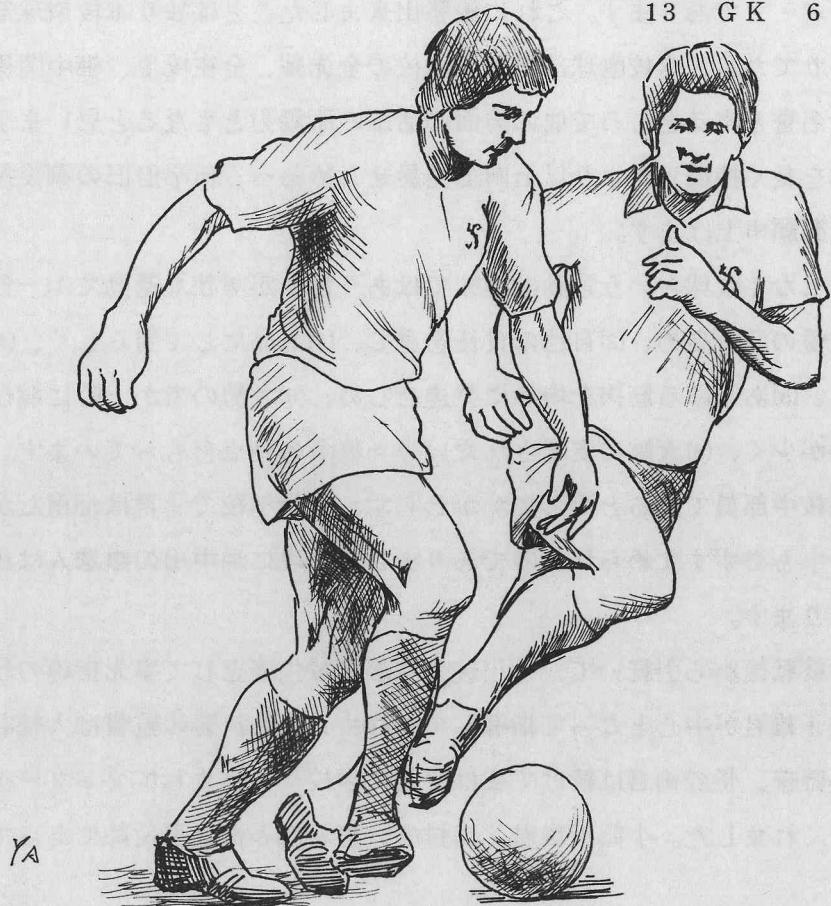
かくして念願であった関東中学選手権を獲得し、各位の期待に応えることが出来たのは幸いであった。朝日新聞に載った天藤明氏の総評によると。

“ 湘南中、気力の制覇 ”

まず特筆すべきは、湘南中の制覇である。神奈川県藤沢市郊外の一角に蹴球を校技としている湘南中は蹴球界にその名ありと知られてから既に久しい。今回関東一の栄誉を握ったが、その得意や思うべしである。

しかし静かに顧るに今年の湘南には、必勝の
気力が感ぜられた。勿論伝統の軽快なフット
ワークと華麗なショートパスは、云うまでも
ないが、ただこれだけでは昨年までの湘南中
が自ら実証している。特に決勝戦では、体力
にまさる明倫中に対し湘南中は気力において
圧倒していた。もうこの辺で制覇しなければ
鼎の軽重を問われることになり全校あげての
声援は将に七転八起の気魄を生み、かつてみ
られない堂々たる偉業を実現したものといえ
よう。

李	G K	奥本
張		太田
李	F B	戸沢
一	石川	菅原
明	H B	小熊
倫	杉原	海老原
中	金	海老原
一	李	小野
李		早川
金		保利
大山		小野
5	C K	7
4	F K	8
13	G K	6



湘中蹴球全国制覇の御礼の挨拶

(昭和21年発行「湘中だより」から)

かねて御聞き及びのことと存じますが、本校蹴球部は去る11月3日、第1回国民体育大会に東日本代表として西宮球場へ駒を進め西日本代表神戸一中と決勝戦を行ひ、3対2で優勝しこゝに多年の宿望「全国制覇」が実現いたしました。これは全く日頃、先輩各位の絶大な御指導と、父兄各位の御後援の結果でありまして学校長はじめ職員一同深く感謝を捧げて居ります。略儀ながら改めて厚く御礼申上げます。

湘南中学の蹴球が強いということは前々から知られていましたが、いつも惜しい所で全国制覇を逸してきました。今年は先輩の指導選手の猛練習、父兄の声援すべて工合よくやっと優勝する事が出来ました。一つの運動でも「全国一位」になることは全く容易な事ではありません。蹴球は全国数百の学校がやっていて、しかも大きいスポーツであります。これに優勝出来ましたことは独り本校蹴球部の名誉であるばかりでなく、本校蹴球部先輩否本校の全先輩、全在校生、湘中関係父兄各位の均しく名誉とするところで他の方面の活躍の原動力ともなると思います。どうかこの栄誉を長く持続し、より以上向上発展せしめるべく何卒倍旧の御後援を賜り度く重ねて御願申上げます。

申すまでもなく蹴球という運動は地味ではありますが勇壮な運動で(1)一致協力して選手各親愛の度を高め、(2)自己の責任を重じ、(3)上品にして男らしく、(4)優秀な頭脳を要し、(5)あらゆる筋肉を均等に発達せしめ、(6)多勢の者が一時に競技出来、(7)且つ危険が少く、(8)天候に支配されない等々数多の利点をもっています。尚湘中出身者は在校中部員であると否とにかかわらず、上級学校で「君は湘南だから蹴球部に入れ。」と必ずすすめられるのであります。現に湘中出の蹴球人は相当の数に達して居ります。

本年度は終戦後から引続いて、早川純生君が先輩代表として率先指導の任に当たり続いて大塙正雄君が中心となって指導してくれました。決勝の監督は大塙君に頼みました。小野暉、勝の両君は続けて或は交互に学校へ見えましてフォワードの動きを一新してくれました。小熊正雄君、田村皓、恵君は多忙な現役陣にあってバック

スの動きをやさしく理論的に指導してくれました。工大の奥本武臣君はキーパー佐々木茂の指導に専念しました。水高の海老原純君は暇ある毎に来ては巧妙なタックルの仕方を身を以って指導してくれました。戸沢澄君は山中、松浦のバックスを指導し金井英孝君も夏季練習以来ずっときて、後衛の動きを指導し、時々茶目るので選手に人気がありました。其の他、菅原君、海老原謙君、内田君、八星君、小西君、千種君、山口君等沢山の先輩が指導してくれました。時には本校蹴球の大御所、岩渕二郎君の姿も見え、50名の部員は蹴球精神を強く打ち込まれたのであります。又駒崎虎夫君も数回指導に見えて、昔ならした名ウイニング振を披露されました。前部長浅沼早苗先生も練習に試合にいろいろ御指導下さいました。

夏休中には東大LBの名インナー、三上一郎氏をコーチとして迎え先輩の指導に百折竿頭一步を進め特に出足、タックルのタイム、ドリブルの仕方、シュートの時機真面目な練習態度等が余すところなく教え込まれました。こうして選手は倦くことなく血みどろの練習を続けました。

9月に入っていよいよ国民大育大会の予選が始まりました。

神奈川県予選

9月8日 湘中 13 - 0 関東学院

9月15日 湘中 6 - 0 鎌倉中学

(決勝) 9月21日 湘中 9 - 0 小田原中学

上記の成績で結局湘中バックスの練習にはなりませんでしたが選手は決して相手を見くびることなくどこまでも真面目に立派な態度で試合をいたしました。

関東予選

準々決勝 湘中 3 - 1 附属中学(東京代表) 青師校庭 10月5日

準決勝 湘中 2 - 1 真岡中学(栃木代表) 東京帝大 10月12日

決勝 湘中 2 - 0 浦和中学(埼玉代表) " 10月13日

関東予選は流石に苦戦いたしました。附属中学との試合はグラウンドが滑って本当に苦戦でした。右サイドの強いチームでした。真岡中との一戦は豪雨の中で行われ正規のパス攻撃が出来ず思わぬ苦戦でした。従って選手の体はすっかり疲れて翌日の決勝に思はぬ下手な試合をいたしました。附属中の連結、真岡中の出足、浦和中のタックルには大いに学ぶところがありました。こうして辛じて関東代表になれ

たのです。

東日本予選

準決勝 湘中 6 $\begin{pmatrix} 3 - 0 \\ 3 - 0 \end{pmatrix}$ 0 萩崎中学(中部代表) 東京帝大 10月19日

決 勝 湘中 1 $\begin{pmatrix} 0 - 0 \\ 0 - 0 \\ 0 - 0 \\ 0 - 0 \\ 0 - 0 \\ 1 - 0 \end{pmatrix}$ 0 仙台一中(東北代表) 東京帝大 10月20日

関東代表となってから学校でもいよいよ熱心に応援し出しました。他の運動もあるので試験も当分廃しました。雨が多いので練習は思うように出来なかつたが対萩崎戦には万全の策をたてました。結果は思ったよりも好成績で決勝しました。この快勝が次の決勝によくなかったとあとになって考えられます。決勝戦は仙台一中と実に1時間33分の大試合です。しかしほこに現れる程の接戦ではなく八分は攻めていました。仙台のマークは絶対で出足も早く、この点に敬意を表し選手も得るところが多かったです。かくして前後試合回数8回、得点4対失点2のスコアで東日本代表となりました。9月からの連續の試合に疲労を回復する暇もなく全日本決勝戦に備へて十日間の猛練習が開始されました。関東蹴球協会からも好意ある応援を受け名キーパー金沢宏氏の指導を受け得るところが沢山ありました。こうして終戦後1年余練習の出来る日は余すところなく練習しました。特に5年生は一致団結して責任の重大を覺り選手一同励まし合いました。練習の最後の日、C F早川が負傷し晴れの決勝に出場が危ぶまれましたが5年フォワードの決意は堅く4人が3人になっても吾々が引受けると必勝の信念が旺でした。

吾々は早川を残して1行16名、10月31日に関西遠征の旅に立ちました。練習2日間C Fの欠けているのが不安でした。早川は2日に金井君とかけつけたがとても出場不能。監督大塙君の作戦に3年の村主を補っていよいよ11月3日午後1時半決勝戦に臨みました。

秋晴の上天気北のやや強い風。トスで負けて前半風下に陣す。試合開始。神戸一中

の攻撃は流石に上手でした。とうとう前半20分1点を先取されました。こちらの攻撃にも度々チャンスはありましたが巧みな神戸バックスに阻まれて無為1-0とリードされたまま前半を終りました。遠征のつかれ、不慣なローンのグラウンドに大きいハンデキャップはありますが、湘南イレブンの意気は益々壯でした。

後半は風止み、湘南の立ち上り物凄く元気一杯、神戸陣に肉迫しました。後半20分桑田のコーナーキックをゴール前混戦となり全フォワードとハーフが参加し下プッシュして1点を返し同点とした。湘南の意気益々揚り万場神戸に声援の中でよく戦い28分、再び桑田のコーナーキックに長身LH三橋をゴール前に進ませたのが当って、三橋サイドキックで1点、ここに2対1とリード少い声援ながら湘中側の歓声天に轟く、残る3分間、このまま押し切るかと思いの外、再撃の攻防激烈特に神戸は数千の声援に地の利を得32分1点を加えて同点となった。しかし湘南選手の必勝の信念軽くついに34分LW宮沢のセンターリングを村主とてRW桑田に出し、桑田敵のバックを1人抜いてクリーンシュートが見事決って敵ゴールの左隅を割る。かくしてタイムアップ前1分にして1点を得3対2となって優勝したのであります。選手一同血みどろの戦をやり、よく頑張りました。キーパーの佐々木は、勘がよく敵の強いシュートをよく取りました。山中、松浦はタックルに勝れた技を示し、補欠村主は、早川に代って見事に職責を果し、宮沢、香川、下、桑田の4人と協力一致、特に宮沢の駿足、香川のロングシュート、下のねばり、桑田のセンターリングは神戸陣の大脅威でありました。これ等11人が大小のキックに、纖細華麗ともいうべきパスクワードに、時期を逸しないタックルに最後まで頑張った事は新聞の批評の如く高く評価してよいと思います。

神戸一中は湘南と同じ型のチームで今迄当たったどのチームよりも強力でした。今敵陣にあるかと思うと数秒にして味方の危機に運ばれ、素晴らしいテンポの早さに瞬時の油断も許されず、攻防の限りをつくし観衆をして蹴球美の境地に没入せしめ流石に東西代表の決勝に相応しいものであり、後半のシーソーゲームは観衆に100%の効果をもたらしました。

湘中が栄冠を得たその瞬間の情景は私の筆では表現出来ませんが、確かに栄冠は泡として落ちる涙の雨でした。選手も手をとりあって泣いた。先輩も泣いた。応援団もスクラムを組んで泣いた。

廳で厳かな賞状授与式が行われ、神戸のイレブンは重く首を垂れて臨んだ。居並ぶもの唯一の一掬の涙をそそがないものはあろうか。

夕陽六甲を紅に彩る頃喜ばしい栄誉に足取りも軽く西宮球場を後にした。1日から引続いた大阪復興祭も今宵は一入の賑わい湘南の選手にとっては彼らを迎える凱歌とも聞えたろう。

拙い私のこの記事を湘南中学蹴球部発展のために尽力下さった次の方々に送りたいと思う。多年本校蹴球部長として苦心された後藤先生（学習院教授）、金持先生（現厚木中学校長）、篠崎先生（栃木県視学）、浅沼先生（学習院教授）、高梨先生、故阿部源治先生に捧げます。尚本校蹴球部26年ずっとお世話願った岩渕二郎氏、初めて甲子園へ出場の監督藤田得利君、本校蹴球部の全先輩、関西遠西の度毎に絶大な後援をいただいた宮崎久男君、本年度のコーチ三上一郎氏、金沢宏氏、関東蹴球協会の竹腰氏、松丸氏、木内就一氏、宮本能冬氏、二宮氏、村形氏、長岡氏、その他の役員各位神奈川県蹴球協会長小此木歌治氏同理事片岡次夫氏神奈川県体育主事安藤利男氏に感謝の意を表します。尚未筆になりましたが選手を出された父兄各位、関西遠征に後援を載いた湘中父兄各位に深甚の謝意を捧げます。

学校長赤木先生は全国制覇の感激に次の詩を寄せられ、先輩、父兄各位によろしくとのことでした。

球を蹴り、球を蹴り復た球を蹴り、26年蹴り復た蹴る。

甲子原頭全国を制す

国家再建復た球に似たり

（原文漢文）

選手名

LW 宮沢昭夫（5年）、LI 香川嵩（5年）、CF 早川忠生（決勝は村主剛）、
(4年)、RI 下博文（4年）、RW 桑田孝（5年）、LH 三橋弘義（4年）、
CH 松岡巖（5年）、RH 原田徳夫（4年）、LB 松浦正美（5年）、RB 山中
康央（5年）、GK 佐々木茂（5年）、Sub 香川稔（3年）、小田島三之助
(3年)、部長、香川幹一、千田敬三、鈴木忠夫、竹下直之、監督大塙正雄

蹴 球 祭 と 定 期 戦

蹴球祭（1月15日）

戦前は1月1日が登校日だったようです。その関係もあって、正月1日～3日の間に初蹴り会なるものがあり、現役、OBが集まって朝から夕方までボールを蹴り簡単な懇親会を開いていたそうです。

戦後もしばらくは松の内に初蹴り会を行なっていましたが、お正月は何かと忙しいし、1月15日が成人の日として国民の祝日になったこともあり、この日に集まろうとなつたわけです。名称も“蹴球祭”とし、毎年何の連絡がなくても、1月15日に湘南に行けばボールを蹴れるし、旧友たちとも会えるというのが恒例となりました。

毎年多数のOB方が参加され盛会が続いていましたが、昭和40年代に入り、OB会が整備されていなかつたため、古いOB方と若いOB達の連絡、交歓が上手く運ばず、また、県下新人戦大会が1月から行われることになり、1月15日も午後しかグランドが使えないなどの理由で、蹴球祭は盛り上りを欠いてしまいました。

50年代に入り、故岩渕先生が蹴球祭及びOB会を何とか立直ししなければと、種々のご苦労をされ、55年1月の蹴球祭には多数のOB方の参加を得られ、また、OB会も整理しようとの動きが具体的にできました。その後、岩渕先生は急逝されましたが、そのご遺志を生かそうと全OBがひとつにまとまり、56年1月には、総会、岩渕二郎追悼記念ショート板披露をかねて蹴球祭が盛大に行われました。今後は、OB会事務局も設置され、総会をかねた蹴球祭のご案内が各OB方に発送されることと思いますので、長い歴史を誇る“蹴球祭”的灯を消さないよう、多数のご参加をお願いいたします。

定期戦

3月下旬の対筑波大附属（旧教育大附属）戦と5月下旬の対浦和高校戦があります。両定期戦とも20年を越える歴史を持ち、対筑波戦にはOB戦も行われます。また、浦高戦は各種競技も行われ、学校ぐるみの定期戦となっています。

新制高校蹴球部新入生勧誘文抜粋

昭和26年頃、今日ほどポピュラーでなかったサッカー（当時蹴球）を説明し、湘南高における部の位置等を述べたものがカリ板刷り、9ページに及ぶ冊子として残されている。以下、同冊子「本校に於ける蹴球競技の紹介」より抜粋する。

一、はじめに

諸君、おめでとう！ 学業に於ても、スポーツに於ても有名なる当校に進学された事は大いに結構です。

Well, what future do you plan ?

学生ライフは健全なるスポーツライフを送ることにより愈々完璧となるものと我々は信じて居ります。当校には多くのスポーツ部があり、いづれも其方面の雄であります。我々は恐らく諸君の多くが初めて見る競技として、我校伝統の誇りである蹴球競技につき諸君に紹介して置く必要を感じるものであります。

四、その特色

スピード、勇気、功緻、気品をその特色とします。大陸系のスポーツは大抵余り細かい規則がないのを特色とします。— 中略 — ゲームは要するに、矩形の競技場の両端に立っている敵側のゴールに、規則に反しない方法でより多くボールを打ち込めばよいのです。一人のゴール守備者以外は一切、腕、手を用いることを許されませんから、競技は多く力強いキックに依り展開し、こゝに猛烈な攻防戦が行われるのであります。

五、どんな風に行われるか

前略 F Wは五人で攻撃担当ですが、ウィングは端から攻め込む役、センターは中央にあって強力な得点者となること、インナーはこの両者を兼ね、且つ攻防の連絡に活躍する等大体の特色を区別出来ます。

H Bは三人で敵の攻撃を喰い止め、且出来るだけ味方に有利に球を捌かなければならぬ大変な役です。F Bは防禦の最後の支援で、多く強力なキックにより一撃に挽回出来る人を当てます。G Kは両手の使用を許される唯一人の人で、ゴールを堅く守り、敵の猛烈なショット(shot)に対し挺身喰い止める役です。

七、我等の輝く伝統

- ①我等の目的 我等の目的はよき団体競技生活を通じ、我等の学生生活を充実し力に満ちた青春を送らんとするにある。我等は目的と目標を混同するとはない。然し
- ②我等の目標 は飽迄日本選手権の保持にある。たとい一時的に成績不振のときでも且つ我等はこの目標を失ったことはなく将来もないであろう。
- ③我等の伝統 は従って必然的に次の三条に尽きる。
- 一、理想を高く 故に我等はその成ると成らざるとを当はず常に最高の目標に向って邁進する。高校生の蹴球競技が達し得べき最高限の水準が我等の目標である。
- 二、努力精進 蹴球は他校と競技するという段になると、本質として決して安易な競技ではない。安易に流れる位ならこう云うスポーツはやらないに越したことはない。
- 三、自律自制 凡そ学生のスポーツが我等の胸を擊つ瞬間は決して功技や愛嬌にあるのではなく、真理を求める若者らしい真剣さ、真面目さにある。我等の団結はどこまでも自肅による規律ある生活を基調とし、この点については他がどうであろうと決して譲歩しないであろう。

八、蹴球部を望む諸君へ

湘南のグランドは開放されて居て誰でも蹴球をやることが出来る。又規定によらず、一時に六十人位迄はワイワイと遊ぶことも出来る。遠慮は要らない。体育としての蹴球、リクレーションとしての蹴球も結構だ。又次の様な諸君は将来所謂部員生活、選手生活を目指して入部されることをおすすめする。

- ① 意地っ張りな人 ② 斗志の強い人 ③ 足の速い人
④ ジャムプの利く人 ⑤ 長距りの強い人 ⑥ 身の大きな人
⑦ 敏捷な人 後略

以上原文のまま

我が同志、湯浅

45回生 山口 晴夫

サッカーというスポーツを通して結びついた友は多い。それはチームメイトであり、また宿敵チームのメンバー、そして、サッカーを行ったという事だけで知り合い馬が合った人等である。しかし、私にとってサッカーを行う青少年を育てることにロマンを感じ、そのことの為に生活を考え、Lite workとしてとらえている同志的存在は周囲に少ない。私が自分勝手に同志と考えている数少ない人々の一人で、我が湘南サッカー部のユニークなO Bが湯浅健二（46回）である。

一言でいうと、現在サッカーに情熱を傾けながら、我が国において知名度の低い人物は他に無いであろう。現役時代の彼を知るものは、立派な体（188cm、80kg）を生かすことなく、先生に怒鳴れて、全ポジションを回ったあの湯浅を思い出すであろう。しかし、高校を卒業後の2～3年が彼に何かを与えたのであろう。

私と彼は1974年ワールドカップに優勝した西独に、サッカー見聞旅行を行ったのである。ある時は大学の学生寮にもぐり込み、また西独蹴球協会のゲストとして一週間をすごしたりの珍道中ではあったが、プロチームの試合に興奮し、またワインに酔って議論したりの数十日間は充実した日々であった。

その後、二人は食える道と食えない道に別かれた。すなわち私は体育教師として教職に、彼は陸送のバイトによる100万円とともに西独にコーチになる為のサッカー留学を行ったのである。現在この食えないがたのもしい同志は、おそらく日本人として最初であろうコーチのライセンスのトップにあたるもの取得し、自己のサッカー理論を日本で展開すべく準備を行っている。おそらくコーチ、湯浅という名は近い将来、その行動とともに現われてくるであろうと遠くKOLNの地を思いながらマイホームでビールを飲んでいる今日このごろである。

人はその青年期において、決定的とも言える体験を持つ、我々サッカー部O Bにとって湘南サッカーはおそらくこの体験の一つになるであろう。

我が同志湯浅にとって湘南サッカーは最も大きな体験であったであろうことを、O B諸兄、そして、後輩に知らせたくこのページを借りた。

湘南ペガサス・サッカークラブ

31回生 大内 健嗣

昭和53年10月末、横浜、菊名のとある赤ちょうちん屋。柳川、岡田、松本、大内、牧村の5人が酒を飲みながら（このメンバーは、大阪近辺在住者の多い時は、大阪で暑気払い、東京近辺在住者の多い時は東京で忘年会、今度は00の送別会とかいって理由をつくり、よく飲んでいました。）「こうやって、酒で集まるのもいいが、自分達の身体の為に今度は、サッカーをやる為に集まろう。」と誰かが口走った、一言が発端になり、更に岩渕さんの「大賛成」のもとに出来たのがこの「湘南ペガサス」です。

この夜は特にアルコールがはいっているため話は早く「ユニフォームは」「チーム名は」「人数は」「試合は」等々話題は広がる一方で終りがありませんでした。ともかく賛同者をつのって、岩渕さんのところへ行こうということで、この日は、シャン・シャン・シャン。

調べた蹴球部在籍者名簿を持って、11月12日に岩渕さん宅へお伺いし主旨を話すと、まっていたとばかりに大賛成され、メンバーについても「偉い先輩達は、社会的に重要な地位にいたり、勤務先の関係でなかなか集まりにくいようだった。君達位の年代が、一番まとまり易いだろう。是非やってくれ。」と、おっしゃって、我々が持参した在籍者名簿を見ながら、一人ずつ現役時代のエピソードなどをまぜながら、人選されました。（選ばれながらも、不幸にして、個人的・地域的理由から参加をみあわせた人も何人かおります。）人選をおえ、名前を見ながら、一人うなづいておられました。この人選作業をみていて岩渕さんのサッカーに対する情熱の一端をみせられたような気がしました。人選が終ると今夜は「相手と場所だな」とおっしゃって、その場で「神奈川四十雀」と鈴木中先生宅へ電話をされて、わずか30分位でチーム名を除いて、クラブ員、初試合の相手、場所、日時を決めて下さいました。更に「おれも入れろよ！、おれはセンター・フォワードだ。それからユニフォームがないといかんな」とおっしゃって、奥の部屋から例の（諸先輩もよく御存知のあのユニフォームです）ユニフォームをもってこられて、「このユニフ

ォームを寄附する。おれもクラブの一員だから」と、我々がユニフォームは新調しますといつても聞き入れず「さっきも言った様に、旧制の先輩達は、時間的な余裕がなくてなかなか集まれないので、こうやって2ヶ月に1回は試合をやるチームが出来た事だからこれを使え」とおっしゃり—我々は極力辞退したのですがー、13着を8万円で譲受けることになりました。（後にこのユニフォームは、湘南ペガサスよりO B会に寄贈し、現在はペガサスで管理保管しています。）そうして、12月27日、湘南高校グラウンドにて初試合を行いました。4対2で初戦（対神奈川四十雀）に勝ち、発会式を兼て「洗心亭」へ集合しました。この会合でチーム名を「湘南ペガサス」と命名され、集まった教え子達を前にして、こんなに沢山まだサッカーをやろうとする奴がいるということに何度もうれしそうに、うなづいて、「次の試合はいつ、どこでやる」といわれ大変ご満悦の様子でした。

その後、岩渕さんは、ペガサスとして第三試合（54年5月12日、対荏原インフィルコ）においてになり、前半をセンターフォワードで出場されました。5対2で、我々が勝つのを見た上で帰り際に「おれはもう試合をやらないが、試合通知はくれよ。このユニフォームでガンバレ！」といわれたことが、とても印象に残っています。ペガサスの生みの親として又、こわいコーチとして常に我々のそばにおられた岩渕さんも今はもう他界されてしまいました。しかしペガサスの試合のたびに岩渕さんを思い出さずにはいられません。

ペガサスは、その後も試合はよくやり、54年度 6勝3敗1引分、55年度 8勝7敗3引分、の戦績です。56年度も試合に納会にと精を出していくつもりです。

現在のクラブ員は49名という大世帯になりました（宮原先生、鈴木先生も特別クラブ会員として、参加していただいている。）

クラブ員

27年卒 加藤道八・小瀬村秀夫・田川明・出口孝治・柳川明信・山本修

28年卒 近藤壮一・嶋田武夫・末永直

30年卒 姉崎正平・岡田清治・川尻富次郎・嶋田和夫・渡辺九洲夫・中川英夫・中原弘己・松本好且・八木一郎

31年卒 大内健嗣・田中啓之・長谷川晃一郎・浜野康彦・松居幸次郎

32年卒 牛尾慶邦・落合均・柴田右一・清水広・関根和衛・浜松道夫

33年卒 福井久雄

34年卒 香場定孝・畠山昭彦

36年卒 井上孝・小川浩一・兼子盾夫・菊岡敬・塩崎洋一郎・渋谷繁夫・関紀夫・
田中道夫・原田冬樹・久森茂男・丸屋喬

37年卒 牧村英樹・小林弘治

38年卒 薫品行夫

39年卒 小泉親昂 以上47名

特別会員 宮原孝雄先生・鈴木中先生

(以上49名)

S O I に活躍する勇者たち

15回生 内田 康侍

戦前は今程サッカーが普及していなかったので、サッカーで名の通っている学校は少なかった。校技としてサッカーを採用していた湘南中学の卒業生は、サッカー部に属していないくとも、旧制高校に入学と同時に、サッカー部の狙う処となった。湘南出身というだけで、何時の間にかサッカー部——ア式蹴球部という方が当時の雰囲気を現わしている——に入れられていた人も多かったのである。東京高師付属中、広島高師付属中、府立五中、神戸一中などと肩を並べて、その多さを競っている。

当時は、今の6・3・3・4制と違って6・5・3・3制であった。湘南中学は、その5に当っており、入試地獄の焦点は、中学卒業後の6・5・3・3の5と3の間にあった。6から5（湘南中学）に入るには、今より入試に落ちる人が多かったが、それは、ア・テストとか進学指導が違っていて、今よりノンビリしていたからでもある。湘南中学を卒業して、一高に入るのが今の東大に相当したといえよう。だが、高等学校に入ると帝国大学（今の7帝大）に入ることは保証されていたが、もう一度入学試験もあった。当時の私学の大学は、当時の高等学校も並設しており、早稲田高等学院は早大へ、慶應予科は慶大へ、というように、大学の進学は、その専門を選ばなければ、進学できた。6・5・3・3制というより、6・5・6制であったという方が判るかも知れない。今の6・3・3・4制の4の中で教養課程2年が、当時の6・5・3・3制の3番目の3であったともいえよう。その3を当時インターハイ（高等学校又は大学予科）といった。テレビもエレクトロニクスもなかった頃の教育は、現在よりも、科学的水準は低かったのであろう。学ぶことも少なかったのだろうが、G N P の低い頃でもあったので、インターハイに進学する事自体が、既にエリートであった。インターハイの年代（人格形成期）のエリート人間として、特權階級——階級というより、社会的責任を自覚しようとしている青年——を意識した弊衣破帽の高校生は、進学という階段は、保証されていて、勉強とか試験のエスカレーターからは、外れていることができたのである。

そのような余裕ある学生々活が、当時のインターハイであった。ただし、当時の日本は、貧乏だった。スポーツも今のように理解されてはいなかったが、人格形成の一環として、運動部があった。その旧制高校（インターハイ）は、正に学問、スポーツはもとより、高校（インターハイ）生活そのものが、人格形成の場だったといえる。

さて、その高等学校の各種の運動部の全国大会を「インターハイ」といった。サッカーは、大正12年にその第1回を開催している。ところが、その頃のサッカーはアソシエーション・フットボール（ア式蹴球）といい、今程普及していなかった。従って、当時の各高等学校サッカーチームは、中学でサッカーを経験している人だけが相手では、11人どころか、2～3人も集らなかつたのである。前記中学卒業生が、金の卵として歓迎されたのは、その為である。

さて、学制改革で、旧制高校が消滅して三十年になるが、6年程前から、当時のサッカーマンが、各校毎にOBチームを結成し、春秋2回の大会をもつことになった。サッカーOBインターハイ（略称SOI）と称し、当然のことながら、湘南中学OBが大活躍することとなった。最年少でも50才というサッカー集団が生まれる事など、誰も考えなかつたが、偉大な組織者、小林孝生（五高10）の下に、驚意的な集団が育くまれたのである。その補佐役が同じ五高出身の高橋譲（19回）の湘南中学出身であることは、我々の誇りとするところなのである。

このSOIの名簿で、湘南の偉容を語ってみよう。（当然のことながらSOIに属さない大学へ進学した先輩を語ることができないのは、お許し下さい。）第1回卒の天野武一（1回－湘南卒年次の場合は、以下こう記すが、原則として省略、静岡3－静岡高校昭和3年卒の略、3年位引けば湘南卒の回数となる。以下同じ。）に続いて天野（現松村）豊雄（静岡8）天野俊三（北大予7.9.の湘南元老3兄弟が、名を列ねているのが、湘南中の歴史を物語っている。以下、北から南へ、名簿に従って、SOIに活躍する勇者等を紹介しよう。

北大予科（札幌）では、前述の天野に続いて、外岡鉄男、山中敏夫（10）内田康侍、脇正男（17）奥本武臣、藤井徹、三浦徹（19）古城正俊（22）佐々木茂、早川次郎（25）と11名いる。駒崎虎男（7回）の名も載る筈だったが、彼は慶應に進学し、北大予は、彼に振られてガッカリした。慶應はSOIに属ないので、この記

事にはのらないが、北の果にこなかったことで、日本サッカー界では名をなした。樋口（現渡辺）真（10）は帯広蹴球協会の会長をしているが、遠隔の地にいて、S O I の名簿から外れている。山中敏夫と共に北海道のサッカー界に大きな功績を残した。その山中敏夫は、北海道蹴球協会々長、札幌市蹴球協会々長として、遠く北海道のサッカーの今日に、大きく寄与した。岩渕二郎を偲ぶ会に遠く札幌から参加したが、昨秋、岩渕の後を追ってこの世を去った。淋しい限りである。北大予科湘南勢は、内田以下O B 現役（造語）として活躍、水戸高校と共に湘南王国を語っている。不思議に弘前高校と二高（仙台）には活躍している人が見当たらない。伊藤伸一郎（二高17）の名があるだけである。山形高校では、服部一郎（9）玉井敬（15）中村昭（19）松本良二、山木一郎（20）といふが、松本はFWLしか知らなかつたが、今はB Kで活躍している。新潟高校では、五島敏明（18）岡本英一（19）のうち、岡本が試合で張切っている。富岡高校には、常盤嘉一郎（8）がいる。55年S O I 有志による欧州遠征には、服部、田村（早高、後述）を引連れて大活躍、岩渕なきあと、湘南O B 現役の最元老である。四高（金沢）には多々羅光夫（19）の名がある。

水戸高校は、永野重一（11）八星泰（15）吉武長栄、大埜正雄（18）戸沢澄（19）海老原純、八星爭（22）海老原朗、吉野龍二（24）北村昭夫（24修）と10名、他に大埜の前に母校でコーチをした藤田得利、島田正彦両先輩も水戸高出身である。大埜と海老原朗は、北海道で仕事をしているが、東京、京都と春秋のS O I 大会には北海道から空路馳せ参づる熱心さである。

一高（東京）には、香川嵩（25）が頑張っている。私学で唯一のS O I メンバーの早稲田高等学院では、服部斐夫（19）田村恵（22）の欧州遠征組の他に桑田孝（25）がいて、S O I の最多優勝を誇っている。東京高校には藤田真美（24）が、湘南サッカー部に籍がなかったのに、今や大活躍である。武蔵、成城、府立には湘南勢が見当らないが、成蹊高校に田丸謙二（18）の名がみえる。松本高校には今井精一郎（22）石原昭（25）の2名、今井はS O I の印刷を一手に引受けて、奉仕にあけくれ喜ばれている。静岡高校には、前述の天野武一、松村豊雄兄弟に続いて、都築忠春（11）安程隆文（17）と意外に少ない。名手安保が後輩に恵まれていないのは、この原稿をかいての新発見だ。八高（名古屋）には山岡淳（25）の名がある。

姫路高校は三高（京都）と共に戦後サッカーチームができたが、姫路サッカー創設に尽力した坂本望（23）は湘南中経由姫中出身で、今も活躍している。三高、松江、六高（岡山）広島と遠隔の地となると湘南出身も不毛だが、山口高校では鷹野榛雄（23）が元気で、松山、佐賀にはいないが、五高（熊本）に高橋謙（20）七高（鹿児島）に指宿陽勇（現伊吹昭男）と九州南部にまで遊学し、今も元気でボールを追っている。高橋（前述）はサッカーチームを赤木愛太郎校長の指示で中学4年で退部、プラスバンド部創設者となつたが、今や、S O I にはなくてはならない世話役であり、現役である。

さて、何人の名前をあげたか、暇のある人は教えて頂きたい。この他名簿外にも、現在S O I に参加しない名選手がいるはずである。

S O I に活躍する勇者たちと題して、安保や大塁、その他多くの人の現在のサッカーを紹介する積りが、名前をあげるだけで、大巾に予定紙数を超えた。S O I （旧制高校進学者）以外で活躍しているO B 現役、例えば小熊幸雄（13回）の、今も衰えないインステップなど、題名の関係で記事にできない多くの先輩の活躍にふれることのできないのも残念である。

このS O I フィーバーが過熱、56年3月29日、筑波大学附属高校との定期戦の前々座試合として、同高校の前身、東京高師附属中学O B（S O I メンバーとして、湘南中O Bとその勢力を争っている。）の挑戦を受け、母校グランドで試合が行われた。近く東京都立五中からも挑戦されるであろうし、そうなければ、神戸一中戦の復活、広島高師附属中学との対戦等も必至であろう。正に熟年パワー爆発である。消滅寸前のローソクの火は、さかんである。ただでさえ少ないグラウンドを邪魔するなど邪険にするなけれ、若き日の夢を追って、今もマトモなサッカーを夢見て、サッカーこそ芸術だ、詩だと論じて、アフターサッカーの酒杯を傾ける意氣軒昂な勇者等、湘南50年史の初期を飾った若人の雄呼びを録音して、筆者の責を果したこととしよう。尚、東高師附中戦の参加者次の通り（サッカーチームO B以外のメンバーが、今後も大勢参加してくれることでしょう。）常盤（5回）、小熊（13回）、安保、内田（15回）、服部（16回）、保利、菅原（17回）、高橋（18回）、田村（19回）、藤田（21回）、松浦（22回）、近藤（26回）、柳川、田川（27回）、に、岡田（30回）、大田（31回）も加わった。

文中敬称略

ロッキーを知っていますか

41回生 植松 二郎

ロッキーという芸人がいる。新宿、六本木あたりで彼を知らないのはモグリだ、夜遊びの通ではないという人もいる。男性週刊誌、スポーツ紙、テレビ番組にも何回か紹介された。彼は総勢5人の一座を率いて、高級パブのショータイムに舞台に立つ。そのショーというのが、ものすごい。並のショーではない。一座のメンバーは女装の青年や風変わりな少年などという異色さだが、グロテスクな興味を目的とするものではない。リーダーであるロッキーを中心に、エネルギーッシュに過激に動き回る。派手な（まるで戦場のような）踊りがあったかと思えば、ギャグの連発の寸劇がある。それらが、くるくると絶え間なしに、約30分続けられる。客は、テーブルの上の水割りに口をつける暇さえ見つけられず、ただ爆笑、また爆笑。何ともすさまじいショーなのである。当然、このロッキーのファンが多い。同世代の男性から、ミーハーの女の子まで層も厚い。彼が肌をあらわにしてダイナミックな踊りを踊るとき、その筋肉の立派さにたいていの客はびっくりする。いったい、この男は何者なのだろうという思いにとらわれるようだ。

このロッキーが、湘南サッカー部第40回生のキャプテンだった山田仁夫氏である。湘南時代は、C H。その凄絶なタックルを神奈川県で知らない選手はいなかった。「闘志」が、ユニフォームを着ているという感じだった。在学中、かなりの好成績をおさめ、卒業後、東教大（現筑波大）に入学、サッカー部のレギュラーとして活躍した。

彼を知る後輩の中で、強く影響を受けた先輩として彼を挙げる者は多い。プレイそのものに、その強烈な個性が象徴されていた。エピソードをあげてみる。ひとつは、対Y校（横浜商高）戦。自律ゴール前にあがったボールを相手のC Fと競り合う。ガシッと鈍い音がして2人が地面に落ちる。額と額の激突。相手のC Fはうずくまる。山田さんは立上がったが、顔じゅう鮮血で真赤である。額がパックリ割れていた。激しい出血。すぐ手当てに運ばれた。そして、翌日、心配している部員の前に、包帯をギリギリ巻いて現われ、その包帯を解いて傷口を見せた。顔面、紫色

に腫れ、傷は想像以上ひどい。「見ろ、これ」山田さんはいう。「ひどいですね」後輩たちがいう。「この形、みてみろよ」傷口のことである。Yの字に割れている。「な、Y校とやったからY、山田の頭文字だからY、たいしたもんだろう」そのことを言いたいために包帯をとったのである。

もうひとつは対鎌倉学園戦。俊足のLWがいた。ドリブルする彼に、山田さんの激しいタックル。LWがふっとぶ。山田さんもしばらく、うなり、おもむろにピヨンピヨンとびはねた。股間が激突したのだ。相手はいつまでも立上がりらず、結局、担架で運ばれていった。そして試合後、足を骨折したことがわかった。なんと山田さんのタマに折られてしまったのだ。「赤チンを塗っているからサポーターが汚れてしまうがねえ」としばらくボヤいていたものの、むろん山田さんの方には何の後遺症もなかった。

他にもエピソードをあげればきりがない。ガッツシーンが次々と思い浮かんでくる。その山田仁夫氏と、ロッキー。いったい、どうなっているんだろう、という大変身だ。しかし、サッカーマンからいきなりショーマンに、というのではない。その間に、山田仁夫氏はいくつかの変身を繰り返している。個人的なことを想像で書くのは失礼だから、わかっていることだけでその間の「変身の歴史」に簡単にふれてみる。山田仁夫氏は東教大卒業後、母校湘南高の体育教官として戻り、サッカーチームのコーチを務めることになっていた。彼を知る人はみんな、山田仁夫氏が東教大へ入学した時点からそう信じていた。もちろん本人もである。そして、在学中レギュラープレーヤーとして活躍。着々とそのルートを歩いていた。だが、4年になったころ、ふっと噂が伝わった。サッカーをやめるらしい。学校もやめるらしい。その噂は本当だった。山田仁夫氏は東教大を中退。湘南へも戻らないことになった。その変身には、当時最高潮だった学生運動も何らかの影響を与えていたようだが、詳しいことはわからない。そうして次の噂は、山田仁夫氏は踊りをやっているらしい、どうも前衛劇団か何からしい、というもの。湘南在学中、3年生の時の体育祭仮装行列で山田仁夫氏は「ウェストサイド物語」の演出をし、そのみずみずしい感覚を披露した。そうした一面を知っているものは、なるほどとその変身を納得したが、山田仁夫氏自身が考えていることまでは想像できなかった。その後、地方巡りをしているらしいという噂が流れただけで、パッタリ消息が絶えた。OB会にももちろ

ん姿を現わさない。「山田さんどうしているのだろうか」というのが、後輩たちのあいさつ代わりだった。そして何年かのち、山田仁夫氏がテレビに出たのを見たという者がいた。夜のショーパン組である。週刊紙のグラビアでも見たという者もいた。どうやら六本木で踊っているらしいということがわかった。隠れたタレントとしてロッキーというショーマンがいることを知っている者はいたが、それが山田仁夫氏であることがわかるまで時間がかかった。

いま、何人かの後輩たちはロッキーの登場する店へ通っている。ショーの合い間にロッキーと話をする。「道をはずれた」という意気がりも、深刻さもない。髪型と着るものは大変身だが、眼の光と大きな笑い声はまったく変わっていない。「陽気なまじめさ」といったものに満ちている。そして、湘南時代のことを話すときのロッキーのうれしそうな顔が後輩たちにうれしい。岩渕先生が亡くなられたことを告げたとき、1分ぐらい黙りこんで顔をひきつらせ、ぐしゃんと鼻をすすったのを目撃した者もいる。

山田仁夫氏の大変身の中に、湘南サッカーがどう位置を占めているのかはわからない。しかし、考える前に走り出し、走りながら考える。いや、走ることそのものが考えることかのような山田仁夫氏の生き方の姿勢は、たぶん、あの時期に培われたものじゃないか、と後輩たちは勝手な想像をしている。

遠征について

46回生 隅山 幸彦

湘南を卒業して、はや十年たちましたが、今でも湘南のグランドで、ボールを蹴っていた日々を忘れることが出来ません。その中でも、二年の終りの春休みに、広島、静岡に遠征した時の事が、昨日の事の様に思い出されます。

それは、湘南サッカー部の歴史の中でも例のない大がかりな遠征でした。

現在のサッカー部長である鈴木 中先生、そして今は亡き岩渕先生をはじめとする諸先輩の物心両面にわたる、暖かい御支援によって実現された遠征でした。

遠征には、前記の御二人の引率で、二十名もの部員が参加しました。各部員は出発前、自分達のサッカーが、はたして、広島勢や、当時不敗を誇っていた静岡県藤枝東高に通じるかどうか、といった不安がありました。しかし、両先生には、湘南のサッカーは、全国でも立派に通用するという自信があったようでした。

実際、「案ずるより生むが易し」の言葉通り、全国で名の通ったチームと試合をしても決って引きをとりませんでした。それどころか、藤枝東高とは互角以上に戦い、観客の賞賛を受けた位でした。結果は0対1と負けはしましたが、部員一同には大きな自信となりました。しかしながら、その年の高校総体の県予選ではベスト4に残りながら、決勝リーグで敗退し、全国大会出場はかないませんでした。本当にこれが今でも惜まれてなりません。

一言、現役の皆さんに申し上げたいことがあります。湘南サッカーは全国のどの高校チームと対戦しても決して力は劣らないと信じて練習に励んで下さい。

最後にこの誌上を御借りして、我々、46回生の遠征の為に御尽力下さった諸先輩方に御礼を申し述べ、筆を置かせていただきます。

どうもありがとうございました。今後はOBの一員として現役の為に我ら46回生一同尽す所存です。

ある日の日誌より (昭和39年)

10月5日(月)曇

欠席者 広野 大橋

〔練習内容〕

追試の為、最初の方は、わかりません。

?

- ヘディング ◦ フェイントを入れてドリブルシュート
- トラッピングしてシュート ◦ その後フォワードとバックスにわかれて練習

フォワード

- ウィングがパスをうけて、センターリングの練習 ◦ ドリブル
- ヘディング

バックス

- ヘディング

スタンディング→両足ジャンプヘッド→片足ジャンプヘッド

- ヘッディングシュート
- 紅白試合
- ランニング三周
- 整理体操

〔感想〕

今日も、一年生はみんな真面目に練習にでてきた。広野は体の具合が悪くて休み、山田さんもでてきた。

みんなトラッピングが大部うまくなつたが、まだまだシュートが弱いような感じ、ヘディングシュートは一年では、宮坂が一番タイミングがあつているよう。

でもみんなとってもよくなつた感じ、しかし、まだ山田さんのような力強さがない。紅白試合は、バックス（紅）対フォワード（白）でやつた。白は、紅がキーパーなしなのに、何度もシュートチャンスを逸していた。紅はよくおしていて、樺山がフリーでシュートして、紅白試合は、すぐ終つた。

（紅 1 対 0 白）

今日、単身カブで、紀伊半島旅行中の佐藤さんが、金をおとしてしまつて、学校へ電話が、かかってきて、鈴木（中）先生が、ぼくの家へ電話をかけて、ぼくの家で、佐藤さんのとなりの家の親せきの家に電話をかけたところ、佐藤さんの家のお母さんが留守だったりして、てんやわんやしたが、佐藤さんの家の前の人人が、3,000円電報為替をおくり、佐藤さんのお母さんにもなんとか連絡がついて、佐藤さんは、無事に帰つて来られることになった。

書いた人

及川 和夫君でした//

以上原文のまま。

※編集部註

この頃（昭和39年）の1、2年間は日誌を毎日書いていた様です。良い習慣だと思いますし、色々と参考になりますので是非書くようにお勧めします。

ここに掲載の奇妙な文章を書いた及川君は、現在読売新聞の記者として名文を書き活躍しています。

また、「佐藤さん……」の事件は、2年生の修学旅行中に起きたのです。佐藤君は修学旅行に参加せず、単身オートバイで旅行をしていました。本来、旅行に参加しない者は、自宅学習か、学校で自習することになっていました。警察から学校に連絡があり、事件が明るみにてて、佐藤君は退学寸前のところまでいきました。ところが、時の校長が香川先生で、「サッカー部員のこと」であったため、訓告ですんだのです。佐藤君はその後、東大大学院を出て、日本鋼管で優秀な社員として勤務しておりますが、これもひとえに香川先生のお蔭だと感謝しているそうです。

親子・兄弟サッカーマン

結婚式で新郎新婦に「子供さんは何人位?」と質問すると、「9人生んで野球チームをつくりたい」という答がよく返ってきます。「11人生んでサッカーチームをつくりたい」でないのが残念です。現実には、子供2人が平均ですが、湘南サッカーチームには戦前戦後を通じて、ご兄弟で活躍された方が多数いますし、親子で活躍された方もいます。その方々全員とはいかないと思いますが、年代を追ってお名前をご紹介いたしましょう。(敬称略)

天野 武一(1回生)俊三(2回生)豊雄(5回生、現在松村)…武一氏にはO B会会長としてお世話をいただいております。／駒崎 虎夫(6回生)利夫(8回生)…虎夫氏は慶應の名ヴィングとして活躍され、湘南の名を全国に広められました。／松岡 三四郎(故人)五六(9回生)七郎(故人)甥の巖(22回生)
樋口 真(8回生、現姓渡辺)康(15回生)…真氏は帯広サッカー協会創立者です。／八星 秦(10回生)爭(20回生)／小熊 幸雄(13回生)正雄(16回生)
田村 皓(15回生)恵(19回生)／安保 隆文(15回生)達明(48回生)和俊(49回生)…ただ一組の親子サッカーマンです。隆文氏にはO B会事務局としてお骨折りいただいている。／小野 勝(17回生)暉(17回生)…双子のご兄弟のため、試合の時は相手バックスが惑わされたということです。／早川 純生(18回生)忠生(23回生、現姓小林)／香川 嵩(22回生)稔(25回生)彰男(38回生)…元校長、香川幹一氏の息子さんです。／酒井 佐弘(26回生)佐康(31回生)／桐沢 彰(29回生)潔(32回生)／丸屋 充(34回生)喬(36回生)／福井 久雄(33回生)民雄(41回生)／牧村 優(34回生)英樹(37回生)／小泉 親昂(39回生)親種(41回生)治子(44回生)…治子さんは第一号の女性マネージャーです。／坂部 正治(42回生)治郎(43回生)／川口 秀実(48回生)正人(50回生)／盛岡 邦夫(51回生)敏夫(52回生)

これからもたくさんの親子・兄弟サッカーマンが登場されることを期待しております。

独断と偏見に満ちた湘中サッカー裏面史

「昭和12年～16年、思い出するまゝ」

17回生 菅原 留意

50代も60に近く、私も昔を懐かしむこと切なる年代となってきた。折も折、青春時代のきわめてわずかな年月ではあったが、その中に浸りきってすごした湘南蹴球部の50年史をまとめる話をきき、つづいて一文を依頼された。

青春を懐古するとき、子供から大人への過渡期にあたる中学時代（旧制は5年。現在の高校2年まで）の思い出は強烈である。その中の蹴球部生活、話したいこと、書きたいこと、その生活を通じて現在の自分に大きな影響をあたえた些細なこと、大きなこと。限りなく頭に浮かび、全部書いていたらおそらくきりがないであろう。

いろいろな人々が、各年代を通じ、多角的にいろいろなことを書き、記録の整理も50年史というからにはそれなりにこの本には客観的資料としてのせられると思う。だから私は、私を中心として主観的な私の思い出として残っている昭和12年～昭和16年 在学中の湘南中学蹴球部のあれこれを思い出すままに書いてみよう。独断と偏見に満ちた湘南サッカー史の一断面である。

湘南のサッカー史を語るとき、創生期、興隆期、第1期黄金時代、第2期云々といろいろ言われている。あるいはその時期の区切り方には定着公認されたものがあるかも知れないが、私を含み、同期の17回生サッカー仲間は、我々の在学中が、第1期黄金時代だった信じて疑わない。

昭和12年、私は鎌倉の附属小学校から湘南中学に入った。フゾク、フゾクと簡単に呼ばれていたが、正確に言えば「神奈川県立男子師範学校附属尋常高等小学校」という長ったらしい名前の小学校。師範学校の附属だから教生と称する実習先生が来る。その教生の先生が体操（体育ではない）の時間や、休み時間、放課後に野球、サッカー、陸上競技。若いからなんでも相手をして遊んでくれ、かつ教えてくれた。サッカーでいえば今の“少年サッカー教室”のはしりの洗礼をすでにその当時の附

属小学校児童は受けていたのである。そして私達の時代には、その大半は湘南中学に進学した。そのせいか当時の湘南中学サッカー部OBには附属小学校出身者が非常に多い。

さて、我々が入学した前年、興隆期から黄金期に入りはじめた蹴球部は、はじめての地方予選（山神静大会といって、山梨、神奈川、静岡の三県が1ブロックになっていた）で優勝して甲子園の全国大会に出場した。野球がきらいで蹴球を校技としていた、赤木校長以下、先生の方が生徒より興奮したらしく、全国制覇を狙って“蹴球部5ヶ年計画”なるものができあがっていたらしく。入学早々の地理の時間に、先生が授業そっちのけで蹴球部の話をし、部員の勧誘（というより入部の命令）をはじめた。いわゆとした香川先生で当時の蹴球部長、地理の先生としても県下否全国的に著名な方で、小柄ではあったが快男子、後年蹴球部で大活躍し、全国的にも名をあげた香川君のお父さんである。席上、前述のような事情から附属出身者は特に狙い打ちで、当然私にも圧力がかかった。しかし、生来ヘソ曲りだった私は、この有無をいわさぬやりかたがコチンときて、元来勉強よりは遊ぶことスポーツをすることの方が好きだったので、中学に入ったら蹴球部にでも入ろうかなどと考えていたにもかかわらず、断固として入部しなかった。香川先生はこれを私たちのクラスだけでなく全クラス（当時は4学級200人）でやり、50人以上の新入部員を獲得したときく。当時の先輩に今聞くと、これだけ集った新入生には面喰ったし、練習には手をやいたらしい。もちろんその中には私の小学校時代の親友も何人かいた。一方入部しなかった私はそれから2年間、当時“部荒し”といわれた一種族として音楽部、理科同好会、機械体操部、水泳部等々そこから中の部に籍をおいたり、首をつっこんだり浮気の限りであった。その間なんといっても校技だったから校庭で行われた対外試合は随分見せてもらった。三崎先輩（小柄でチョコチョコ走りまわる人という印象あり）がゴール前1mぐらいのところからシュートしてバーの上へ、ボールを出してしまったのを見て、なんとも器用なんだと、変なところに感心したり、3年上の吉田さんが相手に足をひっかけられて倒れ、そのままホイッスルを待って鳴らぬとみるや、ムックリ起きてビックも引かずまた駆けまわるのを見て、なかなかスマートな駆け引きをやると魅を感じたり、蹴球部にはいなかったが、この頃の思い出も結構ある。

この2年間、蹴球部に小学校の親友がいたこともあるが、不思議と親らしくできる友達も蹴球部の者が多く気も合った。2年生の後りの頃、彼等に口説かれて、かつどの部に入ってももうひとつピンとくるものがなかったので、私もその気になった。

長いイントロを書いたが、昭和14年3年生の春、ようやく私は蹴球部員に落ちついた。1年生のとき50名以上いた同級の部員はよくしたもので大半が退部して残っていたのは、保利、小野兄弟、土屋、海老原、河西、鷹尾、太田、飯倉の9人だけだったと思う。このうちたしか海老原（兄弟の中の一番上）は剣道部から私同様途中入部だったと思うが、あとは大量入部の生き残りだ。々たる連中である。今にして思えば香川先生の深謀遠慮は正しかった。海の者とも山の者ともわからぬ新入生から5ヶ年計画を実現するべき逸材を探すには、母集団を多くすれば歩留まりは悪くとも数は残る、という至極単純明快な論理を実行し結果はその通りになったわけだ。11人でやるサッカーで、どうにか使えそうのが、1学年で9人も残ったのだから大成功といえよう。

湘南出身の石原真太郎氏もなにかに書いていたが、人間には生れながらの性能があり、スポーツも例外ではない。天性の運動神経をもっており、ロクに練習もないのに（あるいは、そう見えるのか）、いくらこちらが真面目に、かつ努力を重ねてハードトレーニングをしても絶対にかなわないやつというのがいる。我々の仲間では保利がそうだった。彼は確か2年の頃から時々対外試合にも出ていたし、3年の時には4・5年にまざってすでに正選手になっていた。小野兄弟しかりである。こんな連中とポジション争いしたって勝てるわけもないし、どういうわけか小学校の頃からゴールキーパーをよくやらされており、自分でも性に合っていたので希望としてはそれをやりたいと入部のとき先輩に言った覚えがある。私の仲間もいずれ我々が最上級生になったとき11人全部を同級生で固めたいという遠大な野望で私の入部をすすめたのだから、キーパーをやることに期待していた。

しかし、さすがは歴史ある湘南蹴球部で、名伯楽たる岩渕大先輩は2～3回の練習で私の性格や性能を見抜いたらしく、一発確実なタックルに賭ける地味なフルバックや、玉捌きを必要とするフォワードにも向かぬと見て、ハーフのグループに入れられて、私の蹴球部生活ははじまったのである。

やってみて、ハーフバックのポジションは私に合っていた。自分がこうありたいとかこうしたいと考えるのも大事だが、人が自分をどうみるか、自分の知らぬ面を引き出してくれることもあるものだと、長い人生、職業・生活の節目節目でこの時のこと�이思い出され、行動の指針・活力となった。

さて、当時の5年生は田村さん（通称ヌルさん）をキャプテンに安保（ボクちゃん）、大塙（カンペイ）、樋口（なぜか男爵といわれた）、長島（ブーちゃん）、内田（タコさん）、市川（この人にはアダナがなかった）の諸氏が顔を連ね、すでに県下では相手になる中学は一校もなかった。この年の全国大会予選は横浜で行われ、サブでマッサージ屋も兼ねていた雑用がかりの我々も会場である六角橋の横浜専門学校（横専、通称ヨタセン今之神大）に日参した。この山神静大会でも向うところ敵なしで、当時コーチをやっていた前述の三觜さんが試合中、皆がむきになって点を取りに行き目一杯馳けまわるので翌日の試合が心配になり、サボレ、サボレとは言わなかつたがサガレ、サガレとどなつて徹底モーレツ主義の岩渕大先輩に大目玉を喰つていたような記憶がある。

それからあらぬか、これまた記憶に定かでないが、その後何時の間にか三觜さんは間遠くなりコーチは専ら湘南蹴球史に残る島田さん（ブクちゃん）になった。三觜さんとの接解は私にとってまことに短期間かつ間接的であったが、ウィングが逆サイドのボールにつられて中へ中へと入るのをいましめるために「ウィングは原則としてタッチラインの外にいるものだ」とか、前述のような指示をするとか、なかなかユニークかつ合理的な考え方の人で、それなりに魅力のある人だったが当時の風潮には合わなかつたのだろう。

いづれにしてもこの予選で勝ち、勝つのが当たり前と思っていたのかこの時は、あまり感激がなかつたが、当然の結果として甲子園にいった。宿舎はスポーツマンホテル。名前だけきけばどんなに立派なホテルかと思うかも知れぬが下宿に毛の生えたようなところだ。来てしまえば割りあてられた、わずかな練習時間以外、今の高校野球のようにどこかのグラウンドを借りて更に猛練習などということもなく、いたってノンビリしたもので六角橋以来急に流行りだしたノートラというトランプゲームかヒルネの連続だった。しかし大会がはじまって我々の記憶にのこることが二つ重つた。ひとつは青山師範との試合で起つた。当時師範学校は中学にくらべ年令が

2～3才高く、さりとて高等学校の仲間入りはできずということでなんとなく中等学校大会に出場しており、これが全国的に仲々手強く、とくに我々の頃は東京の豊島師範、青山師範などが強豪であった。この青山師範に日本有数の橋立という名レフトウィングがいた。試合がはじまって予想通りこれにかきまわされ、何度もハラハラさせられた。ハラハラの何度目かにまた球が橋立の上に上がった。追いすがったフルバックの長島ブーちゃんが一瞬遅れてヘッディングでせりあい、下りてくる橋立の顔とブちゃんの顔がすれちがった。ブーちゃんの眼鋭の角が橋立の眼の上を切り、彼は一時退場、当時は今のように選手交替は認められなかったから、しばらくたってホータイをグルグルまいて出てきたが戦力が激減で、そのためばかりではなかろうが目出度く青山師範に勝ったわけである。

もうひとつは準決勝での話。この話が出ると今でも当時者の田村ヌルさんは「その話はやめてくれ」というがこればかりは避けてとおるわけにはいかない。同点で延長戦、延長戦でも勝負がつかず、当時はペナルティキックによって勝負を決める大会規約ではなく抽選によるものだった。それもなかなか凝ったもので、両軍センターラインをはさんで一列に並び、キャプテンが真中にすすみ、ジャンケンをまずやって勝った方がコインの裏表を先に言う権利を待つ。そしてコインのトスで裏表の当った方が互の足元において封筒を先に選ぶことができるという三段構えの抽選で勝負を決めるのである。ヌルさんはジャンケンで勝ち、トスでも勝った。調子よくいったので逆に最後の封筒で迷い、気をまわしすぎて相手の足元のものを取ってしまった。実力ではなく運で勝負を決めなければならず、その全責任をキャプテンであるばかりに負わなければならなかった彼の脳中はまことに氣の毒のかたまり、迷うのも当然でそれをふっかけるようにグッと手を出した。帰ってから知ったのだがラジオでこの試合は放送されており、このときアナウンサーは、「田村君封筒をワシヅカミ」と言ったそうだ。かくして本番の封筒の中は負け、まことに割りきれない敗退で全員泣きに泣いた。宿舎に帰ってなおとまらず、先生や先輩も口惜しかったろうがもっぱら慰め専門だった。私などはサブで試合に出ていなかっただけにこの印象は強烈すぎて、抽選負けだけが頭にこびりついて離れず、長い年月の間に不思議なことに対する戦校の名前などすっかり忘れてしまった。最近50年史のためミーティングで相手校をきき、“あっそうだっけ”と思ったが今さら覚える気もない。確か関

西の聖峰だときいたが正確には本史の戦績を見ていただけばわかる。

これほど悲嘆にくれたがそこは10代の若者で、口惜しさは来年こそそのファイトに転換、ケロリとして練習にはげみ、放送の名調子「田村君ワシヅカミ」だけが残って、練習の後、誰かの差し入れの大福を我先きにというとき田村さんの手が出ると「オッ、ヌルさんワシヅカミ」など冷やかされていたのを覚えている。

当時の5年生の話から甲子園へと話は飛んだがもともどろう。

いくら小学校で多少教わっていたとはいえ、そんなものはあくまで遊びのそれであり、3年から途中入部した私にとって2年前から鍛えられている仲間に追いつくのは容易なことではなかった。

ライオンと畏敬をもってか愛称か呼ばれていた藤田大先輩は、私が入部した時にはすでに専任のコーチではなく、水戸高出身東大在学中の前述島田さんに専らシゴかれていた。岩渕さんはもちろん云うに及ばずである。今考えてみると不思議だなと思うのだが、私の知る限り湘南蹴球部にはコーチはいたけれど監督と言われる人がいなかった。実質的には岩渕さんが総監督だったのだろうが、ガンブチさん・ガンブチさんと我々は言ってはいたが監督などと言ったこともないし思ったこともないほど、彼は我々中学生にとって偉い人で、他の先輩から一頭抜けて雲の上の存在だった。当時30才を少し越えたぐらいの青年だったのだから、いかに我々が子供だったとはいえ大変な貫録、得がたい人材だったわけだ。

遊びのサッカーで効き足ばかり使っていた私は左足のキックがまったく駄目だった。神様の「菅原ッ、お前はいいと言うまで右足で球を蹴ってはいかん。」という御託宣で、入部直後から約3ヶ月右足が封じ足となった。神様は毎日のようにグラウンドに姿を見せていましたからごまかすわけにはいかない。話は飛ぶが、当時ガンブチさんは森永製菓に務めているときいており、子供心に「いつ会社に行くのだろう」と思っていたら、いつの間にか森永をやめられたと在学中にきいた覚えがある。もちろん他にも理由はあったのだろうが、サッカー途も大きなファクターだったのだろう。

いずれにしても右足を使えないのには参った。蹴ればチョロ、空ぶりで格構悪いことおびただしい。しかし私も意地っ張りだったし、習うより慣れろ、3ヶ月目には人並に左で蹴れるようになった。社会人になってから、やったことのない仕事や

不得意なものに挑戦せねばならぬ時、この経験は私に積極性を与えた。神様に感謝である。

さて、専任コーチの島田ブクちゃんは年もガンさんよりはるかに我々に近かったし、練習が終れば兄貴の雰囲気で我々に接してくれたし、我々も好き勝手のことをいわしてもらっていた。当時島田さんには北鎌倉に彼女がおり、練習帰りに帰路とはちがう横須賀線に我々と一緒に乗ってきて、ニヤリとテレ笑いをして、失礼にも先輩を冷かす我々を後に北鎌倉駅で下りるということが、しばしばあった。その彼女とはメデタク結婚されたそうだし、話も時効をとうに過ぎているので、ちょっと筆をすべらせてもらった。

ところがこの愛すべき先輩ブクちゃんも、ひとたび練習がはじまるとガラリー変、相当なモーレツコーチだった。彼はバック育ちだったので、特にハーフ、フルバックは徹底的に絞られた。彼流のタックルは彼自身背があまり高くなく、かつ重心が低いので、身体ごと敵の内懷に肩から入り、球を止めるとか、奪うよりむしろ相手の身体を止めるという独特的のスタイルで、まさに最近いわれる「サッカーは格斗競技」の先取りであった。

当時、湘南のサッカーは華麗なパスワークなどといわれ、ショートパスで相手をかわしながら、攻めこんでいく都会的スマートな試合運びで、力のサッカーではなく技のサッカーということになっていた。衿と袖口が白で布地が眼も鮮やかなライフルのワイシャツという今でも、おそらく粹であろうユニフォームを着た小冠者が、ひらりひらりと牛若丸ばかりに身をかわしながら球をキープしていくのは見た眼が派手なので、湘南の伝統的な特技などと、もてはやされていた。技はたしかに水準以上だったのだろうが、やむをえずこういう戦法に頼らざるをえなかつた弱みもあったようだ。最近当時の写真を見て驚くのだが、私も含め先輩の安保さん、仲間の小野兄弟、土屋、中学生というよりはまるで小供である。ボクちゃんといわれ、3チョビといわれるのもむべなるかな。ひよわな都会っ子そのもので、力のサッカーなど本人もできぬし、ガンブチさんも周囲を固めるコーチ連も期待できた筈がない。力と技で併せて一体なのに、今にして思えば、ガンブチさんもコーチ連もさぞや歯がゆかったに違いない。そういうえば練習中みんなよくガンブチさんに、ハネトバされたっけ。体力がないならないなりに少しでも競る気力をという訓練だったの

だろうが、とにかく相手にぶつからずうまくかわして（というときこえがよいが、逃げて）という考え方の抜けない我々へのウッパン晴らしもあったのだろう。

島田さんはその意を体したのかどうか。前述のスライディングタックルに加えてこれまた格斗技であるヘッティングの競り合いを徹底的に我々バック陣にたたき込んだ。我々はたたき込まれた。島田さんは秀才、無口で、コーチするときは最初に説明がありその練習がはじまると、ほとんど長々と補足説明することなく、こっちが説明通りにやらぬと「オイッ」とか「コラッ」とか「菅原ッ」とか、ドナルだけで、これがクドクド文句をいわれるよりよっぽどこわかったものである。

このころ、ハーフラインからゴールまでグラウンドの半分を使って、フォワードは攻撃専門、バックは守るだけという、ハーフマッチと呼ばれる練習がよく行なわれた。相手にぶつかることを教えこまれたせいか、競り合うことに恐れもなくなり、加うるに前述のような性格を持つ湘南フォワードは、このハーフマッチで対戦した限りでは威圧感がなかったように覚えている。ただし、ヒラリ、ヒラリと身をかわされて、はじめはぶつかるどころか球に足もさわらなかつたが……。安保さんなどはその最たるもので、どこに球が出るかわかつていながら、3年生の我々には手はもちろん出せぬ競技だが足も出なかつた。しかしインナーをやっていた大塙さんだけは他のフォワード連と異り物凄い威圧感があったのを覚えている。他の連中とのお手合せから持つた、フォワードはブツかってこないものという平均的考え方の大塙さんには全く通用しなかつた。大塙さんは後年湘南サッカー部のヘッドコーチをされていたので、私よりずっと後輩の戦後派部員も、その人となりをよく知っている方が多いと思う。彼が何を教えたのか私は知らないが、現役当時のカンペイさんは、バックをよけずにその足もとに球を出し、自分からさきにバックにブツかつて來た。サッカーは格斗技であると最近よく言われるが、40年前から先取りして率先垂範していたのだから大したものだと思う。戦後派部員も恐らく、そういう斗争心をたたき込まれたのだろう。

練習といえば当時甲子園の全国大会が終るまで部員には夏休みがなく、酷暑の中、朝から夕方まで毎日毎日猛練習の連続で、しかも学校が夏休みなので諸先輩が群れをなしてしごきにきた。私が17回卒業ということは、第1回生でも当時、32～33才、今のように60を超えた先輩から昨年卒業した先輩などというような生易しさで

はなく、そのほとんどが高等学校、大学の現役で一緒になってグラウンドを駆けまわる先輩で、身体で我々を教えてくれた。すでに伝説となった諸先輩のプレーにじかに接し、その球を受け、伝統はこうして受けつがれたのである。4年先輩の小熊さんの有名な日本一といわれた、ブレースキックを見、ライナーで全然回転せず横にゆれながらあたかも、野球のフォークボールのように飛んでくる球を受け、どうやればああいう球が蹴れるのか一生懸命考えたものだ。彼は無口でほとんど後輩に教えるということをせず黙々とグラウンドで球を蹴っていたが、他の先輩に「あれは、インステップキックで足首が球にインパクトしたとき、さらに足首のスナップを効かせるステップキックだ」と本当かウソか説明されて、その気で工夫した。彼にはおよびもつかないが私なりのステップキックを会得し、以来私のキックはプラス2の力によって、すくなくとも10mは距離が伸び、逆サイドへのクロスパスがどうしてもウィングにとどかなかったのがとどくようになった。もっとも左のウィングをやっていた小野(兄)は回転しないでフラフラとゆれ、ストンと落ちる私のパスを受けにくいとこぼしていたが……。今でも私の足の甲には力を入れるとピョコンと飛び出す、私流ステップキックで鍛えた三角の筋肉が残っている。こういう練習で先輩から教えられたものを書いていたのではキリがないので省略させてもらうが、今でも懐しい思い出として残っているのは猛練習の相間の休みのことである。校舎からグランドに向って右側の土手(今は部室らしい建物が建っているが、当時は陸上競技部と蹴球部で使っていた堀立小屋以外なにもなかった)が木蔭になっており、そこに坐ってヤカンの水を飲む以外なにもなかった休み時間だが、この時の諸先輩の話が抜群に面白く、まだ経験しない高校大学の話、かっての試合の話、仲間同志の曝露話等々サッカーのプレー同様各個人性あふれる話術でアッという間に時間が過ぎ、時には御大ガンブチさんまで話に身が入り休み時間延長などということもあった。

何度も書くようだが、こうして湘南カラーという伝統か、性格か知らぬが、そんなものが我々の時代には知らぬまに受けつがれていたのだろう。近年在校の現役がバッとしないとよくきくが、当時の先輩のありようからみて、我々に責任なしとはいえないようだ。特に若いOB頼むぞと言いたい。

さて、私の初陣は入部後わずか一夏の洗礼を受けて間もない昭和14年秋だったと

思う。当時ジュニアのイベントとして県下には少年部（3年生以下）の対校試合があった。第一戦は横浜の高台にあるなんという中学か覚えがないが、ウッソーとした木々に囲まれたなんとなく陰気なグラウンドで、対戦相手も忘れた。私はこの初戦でなんといきなりチームの要ともいうセンターハーフをやらされた。同期161の保利が出られなかったからである。彼は上手かったが足クセが悪く、その後ものべつ豆をつくったり捻座したりしていたが、確かこのときは、雨の練習で体育館で相撲をとて鎖骨を折った後だったと思う。とにかく故障の多い男だった。なにはともあれ試合ははじまった。私は初陣なのにまったくあがらなかった。オレがへまつてもまわりの仲間は全部オレより上手い。なんとかしてくれるだろうと気楽に考えたのがよかったです。やむをえずこんな私をセンターハーフにすえなければならなかつたガンブチさん的心配をよそに、この楽な気持が幸いしたのか自分でもいうのも変な話だが、惜しくもバーに当って得点にはならなかつたいいシュートなどもあり結構活躍したらしい。奥さんと見にきていたガンブチさんは、一番心配していた未知数の私が、それなりに及第点をとったのが余程嬉しかつたとみえ、奥さんの持っていたリンゴを一ヶ持つて来て「よくやつた。今日の殊勲賞はお前だ。リンゴ賞をやる」といつて私にくれた。以後しばらくその試合でもっとも出来のよかつた者がリンゴ賞をもらう慣例が続いたが、その第1回はわたしだつたわけだ。

この年の少年部は前述5ヶ年計画の我々3年生で固めたにもかかわらず、結局小田中に負けて優勝できなかつた。負けるはずがないと思っているうちにズルズルと時間がたち、気がついたら負けていたというような試合だったので口惜し涙もせず、母校のグラウンドでの戦いで、勝つにきまつている試合に負けた格構悪さだけ残つた。一方勝つた小田中は大感激。なにしろ湘南は当時県下無敵で、ジュニアとはいひその湘南に勝つたということで、実際私等と同年の小田中選手にはよいプレーヤーがいたが、この3年生が最上級生になるまでに、あわよくば打倒湘南も夢ではないと考えたのだろう。期待はずれの我々はこつてり油を絞られたが、この借りは翌昭和15年立場をまったく逆にした。敵地小田中グラウンドに乗り込み、キレイに返した。いや、あまりキレイではなかつたが、とにかく返した。このときも2対1かなんかで最後の5分（もしかすると10分だったかも知れぬが話を劇的にするために）まで負けており、小田中はイレブン、応援団とも9分9厘勝ちと考え、少年部の優

勝が予想通り一軍の打倒湘南につながったと思ったようだ。ところがタイムアップ5分前、4年生になってどうやら正選手となり右のハーフをやっていた私が、フォワードからこぼれた好球をロングシュートした。これがバーに当りハネかえったのをセービングで抑えこんだキーパーごと保利が強引にゴールに蹴りこんだ。今なら当然反則だし、当時だって抑えているとわかっているのを蹴れば反則をとられたが、バーに当った、ハネた、抑えた、蹴ったというのがほとんど同時だったので、笛は反則に鳴らず得点に鳴った。足クセの悪い保利に蹴られてキーパーは眼の上を切り、以後眼がよく見えず、難なくもう1点とって我々の逆転勝ち、血だらけのキーパー、そのための逆転負けで地元小田中の応援団が不隠で、試合後むこうが立ち去るまで敵地グラウンドに一塊りになって残ったのを覚えている。

ようやく話が昭和15年4年生になったところまで来た。すこし先をいそがなければ……。田村、安保、大埜、樋口、市川、長島、内田、松岡とフォワード、ハーフ、フルバックの主戦力がごっそり卒業し、新5年生はキャプテン小能弟、フルバックの戸沢、キーパーの奥本の三氏が残るのみで意外に少く、あとは4年生の我々と3年生の早川(兄)で新チームを組むことになった。私が入部して1年の間に鷹尾、飯倉が病気で脱落し、同期は8人となった、フォワードが左から小野(兄)(4年)、土屋義(4年)、早川(3年)、小野(弟)(4年)、海老原(兄)(4年)、ハーフ左から河西(4年)、小熊(5年)、菅原(4年)、フルバック戸沢(5年)、太田(4年)、キーパー奥本(5年)の布陣だった。とこう書いてみて、おかしなことに気づいた。我々同期の中でもっとも上手く戦歴も豊富な保利が抜けている。彼は大きな戦力でない筈がないのにどうしてもそのポジションが頭に浮ばない。いろんな試合を思い浮かべると、たしかに彼のプレーが眼に浮ぶのだが、ときにセンターフォワードの位置でのプレーであり、あるいはインナーのプレーが思い出されたり、センターハーフだったような気もする。要するに試合中グラウンドのいたるところにいた印象が強い。今のリベロよりもっと広範囲に、時には無責任に動きまわっていた形跡があるが、もしかすると早川がセンターフォワードになったのはもう一年後だったのかも知れない。これも正確には本史の戦績資料をみていただきたい。

いずれにしても強力な5年が大量に卒業し、新チームは昨年まで少年部だった4年生を全部使わなければならず、ガンブチさん、島田コーチ、他の先輩も頼りなか

ったに違いない。新学年のはじまる前、すなわち春休みから島田流猛練習開始である。しかし、案ずるより生むはやすしで、新陣容もまんざら捨てたものではなかった。当時県下の試合は春秋2回あり、春はリーグ戦で各校総当たりの（考えてみれば中学校はさらに少なかったからリーグ戦などできたのだ）新チーム打診戦、秋がトーナメント試合であった。リーグがはじまつたら結構前年同様フタケタ得点の試合もあり、それなりに湘南蹴球は依然県下ナンバー・ワンだった。考えてみれば相手校も旧5年生が卒業しているのだから当り前の話だが、中学という成長期での一年間は、他の年代での3年～5年に匹敵する。3年から4年になった我々も、諸先輩の心配をよそに人並になっていたのだろう。

私達の2年後輩に田村（弟とか千種とか）、直後の蹴球部を背負って立つ連中がいたが、私の在学中は2～3年の小僧っ子で身体も小さいし、田村などはその小さな身体で無理して球を遠くに飛ばそうとするものだから、足にばかり力が入って腰が残り上体がくの字に前屈する一種独特のキックをしている頼りない子供（自分も子供だったのを棚に上げて）の印象しかなかった。後年私など及びもつかぬ全日本の名選手となり、ホルモンタンクかビタミン小僧のようなバイタリティあふれるプレーなどを見ている人には想像もつかないだろうが、先輩後輩の関係はそんなものだろうし、この年令での成長の速さもまたこんなものなのだ。案ずるより生むがやすしなのである。

県下春のリーグはかくして難なく優勝し、全国大会予選は甲府で行われた。今の人達には説明しなければわからぬだろうが、軍国主義のあのころは中学以上の学校にはすべて軍事教練という兵隊さん教育課程が正課として課せられ、陸軍から配属教官が各校に来ていた。甲府の山神静大会の直前、我々4年生は、その教練の年間における大きなイベントである野外教練（要するに戦争ごっこ）のため富士の裾野に来ていた。たしか一週間ほど演習地の兵舎に泊ってしほられる行事だった。蹴球部長（この当時すでに名物男香川先生から、次の名物男浅沼先生にバトンタッチされていた）の取りはからいで、我々8人は大会のため、1日か2日でこの苦行から解放された。配属教官は国のための行事から、たかがスポーツのために抜け出す我々が小面憎らしかったのか、その1～2日他の連中に倍ましてしほられ、解放の朝恩きせがましく、長々と訓示をたれられた。とにかく教練はサボった。サッカーさ

まさまである。

話はまたとぶが、春のリーグ、山神静大会、夏の全国大会、秋のトーナメント、明治神宮奉納全国大会（今の国体の前身）、全関東選手権と一年を通じほとんど毎日曜試合のあった我々蹴球部員はその毎日が蹴球ドブズカリで周囲からはセミプロといわれたいた。多少強いのをよいことに、日曜の試合のための強化練習に名を借りて、教練武道などの授業を合法的にエスケープし、好きな蹴球を楽しんでいた日頃の我々を苦々しく思っていたせいか、蹴球部員とくに我々学年は教練武道の教官に信用がなかった。

甲府では夜の宿屋に思い出がある。試合前に体調をくずしたら大変ということで、夜遊びは厳禁、アイスクリームは食べるな買食いはするなと生活の規制がウルサかった。宿屋の2階住いで、夜な夜な真下の道路に唐もろこしの屋台が出る。宿屋から出れば夜間外出、唐もろこしを買えばまた規制にふれる。焼いた唐もろこしとショーユのにおいはジカに2階にあがってきて、育ち盛りの我々には我慢ならない。一計を案じて菓子の空箱にヒモをつけ、一文をカネを入れ2階から下す。心えた屋台のオジサンかオバサンは箱の中に唐もろこしを入れてくれる。これを引きあげて部長、コーチの来ない間に大いそぎで食べるのである。どうやれば唐もろこしを早く食べられるか、などと愚にもつかぬ議論に花を咲かせながら……。楽しかった思い出である。

余談であるが昨今高校野球の美化運動が進み、なんでもかんでも球見を青春の純情シンボルにまつりあげる風潮はヘドの出るほど不愉快だし、恐らく心ある本人達はもっと不愉快だろう。我々は確かに人一倍練習をした。終って校舎にもどる階段を這って登った経験もある。試合になれば勝つための事だけしか考えなかつた負ければ時に涙も出た。しかし以外の生活、ときには試合の相間にすら我々はもっと人間味があり、未熟な青春を楽しんでいた。惡もやり、規制をかいぐり、いたずらもし、女の子にちょっかいも出した。それが青春である。ここまで書いて思い出した。名前だけ本文前半に出した内田タコさん。鎌倉在住で通学時大船乗りかえの東海道線、混むので2等車（今のグリーン車）に乗り、他にもそういう人が沢山いたので、デッキから室内にあふれた。本来の2等車の客が混んだデッキから室内に入ごみをかきわけて入って来た。誰かに足をふまれた。その客の虫の居所が悪かった

らしく「2等に乗るのはけしからん」とか「靴をふんであやまらんとは何事だ。汚した靴をふけ」とか、クドクドと説教をはじめた。後から声あり「靴の裏でふいてやれ」。ユーモアあふれるこの発言がタコさんであった。相手が悪かった。コチコチの視学（学校を監督する職）で、しかもその日湘南を視察にくる途中だった。早速赤木校長が油をしぼられた。翌日全校朝礼の段上この話が校長からされ説教をくったが、ユーモアを解する全校生徒の爆笑が起り、同じくユーモアを解する赤木校長の説教も迫力なく「それにも関わらず靴の裏でふけとは、うまいことを言ったものだが、今後は視学でない人にやってくれ」というはなはだしまらい、かつユーモラスな結びだったと記憶している。このタコさんはサッカーそのものでも逸話が多く、真偽のほどはわからないが、先輩に「キーパーは飛び込んでくる相手をナグルくらいのファイトがなければいけない」といわれたら、本当に相手を試合中ナグってしまったという話もある。幾星霜へて今でもタコさんとはつきあいがあるが、神格化できない、こういう青春を通り、人生を歩いてきたところに彼の魅力がある。

閑話休題、この大会での試合はあまり楽しいものではなかった。山にかこまれた山梨県の閉鎖性か、静岡の代表とやるときはまだよかったです、地元山梨の中学校との対戦は応援団がヒイキのヒキ倒しで不愉快この上もなかった。こちらが負けていればどうということはないのだろうが、そうはいかないから始末が悪い。狙われたのは敵陣深く押しっぱなしなので一人ポツンと取り残されたキーパーの奥本さん（愛称なぜかオペチョ）と、どういうわけか私。いや私にはそれなりの理由があった。私は練習は自分で言うのもおかしいが割合真面目にやる方だが、試合では私流に判断し、山を掛け、足らざるを声で補い、一見要領のよい手抜きサッカーもやった。この大会でも相手フォワードの要となる選手に狙をつけ、まず最初にガツンとナメられないように足をゲズリ、ヘッディングではジャンプ力では自信がないから、あえて競り合わず、相手がミスったとき球の落ちてくる場所に先きまわりする。むこうのフォワードが球を持ち、さあ攻撃というときに奪った球をポイとサイドに蹴り出す、相手の出すパスを蹴るやつの眼をみていて、山勘でそちらに駆けていってカットする。こういうやり方も3度に1度は成功する。私なりの工夫で手抜きだけではないのだが、相手チームから見れば、小馬鹿にされているように見えるらしい。しかも悪いことに、サイドハーフは、ライン際に居る。オペチョは石を投げられた

らしいが、私はラインサイドにいた応援団に「試合が終ったらちょいっと来い。」などとおどかされた。こういう雰囲気に浅沼先生などもピリピリして試合場、宿屋の往復は常に全員一緒の行動というように保護者、ガードマンつきだった。

この予選大会に優勝した私にとって2度目の甲子園全国大会、今度は正選手としてだった。4年になってから負けしらずで、全国大会でもいい線までいくだろうと思っていたが、どっこいそうはいかなかった。緒戦の相手が京都だが滋賀県代表の養成普中。名門ではなく聞いたことのない学校だった。よく聞くと韓国人の学校で、これも後からきいて知ったのだが、それまでいろいろの事情から韓国人の中学生は全国大会に参加できなかったのが、この年昭和15年から出場できるようになったのだとのこと。知らぬも道理である。試合が始まって驚いた。キック・アンド・ラッシュの縦パスで体格のよい（どうも2～3才日本の中学より年をくったのがいたらしい）のが、飛びこんでくる。こちらも島田さんにたたきこまれた格斗技の気力はあったが、球のほとんどが空中さばきで、ぶつかりようもなければ、足をケツるチャンスもないまま、1回戦であえなく敗退してしまった。小枝の効かない相手だった。今に続く韓国式サッカーの洗礼を我々は40年も前に受けたわけだ。

秋がきた。小熊キャプテン以下この敗戦で小枝のシュートパスや牛若丸だけでは駄目となんとなく感じ、言わず語らずのうちに練習法も試合運びも変ってきた。過渡期みたいな時期だったので県下トーナメントの試合もモタモタした。島田さんの言うことも全面的にはきかなくなってしまった。なにがキッカケだったか忘れたが島田さんが来なくなった。我々はコーチのいないグラウンドで中距離からのシュートばかり練習していた。湘南蹴球部員に鎌倉の者が多い話を前に書いたが、藤沢以西の名選手も結構いる。だが昭和15年のレギュラーはすべて藤沢以東しかも太田が横浜なのを除き、残りはすべて鎌倉在住だった。練習の終った後も行動は一緒だし、なんども私の同期7人は鎌倉七本槍（今ならさしづめ七人の侍か）と称して休日もほとんど一緒にすごし、海岸や河西の家の近所の和田塚の空地で球を蹴って遊んでいた。お互の気心は十分すぎる程わかっており、各人のクセも先刻御承知で、ワークの練習などしなくとも、試合になればこちらの球を出したいところに必ず仲間が待っており、出そうと思う前にそこから声がかかり、走ってくれた。校庭での練習の大半は、いくらコンビネーションがよくても点をとらなければ勝てない、その

得点のためのシュートに費したのは今でも正解だと思っている。

冬の全関東大会で我々は湘南蹴球部初の優勝をした。華麗なパスワークとはほめられず、主催の朝日新聞がアサヒグラフか忘れたが「球ばなれしたよいシュート」とほめられた。我々が満足したが、先輩は禦しがたき現役と苦笑したかも知れない。あるいは見捨てた形をとって我々の奮起を期待したのか。多分そうだろう。蛇足ながらこのときの決勝戦は対明倫中学で、これは関東における韓国人中学。キック・アンド・ラッシュ空中戦に今度は負けなかった。間接的に夏の甲子園での勲をとったわけである。

霜どけでグチャグチャの神宮競技場での全関東は、その年度のチームの試合納めで、翌年4月新学期チーム結成まで試合はない。昭和15年度チームは5年生は少なかったがその統制よく、全関東初優勝で有終の美を飾った。一年を通じどれだけ試合をしたかは忘れたが、負けたのは前述全国大会での養成・神宮大会での明倫、この2敗だけだった。私のサッカー生活でもっとも充実した一年だ。

明けて昭和16年、我々が最上級生となった。小熊、戸沢、奥本各氏と卒業生はわずか3人。かわりに4年生になった。名センターフォワード早川(兄)、フルバック海老原純、キーパー川口が入っただけで、さして戦力に変りはない。むしろ5ヶ年計画の我々が1年の経験をプラスして5年生となり、戦力はアップ、いよいよ念願の全国制覇と我、人ともに思ったが、そううまくはいかなかった。去ったのはわずか3人だったが、今にして思えば直接戦力に關係しない面で蹴球部は貴重な3人を失ったのである。

戦争直前の厳しい世相の中にあっても我々17回生、7人の侍は、自由にあこがれ、各々の個性を尊重し、自分の主張を持ち、他からの精神的束縛をきらう湘南っ子、鎌倉っ子特有の性格を持ち続けていた。一見てんではばらばら、すき勝手の行動、発言を適当に抑え、表現を変えてガンブチさんや他の先輩に話していた。いわばダンパーの役、統制の役をこの3人が果していた。それがいなくなったのだから大変なことになった。しかも我々には一頭抜きんでる統卒者がいなかつた。練習法、練習時間、練習日、合議できめガンブチさんの言うことすらきかなかつた。大先輩と直接に接するようになって事態は段々深刻になり長くはもたなかつた。

昭和16年はあの太平洋戦争が始った年で、日本にとって歴史的な年だが、我が湘

南蹴球部にとっても歴史的な事件を我々が起こした。一学期の終り初夏の頃、あの神様のような存在だったガンブチさんに面と向って造反したのである。40年前のこととで直接のキッカケは定かでないが、なにか休みの日の練習スケジュールに関する件だったような気がする。我々には別の予定があったので出られない、出ろの応酬からガンブチさんも業をにやしたのか、心身の鍛錬とか、学校のためとか、義務とか言う言葉がポンポンと出て来た。当時の風潮としては当り前の言葉なのだが、前述のような考え方をしていた我々は、ひどくこれにこだわった。その場はなんとかつくろわれたが、その後、皆で集り面と向っては貫禄の差で仲々我々の考えていることが言えぬから手紙を書いて出そうということになった。私が書くことになった。皆の意見をメモし長い手紙を書いた。「我々は好きで蹴球をやっているので、心身鍛錬のためにやっているのではない」とか、「蹴球だけが人生ではない」とか「別の予定がたとえ些細なものでも、先約は優先する」とか若気のいたりで相当激越な調子で書き「貴方の考え方にはついていけない、我々は我々流の練習をする」ぐらいのことで結んで出した。これを受け取った岩渕さんのショックは大きかったようだ。笛ふけど踊らず、どころか飼い犬に手を噛まれたなどというよりもっと予想もできぬ造反だったのだろう。大さわぎになった。浅沼先生に呼ばれ、駆けつけた先輩に説教され、手紙を書いたため主謀者と目された私は特に風当りが強かった。一人づつ口説かれ、練習に出なかった者も一人づつ戦列にもどったが、私は意地を張り通して蹴球部をやめた。その後、秋になって選手の故障から田村さんに口説かれて一度応援で試合に出たことがあるが、意識的に蹴球部から遠ざかり、湘南の校庭で行われる試合すら見なかった。ヤセ我慢だった。だから仲間のガールフレンドがズラリ応援に行った大接戦劇的な海老原謙のヘディングシュートによる全関東優勝も話にはきくが見ていない。

卒業式のとき運動部で活躍した卒業生には体育功労賞のようなものが出て表彰されたが、そういう事情で私は表彰されなかった。5年になってちょこっと国防競技などというのに出た者が表彰されたりしたので仲間は私に同情したが、学校も尻の穴が小さいことをする。という怒りは感じたが、不思議と羨しさは感じなかった。ヘソ曲りの意地から蹴球部入部が2年遅れ、意地で退部も1年早かった。わずか、2年ちょっとの部生活だったが充実していた。以来20年以上たち、子供が小学校の

頃、当時のO B が集って鎌倉で子供のサッカー教室がはじまった。懐しい顔ぶれで旧交を温め、また球を蹴りはじめ、もう12~13年球蹴りを断続的にやっているが、わずか2年の青春時代の部生活の方がはるかに長かったように感ずる。やはり充実していたのだ。

最後に……。岩渕さんとの冷戦は私が社会人になってからも長く続いたが、年をとり、人を使う立場になり、若者を鍛える場で、彼の心情が痛いように解り、当時の自分の考え方は間違ってはいないと今でも思っているが、若気のいたりで物の一面しか見えなかつた未熟さを思い知った。彼の還暦の宴で私の気持を伝え、何十年ぶりかで胸のつかえもありた。そのガソブチさんも、もういないが、湘南サッカー50年史の裏表、どこを切っても彼と彼の影響のないところはない。まさに巨人である。

最初に断わった通り、独断と偏見に満ちた昭和12年から16年の裏面史といったが、やはり自分の在部した2年間が主となってしまった。この5年間、名前が出てこなかつた方々も結構あるが、忘れたのではなく紙数が足りなかつたからなので平にご容赦願いたい。

*40回 全国高校サッカー選手权大会

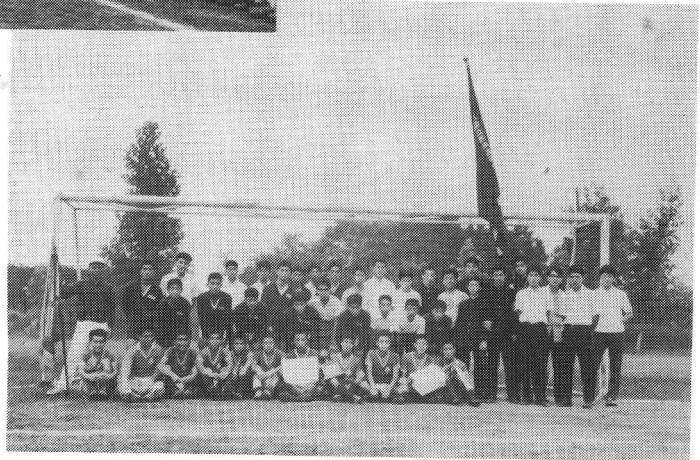
優勝・修道高校



第40回－全国高校サッカー選手権大会



第17回国民体育大会出場 (昭和37年)



40年関東大会優勝
(表彰式・メンバー)



1965. 6. 20 湘南中学サッカーOB会 於洗心亭新館



昭和16年岩渕氏海南島行き壮行会



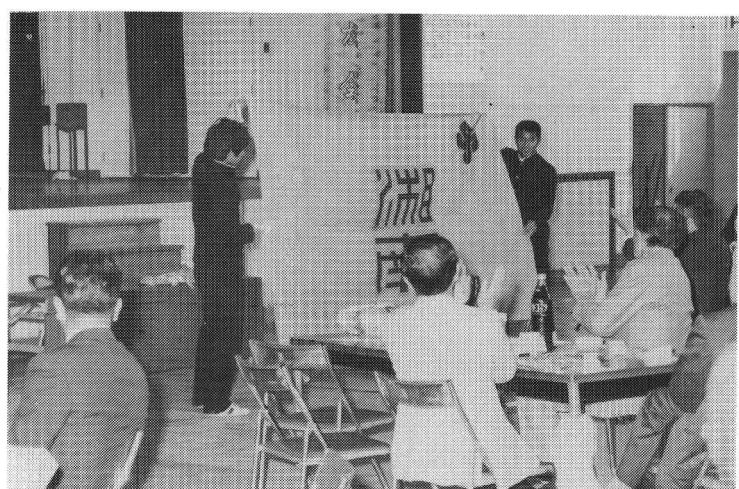
昭和46年4月湘南グランドにて



昭和18年
湘中グランドにて



昭和55年 岩渕二郎を偲ぶ会



偲ぶ会で岩渕夫人より寄贈された部旗

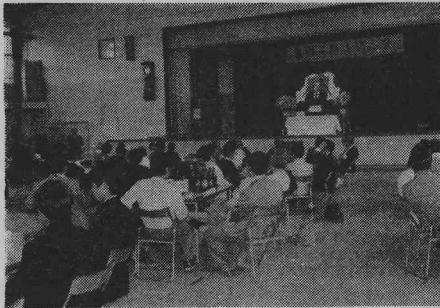
岩渕二郎追悼の部

「蹴球院殿快足得点居士」

これは故人が生前にご自分でつくられた戒名です。合掌。



岩渕二郎先生還暦記念サッカー 1969.9.7 於湘南高校



安保君(15回)・小泉君(37回)を中心として準備を進めて来たO・B会が5月18日(日)午後、母校を会場として行事をくりひろげた。集まるものの百余名、岩渕君が深く関つて來た藤沢・神奈川四十雀(40才以上)のサッカーラブ)の方も参加し、岩渕夫人も大きな遺影とともに臨席された。試合に先立つて黙禱をささげた。

第一部は試合。雨は上がったが、方々

サッカー部O・B百名參集

岩渕先生を偲ぶ会

に水たまりの残るグラウンドで、往年の名選手が妙技を披露して、スタンドの拍手を浴びた。

藤沢四十雀 2-1-1 湘南超O・B

神奈川四十雀 2-1-4 湘南超O・B

第二部『偲ぶ会』は会場を体育館に移して行なわれた。壇上に飾られた遺影は、晩年の温容。安保君の経過報告と、記念誌の発刊予告のあと、天野O・B会長のあいさつ。会長が代表して献花し一同黙禱。藤沢四十雀の瀬戸氏、前部長の宮原先生、鈴木現部長の思い出話。岩渕家からの寄贈品の披露があって、夫人から現役部員にサッカーブ旗とユニホームが贈呈された。懇談会に移り、6回生の駒崎・藤田君、札幌からかけつけた7回生の山中君。次いで往年のオールニッポンの選手で湘南の全国優勝の折のコート大野君(15回)の戸沢君。国際審判員小林(旧早川)君。全国優勝の折の選手(6名出席)が紹介され、代表して主将香川君が、そして小田島君(25回)。母校のコートをつとめた柳川君(27回)らの思い出は、岩渕さんを生きと描き出し、また数々の教訓が披露された。関東地区優勝の折の選手(6名出席・41回生)の紹介。3回中村君の閉会の辞のあと、蹴球部歌・校歌を齊唱して6時半散会した。

湘友会報より

年譜

明治42年8月27日、北海道北見市に生れる。本人病弱の故を以って鎌倉へ転居し、鎌倉第一小学校を卒業して、大正11年、湘南中学入学。関東大震災の後、東京大岡山へ転居するも湘南中学に通学する。ここでサッカー人生が始まる。

以下、昭和52年5月10日の朝日新聞「サッカーのガンさん退職－50余年のシゴキ懐かし」という紹介記事の抜粋をすると…

「ガンさん。」悪口をいうときは「ガンブチ」本名を岩渕二郎という。神奈川県の湘南高校サッカー部を指導して50余年。67才。竹腰日本サッカー協会顧問らと並んで「日本サッカーの三奇人」の一人といわれる。そのガンさんが本年3月で同校教諭を退職したのを記念して、今月29日、同校OB会がある。サッカーに魅せられ続けた人生だった。初めてサッカーを知ったのは大正12年。関東大震災の年までさかのぼる。創立3年目の湘南中学2年生。初代校長赤木愛太郎氏の方針でサッカーを「校技」にしようとしたが実際に競技を知る教師は居なかった。そこで校長は当時、旧東京高師の主将、小野徳四郎を湘南中学校に招く、「雨天体操場でeruleの講義を受けまして、ぶつけ本番の試合をしました。ボールを手に持たないで蹴る。小野氏がやるとボールが思う方向に自由に飛んでゆく、まるで手品みたいにこいつにすっかり驚いちゃいましてね。」ただの魅せられたではなかった。

2年後、ガンさんを中心にして初めて対外試の正式メンバーが出来たあとはガンさんの「五ヶ年計画」が始まる。「私は威張ってましてねえ、ということを聞かない同級生はどんどんクビにして、1、2年を中心にして鍛え直したわけですよ。卒業して横浜高商へ入ってからも一年『計画留年』として湘南中学のサッカーばかりみてました。」湘南出身で東大の選手だった天野武一氏らの応援もあって、湘南は急速に頭角をあらわし、昭和5年には県内で初優勝、昭和12年、14年には全日本甲子園大会出場、全国第3位、昭和21年の全国優勝、昭和23年の全国第2位を含め湘南サッカー王国は神奈川のトップの実力を備える、ガンさんは一時会社に就職して学校を去るが、昭和28年湘南の英語教師として戻った。「サッカーをどうしてもやりたくて」と定時制を受け持つ。コーチぶりはすさまじかった。選手がミスをするとポケットの小石が飛んでくる、噛みつかんばかりにどなり散らす。ほめ

ない、というのがガンさんの方針である。「おだてないとダメなのは、どうせダメですからね。選手たちからは随分憎まれていますね。その方がずっと気楽でして。エゴが強いんでしょうかねえ。サッカーの理論は世界共通だが選手の個々の能力はマチマチなわけでしょ。それをいかに生かすか、動かすか。これが魅力なんでしょうね。」退職後のガンは悠々自適というわけにはいかない。「予備校の教師を引き受けましてね、そのかたわら湘南サッカーをみなくちゃ。私の眼の黒いうちはずへと……。」以下略。

湘南サッカーの指導のかたわら、藤沢市蹴球協会を創設し、理事長、副会長をつとめ、県高体連サッカーチームの幹事、第18回オリンピック大会蹴球競技役員、神奈川四十雀サッカー会長等々サッカー関係の要職を果され、自らプレイされ、関東四十雀サッカー大会を発足させ、北海道にも遠征される活躍振りで、オリンピック委員会、日本サッカー協会、関東サッカー協会等からの表彰状の授与も多い。

湘南中学創生期から新制高校の今日に至る、昭和5年より54年までの長い期間にわたり、練習のグランドは勿論のこと、湘南チームの試合のある処に必ず岩渕さんの姿があり、国立競技場、甲子園、西宮、大宮、水戸、千葉、藤枝、京都と全国にわたり、又OBの試合にまで殆んど応援や指導にかけつけて居られたことは誠に敬服至極でありました。そして50年に亘る各チーム、個人個人のプレーを克明に記憶されていたことは又驚くばかりでした。またOB会では70才の最後までユニホームでプレイされた比類ないサッカーマンがありました。

昭和40年頃より糖尿病を発症しながらも、元気でサッカーを楽しまれて居られた処、昭和54年頃より腎臓病を併発され、昭和55年3月4日、入院先の横浜国立病院にて、尿毒症の為、急逝されました。

3月6日、辻堂の御自宅でお通夜。7日告別式。葬儀委員長は湘南サッカーOB会長の天野武一氏でした。

弔辭

故岩渕二郎先生の御柩の御前に謹んでお別れの言葉を申し述べます。

岩渕さん、最近急激に健康を害しておられた貴方は、ついに去る三月四日の真昼、
国立横浜病院において惜しくも生涯の幕を閉じてしまわれました。

明治四十二年八月二十七日のお生れと承りますから、満70才と6ヶ月足らずの
御一生であったのであります。いま、私はどうしたわけか貴方が御父上に伴われて
鎌倉の小学校から旧制の湘南中学に二回生として入学された頃の、少年岩渕君の姿
を瞼に浮べております。どうしてその姿が目に浮ぶのか私には思い当りませぬが、
私の戦死した弟がやはり貴方と同年で、湘南中学の同級生であり、共にサッカーに
興じていた仲間で、互いに仲好くしていたので、その頃から貴方の男らしい友情が
終生忘れられず、私の受けた印象の強さが然らしめるものとしか考えられませぬ。

貴方が昭和のはじめに、当時の横浜高等商業学校を卒業して、森永製菓会社に入
社されて以来、いく度か任地や勤務先を変えられたことを承っておりますが、戦争
となってからいわゆる一年志願の陸軍小尉として軍務に服し、支那大陸に出征され
たこともあり、戦後には御郷里の宮城県で父上が亡くなられた関係で暫く貴方も宮
城県でお暮しになり、農業高校で教鞭をとられたりして後、母校湘南高校の迎える
ところとなって、ここに安全の地を得られ、後輩の教育に当られるとともに、サッ
カーの指導に叱咤激励する元気な声を聞かぬ日は無いようになったのでありました。

昭和三十七年以降は、ただ今の茅ヶ崎のお住いから御通勤を続けられたわけであ
りますが、昭和五十二年老令の故をもって御退職の日を迎えてのちも、サッカーと

聞けば必ずグランドに馳せ参じる御様子で、現に私は、本年一月十五日の成人の日における湘南高校のサッカーの集りで御一緒になりました。

このようにして貴方の御生涯を貫く生き甲斐としてその人生を強く太く捉らえて放さなかつたものは、貴方が母校、湘南サッカーを中心の拠り所としてサッカーに捧げられた献身的な情熱であったのであります。

貴方の在るところ必ずサッカーあり、貴は正に、湘南サッカーの感動的な象徴がありました。このような貴方のサッカー熱は見事に多くの優秀な後輩を輩出させ全日本的な名選手や斯界の指導的な人材を生むに至りました。

母校のサッカーOB会はもとより、藤沢サッカー協会、神奈川県サッカー協会、全国四十雀サッカー協会など貴方の関与されたサッカーの団体は数多くあります。これらの関係各位はそれぞれの想いをもって貴方との御永別を惜しみ、本当に御苦労様であったと感謝申し上げておられます。

貴方は今から三十年も前の試合の想い出を語るときも選手一人一人の動きをよく記憶していて、誰がどのようにプレーし、ボールがどのような経過をおってゴールに蹴り込まれたかなど手にとるように復元して見せるので、これに驚いた人は少くありません。貴方の指導を受けた後輩たちは、貴方が明治の人間らしく頑固で厳しい指導をしたと申します。貴方のことを「ガンブチ先生」と呼ぶ愛称はそこに生れました。しかし、私の知る貴方は実に心のやさしい人でした。

個人的なことで恐縮ですが、戦時中から戦後にかけての食糧難の頃、貴方は突然、

郷里から持って来たと言われて、白米を自ら私の家の者に届けて下さったことがあります。家人は今もそのことに感激して居ります。又、私の戦死した弟のことを貴方が話されるときには、目に涙を浮べられるので、私の方が恐縮することもありました。しかも貴方は文筆の才に富んでおられ、かつては推理小説をものにして「新青年」というその方面の専門的な雑誌の懸賞募集に応じて当選されたこともあり、昨年あたり又何か創作を書き上げる計画を持たれて、私は色々と裁判の論理や用語についての質問を受け、さらに再会を約しておられたのですが、病魔の故か、ついにそのことは果されませんでした。

本当に残念なことに、貴方は十四、五年前から糖尿病にとりつかれ、昨年二月頃にはこれに腎臓病が加って、本年一月末、病状悪化により入院された儘、再び起つことなく覚悟の大往生を遂げられたのであります。

さて名残りは尽きませぬ。終りに貴方は、さる一月十五日、湘南高校で試合を見ながら私に対して、すべての物にははじめがあれば終りがあるということを申されました。正にその通り相違ありません。永い間、親しくしていただいた私もいずれはそのうち貴方の跡を追うことになります。こんどは貴方に迎えられる番です。その時は何かサッカーのよい土産話を持ってゆかねばなるまいと存じますが、どうかあとのこととは心配なさらずに、安らかにお眠り下さい。

心から御冥福を祈り上げて弔辞と致します。

失礼いたしました。

昭和五十五年三月七日 葬儀委員長 天野武一

岩渕二郎を偲ぶ会及び記念事業の報告

1. 「岩渕二郎を偲ぶ会」の案内より（昭和55年4月20日）

—— 略 —— 昭和二年、旧制湘南中学校にてサッカー部の誕生以来、サッカーの鬼となって、これを育てあげ、一生の全てを湘南に捧げ尽した岩渕二郎氏が、三月四日正午、糖尿病、腎不全に尿毒症を併発され、横浜国立病院にて、70年の生涯を閉じられました。ご自宅には、三月六日お通夜、三月七日告別式が行なわれ、葬儀委員長には、OB会の会長でもある天野武一氏がなられ、氏の感動的な弔辞には、参会者一同、涙を誘われました。

本年一月十五日の恒例の湘南蹴球祭には、グランドまで出てこられる程でしたがその後すぐ入院され、急速な病気の悪化により、サッカー関係の皆様にお知らせする余裕もなく、従って充分な看病のお手伝いも、お見舞も出来ぬまま永眠されてしまい、関係者として大変申し訳なく存じております。そこで、全国各地でご活躍されている皆様に、出来るだけ多くお集まりいただきたく、OB会主催のもとに、「岩渕二郎を偲ぶ会」を開催させていただくことになりました。

母校、湘南のあの懐しい青春のドラマ、ガンブチの叱声が鳴り響き、何人かは、小石が飛んで来た思い出もある、あのグランドに皆で集まり、ボールを蹴って、亡き岩渕先生のご遺徳を偲び、ご冥福を祈り、せき別の会にしたいと存じます。あわせて、湘南サッカーに、岩渕二郎氏の名を永遠に残すべく、記念事業を決議させていただきたい所存です。—— 略 ——

2. 「岩渕二郎を偲ぶ会」の経過報告より（昭和55年7月20日）

4月20日に「しのぶ会」の案内をOB会全員420名に発送、返信頂けた方が、256名、協賛費を納入下さった方198名、会当日の出席者111名でした。その日、夜来の雨にもかかわらず、多数のご出席を頂き、さすが岩渕二郎さんのご徳の偉大さがしのばれました。その雨も午後には止み、雨あがりのグランドに、故人の特大の遺影写真を掲げ、その前で第一部として、試合を行った。—— 略 ——

引き続き第二部として、体育館にて、晩年の温顔の故人の大写真を飾っての「しのぶ会」。OB約90名、神奈川四十雀、藤沢四十雀の来賓と現役60名余で盛大

な会となり、——略—— 岩渕夫人から、湘南サッカーチーム部旗並びにユニホーム一そろいが、現役に寄贈され、直ちに会場に飾られご披露されました。

又、実行委員会で企画した記念事業として、岩渕二郎の銘を入れたシュートボードを母校グランドに建設、更に湘南サッカー50年誌の発刊を提案、万場一致、拍手をもってご承認頂き、岩渕二郎作詩作曲の湘南蹴球部部歌を、当時（昭和14年頃）のメンバーが歌い、全員で校歌を斉唱し盛会のうちに無事終了しました。

3. 1981年蹴球祭（シュート板完成披露及びOB会再出発の総会）の報告

当日、晴天に恵まれ、天野武一會長始め、天野俊三（2回生、以下数字のみ）、中村正義（3）、片山豊（3）、駒崎虎夫（6）、常盤嘉一郎（6）、園田嘉高（12）、田村皓（15）、近藤平八郎（26）、柳川明信（27）、小瀬村秀夫（27）、山本修（27）、の旧制OBと、島田武夫（28）、松本好且（30）、大内健嗣（31）、ほか約30名の新制高校OBと現役メンバーが集り、シュート板の紹介とOB会再出発の総会が、予定通り行なわれました。

シュート板は偲ぶ会の記念事業としてようやく完成しましたが、グランドの理想的な場所である西側石段の下に設置出来ましたことは鈴木中部長の御苦心のたまものでした。設計はOB会の一員で藤沢在住の一級建築士である松本好且氏（30回生）に全面的にお願いし、施行は湘南庭球部OBの高山鉄工所社長により、心をこめて作られました。なお基礎には、故岩渕二郎氏愛用のシャープペンシルとホイッスル、及び、「偲ぶ会」関係の案内報告と、記念誌目録と写真がカプセルとなって埋め込んであります。

ブルーのゆのマークを入れ、碑名は服部斐夫氏（16回生）の筆により、贈、湘南サッカーOB会 岩渕二郎を偲ぶ会記念 1980年 とし、サッカーグランドに向けて立って居ります。

岩渕二郎氏はまさに湘南サッカーの偉大なる象徴であり「ガンブチさん」「岩渕先生」は湘南サッカーマンが皆、それぞれに、強く自分達のサッカー、青春の思い出の中に生き続け、いわば、点と点での関係ではなく、線で結びついている存在であると思われます。そして、岩渕二郎氏の、湘南サッカーを愛し、見つづけ、見守

っている姿を、ここにシート板というグランドの記念碑として残せたことを、皆様と共に心から喜びたいと存じます。

当日、天野会長が「岩渕君はサッカーマンとして誠に幸福な人だ、羨しい限りだ。」と申されたお言葉が印象に残ります。

会長のご挨拶のあと、古いOBの人々から順に「蹴り初め」をしていただき、皆さん嬉しそうでした。鈴木中先生の一発も見事でした。現役の諸君も、ここに湘南サッカーの大きなシンボルが形をなして見守っていることを一つの誇りとして自分達のサッカーに精進していただく様に改めて祈念した次第でした。

その後、会議室にてOBと現役との交歓の会を開き、古い先輩の話と、若い現役の人々のスピーチを交えて楽しい時間を持ち、記念誌発刊の経過報告の後に、会計及び幹事、事務局の御承認をいただき、年会費納入の促進をはかり、OB会の今後の発展を誓って散会しました。

毎年1月1.5日湘南蹴球祭をもって総会とし、又会計年度交替の日と決定されました。

(文責 安保 隆文)

岩渕二郎氏の思い出

15回生 安保 隆文

イ) 湘南OBチーム東日本優勝

昭和20年代前半、湘南OBに全国一流の選手が多数活躍し、大塙正雄（15回）戸沢 澄（16）、田村 恵（19）、山口雄司（20）、桑田 孝（22）、小林忠生（23）、小田島三之助（24）、といった全日本代表選手を始め良いプレーヤーがその他にも多数、大学、社会人チームで活躍しており、いずれも岩渕さんが育てた人であり、彼等を集めてチームを作らば、全日本社会人で必ず優勝できるのだがというのがガングブチの口ぐせでした。それが昭和23年東日本選手権大会でようやく「鎌倉チーム」として結集して見事優勝しました。この時の岩渕さんの嬉しい顔は忘れられないものでした。安保（15）、内田（15）、服部（16）、奥本（16）海老原（18）、松岡（22）、松浦（22）、原田（23）、香川（24）も出場しました。いわば、湘南勢、岩渕一家総出陣といった処でしょう。

ロ) 岩渕さん還暦祝い

昭和45年、鎌倉のサッカー仲間の発案で赤いブレザーコートを記念に贈呈して多数の後輩達が集ってグランドで共にボールを蹴ってお祝いした。

ハ) 神戸一中の30年前チームと対戦

昭和51年巣鴨の人工芝グランドに、両軍とも30年～40年前のメンバーが集り、神戸一中は往年のカーキ色の、湘南中はブルーのユニホームを新しく揃えての昔の中学日本一の対決戦。両軍とも懐しいメンバーが25名位集り、岩渕さんは大変な御機嫌でした。

ニ) 岩渕さん退職記念サッカー

昭和52年5月、母校グランドで多数の後輩が集り、ボールを蹴り、江の島洗心

亭にてコンペ。岩渕さんは、歌い、踊りました。

「月夜の晩に、雀が二匹、お寺の屋根で……」と。 お元気でした。

ホ) 歴代コーチの人選

仕事の関係で現役の指導が直接出来なくなったとき、岩渕さんは専任コーチを指名する場合、大変な配慮をされたと私に言われました。

第一に人間的に立派で魅力があること。 その上にサッカーの哲学を持った人。 そして時間に余裕を向けられる立場の人ということでした。 かくして岩渕さんの次は藤田得利氏(6)、そして島田正彦氏(10)、大塙正雄氏(15)、早川純生氏(18)、柳川明信氏(26)、各氏が指名されたと聞いております。 その結果は、湘南サッカーの多くの人材、プレーヤーが見事に各方面に花を咲かせ、現在に到ったものと思われます。 人を見るに 眼のお方でしたし、又、後輩の湘南サッカーマン一人一人を本当にいつまでも、そのプレーの一つ一つをよく覚えていて、あれこれと語って下さいました。 今その細かいメモがないのが残念です。

ヘ) 病室にて

昭和55年2月14日、山口晴夫(45)よりの知せで横浜国立病院にお見舞いにかけつけ、絶望的な暗然たる思いで帰宅。 ついで2月25日鎌倉在住の吉いOB有志の見舞金を持参した際は意外に元気になられており、約一時間サッカー談義をし、これが岩渕さんが湘南サッカーの仲間と話をした最後になったわけでした。

田村兄弟、内田、安保、服部、奥本、早川、松岡、菅原、桑田の名前を一人一人読み上げながら、懐しそうな、何かを振りかえる様なおももちで、「皆に心配をかけるなあ。」と呟いておられました。 サッカーの時のあの厳しい顔が、一瞬なごみ、微笑んで、誠に素晴らしい笑顔でした。 竹の鞭を曲げてパッと離した時の力学はサッカーのキック、ヘディングと共に通性あり、膝を曲げての前傾姿勢と寄り、重心の移動の力学も。 メキシコオリンピック第三位の重さのこと、竹腰さんのこと、湘南サッカーのこと等々約一時間楽しく語いが出来ました。

その日は珍らしく御気分が良くて話がはずんだ様でした。 翌日より御容体が急速に悪化して、3月4日正午…… 私は最期には間にあわず、お通夜となってしまった。

まいました。

亡くなられた後に、今更ながら湘南サッカーにとって大きな存在であられたことを益々深く思い知らされるばかりであります。

以上、たった一人の体験と見聞をもって追悼の記録を述べさせて戴きましたことを、お許し下さい。

3回生 中村 正義

毎年1月15日(成人の日)サッカー部OBに招集がかかり、私は同期の天野俊三君と出席している。OB会長の天野武一先輩にも、この日にはお会いできるので、最近数年の間は、湘南グラウンドに来ております。

昨年(1980年)1月15日は県下のインターハイ準決勝戦で湘南が勝ったチームをみました。スタンドで観戦しながら、隣りの椅子に腰かけている岩渕さんと天野さんご兄弟と、久しぶりにサッカー談義に花がさきました。岩渕さんは、一人一人の奇談珍談を楽しく聞かせて下さる方でした。対抗試合の話になります。私を酒のさかなにしての話もあります。レフトウィングの私がパスを受けて敵陣ふかく走りこみ、センターフォワードの岩渕さんの突込みに合わせて、センターリングをします。岩渕さんは「得たりや応と」ヘディングシュートで得点という次第。

ここまでいいのですが、次が頭をかしげてしまいます。「中村のパスがゴールの前に来たので、長身を生かして、ヘディングしようとしたとき、背後からの強風で空振り、しかし敵のゴールキーパーの逆について得点した。」以上の話は、私は全く記憶にないことですが、岩渕さんが楽しそうにいつも、私の方をみながら話して下さる想い出話です。

9回生 嶋田 正彦

私がゴールキーパーをやりたくて、湘南のサッカー部に入ったのは、昭和8年1月の3年3学期からでした。それから卒業までの2ヶ年間は、岩渕先輩は、地方勤務だった由で、湘南にコーチに来られる機会は滅多になく、多分一度だけだったと思います。然し部の先輩、同輩から岩渕さんという先輩のいることは屢々聞かされ

ておりました。或る日、珍らしく岩渕さんがユニホーム姿で校庭に現われた時、同級の古賀君が「あの人が有名なガンブチさんだよ」と緊張した面持ちで教えてくれたことです。これが私と岩渕さんの最初の出会いでした。

私が入部した頃の県下サッカー界は師範学校の全盛時代でした。今の方は御存知ないでしょうが、当時の師範学校へは、小学校卒業後2ヶ年の高等小学校を終えて行くか、中学2年修了後入学して5年間 在学する教育制度で、選手は、我々より2年年上でした。従って小粒ぞろいの湘南の選手から見ると、まるで大人の様な大柄の師範チームに勝つ事は容易ではありません。我々の最終学年の時もリーグ戦では0対0の引き分けでしたが、不敗同志で再試合となり、善戦も及ばず2対0で優勝を逃しました。

私は、湘南中学卒業後水戸高校で3ヶ年のハーフバック生活を経て東大に入りましたが、その後藤田先輩の後を継ぐ湘南サッカー部のコーチを依頼され、昭和14、15、16年の3シーズンを湘南の選手と共に厳しくも又楽しく充実した生活を送ることになりました。

当時、私の頭の中は何時も湘南サッカー部の事で一杯で、新しい技術を修得する目的で東大サッカー部に入り、春休み、夏休みにはせっせと湘南の校庭に通いましたが、あいにく住いが東京だったので、部長先生のお宅やサッカー部の後輩の家を泊り歩きながら、後日満足に御挨拶すらしない等大勢の方々に御迷惑をお掛けしました。

当時の湘南チームは身体こそ例により小粒でしたが、素質のある選手が多く、伝統の華麗なパスワークで関東サッカー界では注目されていました。そしてコーチだった3ヶ年は、毎年県大会及び甲神静大会では問題なく優勝し、夏の甲子園大会へと3度駒を進めることができました。特に田村皓君がキャプテンをしていた昭和14年は優秀な選手が多く準決勝まで勝ち進みましたが、惜しくも抽選負けとなつた口惜しさは今でも忘れられません。

既に東京に転勤されていた岩渕さんは、この3年間普段の試合や練習にも良く顔を見せましたが、春や夏の強化練習には必ず参加され、元来バック出身の私がバックスやゴールキーパーの練習に力を注ぐ間は、フォワードの指導を引き受けたり、又馳せ参じてくれた多くの先輩と共にほとんど毎日の様に行つた練習試合では、

岩渕さんは先輩チームのセンターフォワードとして頑張り、例のタンクの様な身体で奮進する単身ドリブルや、敵の意表をつく独特なシュート等良き模範を示して呉れました。

そしてお勤めがあったにも拘らず、甲子園にも毎日ついて来て下さり、若輩の私をコーチとして立てながら、技術的な指導は勿論、きめ細かく選手達の世話を下さいました。かつては、あれ程こわいと聞かされていた“ガンブチ”さんですが一緒に生活してみて内心は実にやさしく面倒見の良い人物であることをしみじみと感じました。

私がコーチを引き受けた3ヶ年の湘南チームが、素晴らしい成績を上げられたのは、後に日本サッカー界を代表する様な名選手がチーム内に多くいた事にもよりますが、その選手を育てた岩渕さんの献身的な御指導と御協力によるところが極めて大であったと誠に感謝に耐えません。

私のコーチ隠退後も岩渕さんが出征されていた数年を除き、戦中戦後の物資欠乏時代に、湘南O B チームの一員として岩渕さんと共に他の大学O B チームや実業団チームと試合をする機会が良くありましたが、何時になっても燃えたぎる岩渕さんのサッカーに対する熱意には誠に頭の下がる思いでした。

残念ながら、その後私は心臓をわずらって過激なサッカー生活から遠ざかってしまいましたが、岩渕さんは益々サッカーの魅力の虜となってか、遂に湘南の先生になられて一生ボールを蹴り続けられました。この岩渕さんのひたむきなサッカーに対する執念は、サッカーの鬼と云われるにふさわしく、誠に岩渕さんらしい実に、痛快な人生であったと云えましょう。

そして、この様に純真そのものであった岩渕さんは何時になっても童顔で、何気なくニッコリされた時の御顔のやさしさは、私の網膜に今でも焼き付いております。

岩渕先輩の思い出は尽きませんが、サッカーに生き効いを求め続けた、我が大先輩の御冥福を心からお祈り致します。

15回生 大埜 正雄

昨年5月、なつかしい湘南のグランドで、岩渕さんをしのぶ会が催されてから、早いもので、既に半年余たちました。

この度、蹴球祭の日に、岩渕さんを記念するショート板が完成披露されたということですが、本当にうれしく思います。部員諸君が大いに活用して、キック力向上に成果をあげるよう期待しております。

岩渕さんをしのびながら2・3書いてみます。

昭和53年の夏、神奈川四十雀チームが札幌四十雀チームとの親善試合のため、札幌に遠征して来られ（内田、服部、両氏も参加）私も神奈川チームに入れていただき、岩渕さんとご一緒に、ボールを蹴ることが出来ました。これが最後になりました。この年は北海道とも思えぬ暑い夏で、2日間に3試合という強行日程でしたがまだまだ、お元気でした。

奥さんを同伴され、自分で車を運転され、郷里をまわられたと聞いております。札幌在住の湘南OBの方々と懇親の会をもち、色々と思い出話に、楽しい一日を過しました。昭和14年秋の明治神宮大会は、丁度私共が、5年の時でしたが、世の中の情勢は次第に厳しくなっており選手全員が、東京芝の増上寺に集団合宿して試合にのぞむという情勢でした。どんな環境にあっても乗りきっていかねばならないのですが、どうも都会的な、ひ弱さもあり、一日一日と敗れたチームが増え、勝者、敗者が同居しているわけで、段々と騒しくなり、睡眠も十分でなく、食事も簡素であり、岩渕さんとしては、はがゆく思われたのでしょうか、参ってしまうのではないかとの親心から、グラウンドで中食をとるとき、奥さんにうなぎのかばやきを差入れさせ、元気づけたということを楽しそうに話されておりました。40数年前のことですが、当時の部員諸君もはっきりと憶えておられると思います。（この大会は、夏の甲子園大会準決勝でちゅうせん負けをきっした、京都代表聖峰中学を破ったものの残念ながら準決勝で、大阪代表明星商業に延長戦で1点先取しながら2点とられ敗退したと記憶しております。）

今、ふりかえってみると、岩渕さんから、私共がうけたご指導は、本当に大きなものであったと思います。断片的になりますが、

“厳しさ” 年次的に岩渕さんに近い方々には、もっと強烈であったと聞いておりますが、サッカーに取り組むにあたっての真面目さ、厳しさが、あらわれていたのではないかと思います。グラウンドに来られた時の緊張感が思い出されます。

“高度の技術” 今、考えてみると、私共は岩渕さんを始めとする指導者の

方々から、非常に高度な技術指導をうけたと思います。技術面でも戦術面でも、言えると思います。しかも基本に忠実、反復熟練を徹底されたことは承知の通りです。

コーチを招く場合にも、第一人者に来ていただいたと聞いております。私も2年の時の春合宿に、藤田さんがベルリン大会のセンターハーフ（当時）として活躍された種田さんを連れて来られ指導をうけたのですが、素晴らしいインステップキックに、驚きと憧れを感じたものです。その後の練習に大きなはげみになったと思っております。

“創意・工夫” 創部の頃は、恐らく普及も未だ十分ではなかったと思います。研究し、工夫して身につける。役立ちうるものがあれば、ハードル競技でも、ハイジャンプでも取入れる。向上するための積極さ、創意、努力を絶えず、持ち続けておられた方であったと思います。

しお会の時にも申し上げましたが、私が遠くにいるということでなく、何時でも、グラウンドでお会い出来るような気がいたします。湘南には岩渕さんがいるんだという気持は、私共の心の中に、何時までも生き続けているものと確信しております。

最後に部員諸君は、練習に試合に大いに頑張っておられることと思います。難しい環境にあるということは十分承知しながらも、湘南のサッカー部が強くなって、神奈川は勿論のこと、関東でも、全国でも、活躍することを、先輩、関係者のすべての方が、念願し心持ちしていると思います。

岩渕さんを中心とする諸先輩が築かれた素晴らしい伝統をうけつぎ、50年を迎えた力をあわせ湘南サッカー発展のために頑張ろうではありませんか。先輩諸兄、同僚後輩諸君のご健勝、ご多幸をお祈りして、筆をおきます。

18回生 早川 純生

多くの方が岩渕さんに教えられ、それを身につけて、今の湘南サッカーがあると思う。その中で、次の人に是非伝えておきたいことを書いて、岩渕さんの思い出としたい。

(1) パスする瞬間

ボールを蹴るとき、ボールを見るか、見ないで蹴るか？ 答 見る。

それをゲームに応用するには、ボールを持っている人が、ボールを蹴ろうとする直前に烈しく走りなさい。またはキッカーの眼に入るよう動きなさい。その眼に入った動きの中で最も良い位置にいる味方に、パスされるでしょう。やさしいか、難しいかやってごらんなさい。私がC Fを20年もやってきた中で、これが非常に有益であった。

(2) パスの受け方

パスを受けるには、走りながら（または、キッカーと離れながら）受けるか、キッカーに近づきながら受けるかであろう。これらを組みあわせると、パスするには「キッカーから離れようとするプレーヤーのうちから良い位置にプレーヤーにパスするか、それが無理であれば、キッカーに近づくプレーヤーにパスして」次のチャンスを待てばよい。(1)に記したことも忘れないように。

(3) C F の任務はゴールゲット

C Fは如何なる時にも得点を考えよ、ゴールとの間に相手がいたら押しのけてでも得点せよ。

昔のサッカーでは、C Fは攻撃を第一の目標にしていた。すべての練習を得点に結びつけて考えた。少しでも隙があればそれをついて得点すべく常に眼を光らせている。相手のポストにぶつかる位にせりあってでも得点する気構えが必要である。センターリングがG Kに渡る前に蹴りこむプレーが必要である。これは英國風のサッカーかもしれない。戦後、ドイツのサッカーが採りいれられている。L W杉山からのセンターリングを、反対のポストの前で釜本が待ち構えて、ワントラップして得点する。トラップしてからのプレーは確かにうまいが、絶妙なセンターリングをする杉山がいたからこそできるプレーであるが、相手のバックをトラップでぬくのは易しい。もしウイング近くのポストの前でやって、得点するならば、もっと得点できたのではないだろうか。彼のプレーを見て、岩渕さんの教えを思い出しながらそう思う。その代り、烈しいプレーで体を損ない、選手生活は短かったかもしれないが。

(4) ボールを早くコントロールせよ。

練習を終ってからゴールを背にして立たされた。（この体形ではボールをころがされて得点する練習をしばしばさせられた）。その日は、ボールが頭の上にあがった。2回3回とあがっても何もできない。そのうちに右足を体を後に倒しながら右

足をふりあげ、何とかボールを蹴っていた。それから何年かの後、大学リーグ戦で思わずこのプレーが出たがポスト横、1mをボールは走り去った。岩渕さんから習った、バックシュートの思い出である。

岩渕さんは、練習の注意事項をメモにして、渡して下さった。ここに書いたのは、中学3年のとき渡されたものと思う。プレーヤーとして非常に有益なことと思う。CFとして、20年余り過したが、このような2・3のプレーの組立てであったと思う。これらは皆が自然に身につけていると思うが、もう一度それらを意識し直すことにより、これらのプレーを生かすことができよう。あえてまとめてみた次第である。

36回生 渋谷 繁夫

岩渕先生と私とは、サッカー以外のいろいろな面でも不思議と縁があった。私が初めて岩渕先生に会ったのは湘南高校に入学する二年前のことである。私が片瀬中学2年のとき、サッカー部が新設され、初めてボールを蹴ることを習ったとき、岩渕先生が教えに来て下さったのである。その時、宮原先生も来てくれ、あの「火のできるようなシュート」を見せてくれた。あの頃は宮原先生も若かった。（何しろ、20年も若かったのである。）その後、湘南高校へ入ると、英文法の担当が岩渕先生であった。先生の講義は、単なる受験英語のそれではなく、博学な先生は多くの文例をあげ、余談をまじえて講義をするのである。そこには先生の思想があり、哲学があった。

サッカー部にいた3年間は、部員の誰もがそうであるように、先生から多大の薰陶をうけたのはもちろんである。卒業により、岩渕先生とは、サッカー祭などで時たまお会いするだけで、身近な接触はなかったが、たまたま私的なことで先生のお世話になることになった。先生の亡くなる1年前のことである。それを機会に時々先生のお宅へおじゃまをし、酒をごちそうになりながら深夜まで様々な話題に興ずるようになった。身近でみる先生は、あのグラウンドで見る怖ろしい「それ」ではなく、きさくな、世話好きな一人の「人間」であった。先生はもうその当時、大部身体が弱って、痩身になっていたが、淡々と語るその様子には武士の風格があり、往年の面影をしのばせるものがあった。

そして岩渕先生の亡くなった今もなお、私は先生のお宅と関係をもっている。といふのは、私はある私立大学に勤めていて、うちの学生が岩渕先生の下宿に数人お世話になっているからである。

このようなわけで、私は他の部員よりも多く、先生の人となりを身近にみる機会に恵まれたことを幸せに思っている。

先生は一つの生き方、考え方、哲学というものを我々に見せてくれた。「岩渕先生はサッカーに一生を捧げ、自分の人生を犠牲にした」という見方 あるが、先生は決して犠牲になるような人ではなかった。自分の信念通りに生き、それなりに充分満足していた。先生は世俗的なことには興味がなかった。もしそういうものに興味があったら、そうしただろうし、成功もしただろう。そのために必要な知力も能力も体力も持っておられた。ただそう希望しなかっただけである。先生はサッカーを通じて、自分の思想の完成をめざしていた。ちょうど宮本武蔵が剣によって道を求めるように。先生にとって、サッカーは一つの手段であり、手段である以上に犠牲になることもなかつたのである。

最後に先生の人となりを示す「岩渕語録」をいくつか紹介します。

英文法の講義中に

「コロンブスは、原住民が住んでいたアメリカ大陸にやってきて、アメリカ大陸を発見した、と宣言した。なら今、我々が、アメリカへ行って、アメリカ大陸を発見したと宣言したらどうなるだろうか。全ては力だ。」

こういう発想には先生の深い思想がある。

またあるとき、

「チーム各員の力が一割、上達すれば、チーム全体として、二倍の強さになる。」

これは、まさに一世を風靡したゲームの理論である。

最後にもう一つ。メキシコオリンピックで日本のサッカーが入賞したとき、「これは、つきが幸いしたからだ。今後、日本のサッカーがオリンピックで入賞するには、30年を待たなければならない。」

当時のサッカー関係者は、「日本の実力も世界的になった」と浮かれていたが、その後の成績を見ていると、どうも岩渕先生の言葉は適中しそうである。

特別寄稿

前中体連サッカー専門部長 端山 虎夫

「私のサッカーは、普通の人にはない突飛なものをもっているが、それを実現してくれたのは、ここにいる端山さんだった。」 岩渕先生を囲む何かの会の席上で、先生がこんなことを言わされたのを思い出す。それは、先生が、片瀬中学にイングランド系のサッカーを、藤沢一中には、南米系のサッカーをコーチされたことを意味するものと、今なら理解できるのだが……

先生との出会いは、昭和28年6月、鎌倉学園の山のグランドで行われた県中学校サッカー大会の時だった。私は藤沢一中の付添いだった。対戦校の六角橋が、常勝チームとも知らず、ただ成行きを見守るだけの私の横に立っていられたのが、岩渕先生だった。先生が『ウイングを下げて』 それを受けた私が、『ウイング／もつと下がれ／』 だのウイングの何たるか、どこにいるのか皆目わからぬ私であった。

終って、下の茶店で反省会が開かれた。席上岩渕先生が、日本のサッカーを強くするには、中学生を育てなくてはいけない。と熱っぽく話されたことを、今もあざやかに思いだす。

このときから、藤沢一中のグランドには、午後3時となると、白シャツ黒パンツの岩渕先生が現れ、放課後になって生徒が練習に出るのを待っておられた。

そのコーチこそ生徒には勿論、私にとって、サッカーへの開眼となった。

一つのプレーのあと、必ず全員を呼び集め、そのプレーは試合のどこにいかされるかを、わかりやすく説明される。4分も話すと次のプレーにうつる。徹底した、トラップ至上主義だった。 ボールが止まらなければ、プレーにならぬ。

キャッチボールのできない野球だ、 体重の下にボールを止めるのだ。

ボールは静止しなければ使いものにならない。 パスは相手のとりにくいところへ。 味方のとりやすいところへ、 ひざから下のスイングで。 ボールを受ける足は柳に風の如くに。これらの言葉を 私も生徒も共に、乾ききったのどをうるおすように、吸いとった。 チームは、美事に変化していった。そして

その冬の県大会には優勝してしまった。

その後、先生は片瀬中学も指導され、県大会の決勝戦に、両者がそれぞれ異質のサッカーで相対する場面が、何度もみられることになったのである。

44年サッカー友の会の発会の記念行事の時、先生の下で、私は接待役を引き受けた。控室で、来賓の長沼健、杉山隆一両氏と同席した折、先生はこんな話をされた。『一回の攻撃が必ずシュートで終るようなサッカーにしたい。つまり、バスケットボールのようなサッカーが理想だ。』両氏は黙って聞いているのみであった。

『サッカーは紳士のスポーツ、ルール第18条がもっとも大切。』ともよくいわれた。ルールブックは17条である。18条が紳士の心得であることは、後日わかった。

『俺は長とつく肩書きはきらいだ。』ともよく言られた。晩年、職務代行になられた時、『うちのバサン、－あなた、ついに小使いさんになりましたね－』と言った。』と大笑された。

又、中学校の試合を見に来られては、『このまわりで、おばあちゃんやおかあさんが、いっぱい応援するようなサッカーにしたいものだね。』と言われた。

今や県下の中学校のチーム数は270に達している。28年頃は10チーム余りだったことを思うと感無量である。

藤沢市内でも、土日の小中学校のグランドから、サッカーの笛の聞こえない日は珍しい。そして、家族ぐるみの応援で、コートサイドはいつもにぎやかに埋めつくされている。

先生の夢は、みごとに実現したのである。先生がかって、藤沢一中や片瀬中学のグランドにまかれた種子は、立派に育ち、実を結んだ、そしてこれからも次々と仲間をふやしつづけていくことだろう。

記念事業協賛者一覧

(単位千円、56年1月15日現在) 敬称略

卒年	氏名	額	卒年	氏名	額
1	天野武一	50	15	安保隆文	50
2	石田貞一	10	15	大塙正雄	10
2	石川滋彦	10	15	内田康侍	10
2	天野俊三	5	15	田村皓	20
2	片山豊	10	15	松岡マサコ(故七郎)	5
3	中村正義	40	16	服部斐夫	10
5	松村豊雄	10	16	奥本武臣	20
6	入沢栄四郎	20	16	戸沢澄	20
6	笠原良一	20	17	海老原謙	10
6	駒崎虎夫	20	17	河西克郎	10
6	藤田得利	20	17	保利恒一	10
6	間島昌平	10	17	菅原留意	10
6	常盤嘉一郎	10	17	土屋義彦	10
7	山中敏夫	10	18	海老原純	10
7	府川夫王家寸	5	18	早川純生	10
8	渡辺真	20	18	松本良二	10
8	永楽清吉	10	18	高橋謙	5
8	駒崎利夫	10	19	田村恵	20
9	富岡淳	20	20	松本兵太	10
9	嶋田正彦	25	20	山口雄司	50
10	古賀晴人	15	21	石井幸太郎	5
10	館実	5	21	吉野龍二	10
11	白根雄偉	10	22	香川嵩	10
12	園田嘉高	5	22	海老原朗	10
13	小熊幸雄	10	22	松岡巖	10

卒年	氏名	額
22	松浦正美	10
22	矢住直亮	5
22	桑田孝	15
23	小林忠生	10
23	原田徳夫	20
24	下文博	10
24	小田島三之助	10
24	川島元信	5
25	香川稔	10
26	近藤平八郎	20
26	尾島政雄	10
26	前田正嗣	10
27	海老原俊	10
27	加藤道八	20
27	栗原克夫	10
27	小瀬村秀夫	30
27	田川明	10
27	柳川明信	25
27	山本修	5
27	出口孝治	5
28	近藤莊一	10
28	末永直	10
30	八木一郎	10
30	姉崎正平	10
30	岡田清治	10
30	嶋田和夫	10
30	渡島九洲夫	10

卒年	氏名	額
30	中川英夫	10
30	中原弘己	10
30	松本好且	10
31	田中啓元	10
31	大内健嗣	10
31	長谷川晃一郎	10
31	浜野康彦	10
32	桐沢潔	10
32	落合均	10
32	菊地保夫	10
32	柴田右一	10
32	関根和衛	10
33	篠田亮	10
33	福井久雄	10
33	小坪泰正	10
33	竹内洋	10
34	番場定孝	30
34	早野勝徳	10
34	山口紘一郎	5
34	丸屋亮	10
36	井上孝	10
36	田中道夫(旧神林)	5
36	渋谷繁夫	5
36	原田冬樹	10
36	久森茂男	10
36	丸屋喬	5
37	小林弘治	10

卒年	氏名	額
37	牧村英樹	10
38	藁品行夫	5
39	飯田志農夫	10
39	岡本行夫	10
39	小泉親昂	10
41	二木修二	10
41	植松二郎	10
41	黒沢秀樹	10
41	小泉親種	10
41	庄司邦昭	20
41	中里哲郎	10
41	福島博	10
41	相羽克治	10
42	関口真	5
42	田部井徹	10
42	中川哲夫	5
42	(林春海)	20
43	加納正道	10
43	工藤幸生	10
43	小堀康生	10
43	福西紀夫	10
43	栄卓	3
44	坂部治郎	10
44	橋本広和	5
44	小泉治子	10
45	浅倉泰	10
45	山口晴夫	10

卒年	氏名	額
45	山口洋次郎	10
46	相馬保夫	3
46	岩本喜久雄	5
46	隅山研二	10
46	森秀樹	5
46	山口康隆	10
46	中山亮	5
46	城向和子	5
47	大野康一郎	10
47	佐藤徹	3
47	岡田富士雄	10
47	田中靖	5
47	稻垣(故博)	5
48	青木猛	10
48	関佳史	10
48	中島修	10
48	細川周平	3
48	吉田弘	10
48	安保達明	10
48	鈴木啓介	5
49	安保和俊	3
49	小原沢俊之	5
49	奥井誠人	5
49	白井隆	5
49	久野浩之	5
49	元松経男	6
49	渡辺義昭	10

卒年	氏名	額
49	小塚 真一	3
50	磯尾 典男	3
50	河合 稔	15
50	鈴木 順一郎	10
50	高井 雄一郎	3
50	貴志 直文	3
50	江昭彦	3
50	吉田 慎二	10
51	石郷岡 善則	3
51	伊藤 冬樹	5
51	大木 孝	3
51	大隅 一男	3
51	五代 厚司	3
51	高橋 正純	3
51	端山 真一	3
52	清原 正久	3
52	志水 利彰	3
52	閔 啓輔	3
52	斉藤 マモル	3
52	永富 良一	3
52	八木 啓太	3
53	田ヶ原 玲子	3
53	新倉 博史	3
53	岩田 淳一	3
53	渡辺 秀通	3
53	武藤 俊一	3
54	森 正俊	3

卒年	氏名	額
54	藤塚 久雄	3
54	篠塚 豊	3
54	木村 茂樹	3
54	中村 浩	3
54	有馬 純夫	3
54	松崎 正一郎	3
54	中村 昭	3
55	井川 玄	3
55	石外 力	3
55	上田 均	3
55	香山 秀一郎	3
55	川添 真一郎	3
55	久保 徹	3
55	長嶋 敏幸	3
55	成田 研一誠	3
55	二瓶 誠	3
55	藤原 新	3
55	山本 吉一郎	3
55	吉川 隆	3
55	和田 猛	3
55	大井 和美	3
55	神戸 理恵	3
55	中村 道男	3
51	橋本 博文	3
	氏名不明(52年卒)	3
	氏名不明	3

年 次 別 記 錄

- 1923(大正12) 12月6日 校庭にゴールたつ
12月8日 高?高等師範学校理科学生、小野徳四郎氏を招き
全校生徒を対象に、実技指導が行われる。
部長、田原先生(博物)
- 1924(大正13) 部長に後藤基胤先生(数学・高等師範主将)を招く
- 1925(大正14) 部長、金持先生、全校チーム編成さる。
第1回県下中学校蹴球大会(於横浜三中)12月下旬
一回戦 県立二中 9-0 湘南中
- 1926(大正15) 冬季リーグ戦(第1回)10月3日開始
湘南 不戦勝 神工 湘南 1-1 三中
湘南 2-0 鎌倉 湘南 2-1 師範
湘南 不戦勝 関東学院 湘南 0-1 二中
湘南 6-0 浅野中
順位 1位 二中 2位 湘南 3位 師範
高師主催全国中等学校蹴球大会(9月下旬)初出場
一回戦 湘南 5-0 立正中
二回戦 湘南 1-3 成城中
- 1927(昭和2) 高師主催全国中学大会
一回戦 湘南 2-0 藤岡中(群馬)
二回戦 湘南 0-2 高師附中(優勝校)
県リーグ戦(第2回)
湘南 0-4 師範 湘南 0-6 二中
湘南 4-2 関東学院 湘南 3-0 浅野
湘南 1-3 三中 湘南 4-0 鎌倉
湘南 5-0 神工

順位 1位 二中 2位 3中 3位 師範
4位 湘南 5位 鎌倉 6位 浅野
7位 関東学院 8位 神工

1928(昭和3) 高師主催全国中学大会

一回戦 湘南 2-1 浦和
二回戦 湘南 6-1 札幌一中
三回戦 湘南 0-5 高師附中

県リーグ戦(2部制となる)

湘南 0-1 師範
湘南 6-1 関東学院
湘南 4-2 鎌倉
○グループ2位に止まる

1930(昭和5) 県蹴球連盟県下中学校大会

一回戦 湘南 7-1 関東学院
準決勝 湘南 3-1 二中
決勝 湘南 3-1 師範

全国大会(文理大主催)

一回戦 湘南 不戦勝 水戸中
二回戦 湘南 4-0 今市中
三回戦 湘南 15-0 府立園芸
四回戦 湘南 5-0 横浜二中
準決勝 湘南 4-2 府立五中
決勝 湘南 1-3 附中

県リーグ戦

湘南 10-5 関東学院
湘南 3-2 三中
湘南 10-0 神工
湘南 3-1 二中

大毎主催全国大会関東予選

二回戦 湘南 7 - 0 二中

準決勝 湘南 2 - 2 青山師範

横浜高師主催近県中学校大会

一回戦 湘南 10 - 0 東亜商業

二回戦 湘南 4 - 1 府立園芸

決 勝 湘南 3 - 0 二中

1931(昭和6) 県春季大会

湘南 5 - 0 師範

湘南 4 - 1 二中

湘南 0 - 1 関東学院

東京大会

準決勝 湘南 1 - 0 浜松一中

決 勝 湘南 0 - 0 志太中

再 湘南 0 - 1 志太中

1932(昭和7) 県春季大会

一回戦 湘南 6 - 2 浅野

二回戦 湘南 3 - 1 二中

決 勝 湘南 1 - 4 師範

東京大会

一回戦 湘南 9 - 0 埼玉商

二回戦 湘南 7 - 0 神工

三回戦 湘南 5 - 0 熊谷中

四回戦 湘南 4 - 0 不動丘中

準決勝 湘南 1 - 3 附属中

県リーグ戦

湘南 6 - 0 関東学院 湘南 3 - 0 小田原

湘南 6 - 1 二中 湘南 4 - 0 師範

決勝 湘南 5 - 0 三中

1933(昭和8) 県リーグ戦

湘南 9-0 三中

湘南 3-0 小田原

湘南 3-4 関東

(グループ2位)

三位決定戦 湘南 3-0 二中

1935(昭和10) 第二回関東中学校蹴球選手権大会

一回戦 湘南 0-2 府立五中

県リーグ戦

湘南 7-0 三中

湘南 4-1 小田原

湘南 1-0 師範

湘南 1-1 関東学院

1936(昭和11) 部長 香川幹一

春季県下トーナメント

一回戦 湘南 7-0 川崎中

二回戦 湘南 6-1 小田原

決勝 湘南 3-2 師範

山神静予選

一回戦 湘南 3-0 甲府中

二回戦 湘南 2-0 志太中

三回戦 湘南 0-2 草嶋中

県リーグ戦 優勝

湘南 4-1 関東学院 湘南 1-0 二中

湘南 5-2 師範 湘南 2-1 小田原

神宮大会

一回戦 湘南 3-0 茨城師範

二回戦 湘南 0-6 草嶋中

1937(昭和12) 春季県大会

一回戦	湘南	5 - 1	神工
二回戦	湘南	3 - 0	師範
決 勝	湘南	4 - 3	三中

山神静予選

一回戦	湘南	1 - 0	浜松一中
二回戦	湘南	3 - 1	堺崎中
三回戦	湘南	2 - 1	静岡中

全国大会

一回戦	湘南	1 - 7	埼玉師範
-----	----	-------	------

神宮大会

一回戦	湘南	7 - 1	千葉師範
二回戦	湘南	0 - 12	青山師範

県リーグ戦 (優勝)

湘南	3 - 1	師範	湘南	0 - 0	関東学院
湘南	9 - 1	川崎中	湘南	0 - 0	二中

1939(昭和14) 全国大会山神静予選

一回戦	湘南	4 - 1	浜松
二回戦	湘南	3 - 0	堺崎
決 勝	湘南	3 - 2	二中

全国大会

湘南	5 - 0	高松商	
湘南	4 - 2	青山師	
準決勝	湘南	2 - 2	聖峰中

神宮大会

湘南	5 - 1	聖峰中
湘南	2 - 3	明星商業

1940(昭和15) 関東大会 (優勝)

決勝	湘南	2 - 1	明倫中
----	----	-------	-----

全国大会 1回戦 湘南 1 - 8 普成中

1941(昭和16) 県春季大会及リーグ戦 優勝

関東大会 (優勝)

暁星 浦和 豊島師範に楽勝

決勝 湘南 1 - 0 青師

1942(昭和17) 春季毎日新聞トーナメント大会 優勝

全国大会 修道中に敗れ 3位

1946(昭和21) 復興第1回県下蹴球大会 優勝

国体地区予選 湘南 2 - 0 浦和中

湘南 6 - 0 垂崎中

湘南 1 - 0 仙台一中

第1回国体 (優勝)

決勝 湘南 3 - 2 神戸一中

1948(昭和23) 国体地区予選 湘南 5 - 1 東京付属中

第3回国体 (準優勝)

決勝 湘南 0 - 1 広島高師付属中

1949(昭和24) 国体県予選で小田原高に敗退

県高校リーグ戦(一部)

湘南 不戦勝 鎌倉師範 湘南 5 - 1 小田原高

湘南 2 - 0 横浜三高 湘南 2 - 0 横浜一高

第1回関東高校蹴球選手権大会(宇都宮)

一回戦 湘南 6 - 1 大田原高

二回戦 湘南 1 - 3 春日部高

大毎大会県予選

準決勝 湘南 2 - 1 鎌倉高

決勝 湘南 2 - 3 小田原高

1950(昭和25) 県下春季選手権大会

一回戦 湘南 2 - 4 希望ヶ丘高(横浜一高)

国体県予選

一回戦 湘南 6 - 0 川崎高

二回戦 湘南 6 - 0 慶應高

準決勝 湘南 1 - 2 小田原高

三位決定戦 湘南 4 - 0 Y校

県下春季リーグ戦(一部)

湘南 2 - 0 鎌倉高 湘南 5 - 2 希望ヶ丘高

湘南 2 - 0 横浜三高 湘南 0 - 1 小田原高

第2回全関東高校選手権大会(大宮)

一回戦 湘南 1 - 5 宇都宮高

1951(昭和26) 県春季選手権大会

一回戦 湘南 4 - 0 鎌倉学園

二回戦 湘南 1 - 4 小田原高

国体県予選

一回戦 湘南 1 - 0 Y校

二回戦 湘南 3 - 0 厚木高

準決勝 湘南 4 - 0 神奈川工

決勝 湘南 2 - 1 小田原高

国体南関東予選

準決勝 湘南 1 - 2 北園高

県下リーグ戦(一部)

湘南 3 - 0 Y校 湘南 0 - 0 希望ヶ丘高

湘南 0 - 3 小田原高 湘南 0 - 1 鎌倉学園

大毎全国大会県予選

一回戦 湘南 1 - 0 鎌倉学園

二回戦 湘南 4 - 1 Y校

準決勝 湘南 2 - 3 翠嵐高

第3回全関東高校蹴球選手権大会(湘南高G)

一回戦 湘南 2 - 0 千葉一高

二回戦 湘南 0 - 1 真岡高

1954(昭和29) 国体県予選

一回戦 湘南 0-2 小田原高
湘南 1-2 小田原高(再試合)

第3回東日本大会

一回戦 湘南 6-2 本荘高
二回戦 湘南 2-1 館林高
三回戦 湘南 0-4 教大附

1955(昭和30) 県下新人戦

一回戦 湘南 0-4 小田原高

国体県予選

二回戦 湘南 5-0 栄光学園
二回戦 湘南 4-0 Y校
三回戦 湘南 4-0 法政二高
準決勝 湘南 抽選勝 茅ヶ崎高
決勝 湘南 0-1 翠嵐

1956(昭和31)

1960(昭和35) 関東大会(準優勝)

36 決勝 湘南 1-2 市立浦和

1961(昭和36) 国体県予選(優勝)

37 決勝 湘南 1-0 慶應高

国体

一回戦 湘南 1-2 鶴岡工

全国選手権県予選(優勝)

決勝 湘南 1-0 小田原高

全国選手権

一回戦 湘南 0 - 5 修道高

1962(昭和37) 関東大会県予選

~~40~~ 決 勝 湘南 3 - 1 小田原高

~~38~~ 関東大会

一回戦 湘南 1 - 2 浦和

国体県予選(優勝)

決 勝 湘南 3 - 0 鎌学

国体

一回戦 湘南 1 - 2 徳島商

全国選手権県予選

準々決勝 湘南 0 - 2 慶應

1963(昭和38) 関東大会県予選

~~39~~ 決勝リーグ 第4位

国体県予選

準決勝 鎌学に敗れる

全国選手権県予選

準々決勝 湘南 0 - 3 鎌学

1964(昭和39) 県下新人戦

~~40~~ 準々決勝 湘南 1 - 1 鎌学

関東大会県予選(代表)

決 勝 湘南 6 - 0 藤沢

全国総体県予選(優勝)

決 勝 湘南 3 - 2 藤沢

国体県予選(第2位)

決 勝 湘南 0 - 2 鎌学

全国選手権

準決勝 湘南 1 - 4 鎌学

1965(昭和40) 県下新人戦 (優勝)
41 決勝 湘南 7-0 小田原
関東大会県予選 準優勝(代表)
関東大会 (優勝)
決勝 湘南 1-0 帝京
国体県予選
準決勝 湘南 0-2 慶應
全国選手権県予選 (優勝)
決勝 湘南 2-1 茅ヶ崎
全国選手権
一回戦 湘南 0-0 甲賀

1966(昭和41) 県下新人戦
42 準々決勝 湘南 1-1 相工大附
関東大会県予選 (代表)
湘南 4-0 相工大附
関東大会
一回戦
全国総体県予選
準々決勝 湘南 0-0 相工大附
国体県予選
三回戦 湘南 2-3 県鎌
全国選手権
予選リーグ 2勝3敗

1967(昭和42) 県下新人戦
43 三回戦 相工大附に敗れる
関東大会県予選 (代表)
決勝リーグ 湘南 1-0 鎌学
湘南 0-3 相工大附
湘南 3-0 関東学院

関東大会

一回戦 湘南 1 - 3 館林

全国総体県予選

四回戦 湘南 2 - 5 磐子工

国体県予選

準々決勝 湘南 0 - 3 鎌学

全国選手権県予選 (秋季大会)

湘南 0 - 2 浅野

1968(昭和43) 県下新人戦

44 四回戦 湘南 1 - 4 三崎水産

関東大会県予選

一回戦 湘南 0 - 0 多摩

全国総体県予選

二回戦 湘南 1 - 3 城北工

国体県予選

三回戦 湘南 2 - 4 藤沢

全国選手権県予選 (秋季大会)

ブロック決勝 湘南 1 - 2 向の岡

1969(昭和44) 県下新人戦

45 準々決勝 湘南 0 - 1 相工大附

関東大会県予選

二回戦 湘南 1 - 2 Y校

全国総体県予選

二回戦 湘南 0 - 1 多摩

国体県予選

決勝 湘南 1 - 4 相工大附

1970(昭和45) 県下新人戦 予選リーグ負け

関東大会県予選、決勝リーグ負け

1971(昭和46) 関東大会県予選

四回戦 湘南 0 - 5 多摩

全国総体県予選

一回戦 湘南 0 - 6 大和

全国選手権県予選

一回戦 湘南 0 - 3 北陵

1972(昭和47) 関東大会県予選

三回戦 向上に敗れる

全国総体県予選

三回戦 向の岡工に敗れる

国体、県選抜選手に、曾我敏昌君選ばれ、ベスト8進出

全国選手権県予選

一回戦 湘南 1 - 2 厚木

1973(昭和48) 県下新人戦

二回戦 湘南 0 - 2 関東六浦

関東大会県予選

二回戦 湘南 0 - 2 鎌倉

全国総体県予選

三回戦 日野に敗れる

全国選手権県予選

二回戦 湘南 1 - 2 向の岡工

1974(昭和49) 関東大会県予選 (ブロック決勝)

湘南 1 - 2 鎌倉

全国総体県予選 (ブロック準決勝)

湘南 0 - 2 県須工

1975(昭和50) 県下新人戦

決勝 湘南 0 - 2 相工大附

関東大会県予選 (ブロック決勝)

湘南 0 - 1 希望ヶ丘

全国総体県予選

四回戦 湘南 0 - 4 鎌倉

全国選手権県予選

一次予選 湘南 3 - 3 生田

1976(昭和51) 県下新人戦

一回戦 湘南 1 - 4 緑ヶ丘

国体県選抜メンバーに 八木啓太君選ばれる。

全国選手権県予選 (ベスト8)

湘南 2 - 3 旭

1977(昭和52) 県下新人戦

一回戦 湘南 0 - 1 港南台

関東大会県予選

四回戦 湘南 0 - 1 茅ヶ崎

全国総体県予選

二回戦 湘南 1 - 2 県横須賀

全国選手権県予選 (ベスト8)

湘南 0 - 2 日大

1978(昭和53) 県下新人戦 (ベスト4) 第三位

全国総体県予選 第三位

全国選手権県予選 (ベスト4)

準決勝 湘南 0 - 4 旭

1979(昭和54) 県下新人戦 地区予選

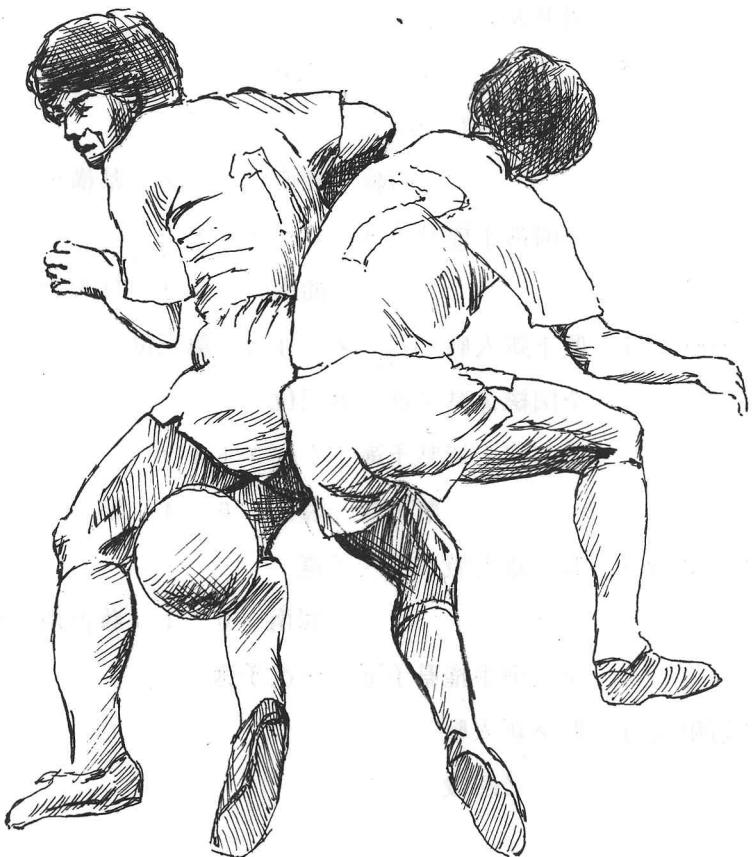
湘南 0 - 1 藤沢西

全国選手権県予選 一次予選

1980(昭和55) 県下新人戦

二回戦

YA



**湘南サッカー半世紀を経て
－岩渕二郎追悼記念－**

1981年8月1日 発行

発行 湘南サッカー部OB会

代表者 安保 隆文

鎌倉市御成町9番1号

電話 0467(22)0226・1794

印刷 中央印刷有限会社

電話 0466(26)5510
